

く最近五箇年間に六千四百餘頭の増加を呈して居る。馬も亦増加し昭和三年には

四千九百餘頭に上り大正十三年に比し二千餘頭の増加を示した。最近五箇年の趨

勢を左に表示しよう。

最近五箇年屠畜及屠肉表

(道廳畜産課調査)

年次	屠畜					屠肉				
	牛	馬	豚	山羊	綿羊	牛	馬	豚	山羊	綿羊
大正十三年	七、三八一	二、八九六	一、七六一	一、四一四	三、三六三	三、三六三	一、二二二	七、五八〇	三、四〇〇	三、四〇〇
大正十四年	七、五八〇	三、〇七〇	一、七六一	一、四一四	三、三六三	三、三六三	一、二二二	七、五八〇	三、四〇〇	三、四〇〇
昭和元年	九、三三八	三、二四三	一、七六一	一、四一四	三、三六三	三、三六三	一、二二二	七、五八〇	三、四〇〇	三、四〇〇
昭和二年	一一、九三〇	三、三九三	一、七六一	一、四一四	三、三六三	三、三六三	一、二二二	七、五八〇	三、四〇〇	三、四〇〇
昭和三年	一三、八〇八	四、九四二	三、三六三	一、四一四	三、三六三	三、三六三	一、二二二	七、五八〇	三、四〇〇	三、四〇〇
計	一、二一八、七五五	三、二一八、七五五	一、二一八、七五五	一、二一八、七五五	一、二一八、七五五	一、二一八、七五五	一、二一八、七五五	一、二一八、七五五	一、二一八、七五五	一、二一八、七五五

家畜屠殺頭數及價額地方別表

(昭和三年中) (道廳統計課調査)

支廳市別	屠殺頭數					價額				
	牛	馬	豚	山羊	綿羊	牛	馬	豚	山羊	綿羊
石川	二、八七	一、三五	一、四	一、三	一、三	四、一、八九三	一、四	一、三	一、三	一、三
上野	一、五二	一、三五	一、四	一、三	一、三	四、一、八九三	一、四	一、三	一、三	一、三
後志	二、八九	一、三五	一、四	一、三	一、三	四、一、八九三	一、四	一、三	一、三	一、三
檜山	三、四一	一、三五	一、四	一、三	一、三	四、一、八九三	一、四	一、三	一、三	一、三
渡辺	三、四一	一、三五	一、四	一、三	一、三	四、一、八九三	一、四	一、三	一、三	一、三
膽野	三、四一	一、三五	一、四	一、三	一、三	四、一、八九三	一、四	一、三	一、三	一、三
浦河	三、四一	一、三五	一、四	一、三	一、三	四、一、八九三	一、四	一、三	一、三	一、三
河内	三、四一	一、三五	一、四	一、三	一、三	四、一、八九三	一、四	一、三	一、三	一、三
釧路	三、四一	一、三五	一、四	一、三	一、三	四、一、八九三	一、四	一、三	一、三	一、三
計	二、二五三	一、三五	一、四	一、三	一、三	四、一、八九三	一、四	一、三	一、三	一、三

官設牧場 昭和三年一月末現在本道に於ける官公立牧場及民有牧場の主なるもの左の通りである。
(昭和三年一月三十一日現在) (道廳畜産課調査)

欠

他建物の新設、器具機械の整備等を行ふ、これが経費は大正十三年度から経績事業として七箇年に約二百三十万圓を算する。

飼育家畜現況表

(昭和四年三月末現在) (道廳畜産課調査)

Table showing livestock statistics by region (North, South, etc.) and species (Cattle, Horses, Pigs, Rabbits, Chickens). Columns include '種別' (Species), '計' (Total), and '飼育頭数' (Number of heads raised).

Table for '鶏' (Chickens) and '七面鳥' (Guinea Fow). Columns include '名色' (Name/Color), '計' (Total), and '飼育頭数' (Number of heads raised).

畜産組合

本道に於ける畜産組合は明治三十三年牛馬組合法發布以前、既に産馬改良を目的とする古い歴史を有つ組合十餘があつた。其主なるものとして、時運に随つて、遂に後産牛馬組合法に依り保護されるに至つた。其後各地に組合の設置を見るに至つた。...

畜産

等の外更に優良種畜の保護奨励、牝牛、耕馬購買配布、家畜共済、酪農設備貸付牧野の設置等各種の奨励施設を爲すものあつて其範圍頗る廣く、効果亦少くない。聯合會は地方費の補助金を受け之を自己の事業に添加して、之を各組合に按配する。...

全國畜産統計 (昭和二年末現在)

Table showing national livestock statistics for various species like 馬飼養頭数, 牛飼養頭数, etc., with counts and gender specifications.

縮せられた結果一般に森林の重要なことが認めらるゝに至つた。かくて本道林政は漸くその緒に着いたのである。我國林政の基礎は明治三十年森林法の發布により初めて確定したのであるが本道は國有未開地の處分等特殊の事情を有する關係上保安林に關する規定の外未だ一般森林法は施行せられてゐない。且本道に於ては土地の利用區分が全く終了してゐないため林業の基本が固定せず従つて森林に對する政策も多少特殊のとなり國有林に於て殊に其の然るべきものがある。然るに本道の森林經營は重要にして看過すべからざるに鑑み明治四十年から之が整理經營に關する方針(拓殖事業の項参照)を樹て經費を豫定支出して大正七年度から拓殖費に編入し着々之が遂行を期し本道林政上遺憾ないことを期してゐる。

林野管理機關
本道の國有森林事業系統は、内務省↓

道廳↓拓殖部↓林務課↓營林區署
↓營林區分署↓保護區となつてゐる。

林務課 職員として事務官一、技師一七、屬二八、助手一七一を置き國有林野の管理に關する事項、國有林野の經營に關する事項を掌つてゐる。
營林區署 札幌、旭川、釧路、網走の四箇所に設け職員技師四、屬七、助手五二名を置いてゐる。
營林區分署 各營林區署に分屬し全道十五箇所に設け屬一五、助手九九名を置いてゐる。其分署所在地左の通り
札幌營林區署所屬分署 室蘭、浦河、俱知安、函館、檜山
旭川營林區署所屬分署 天鹽、中頓別、稚内
釧路營林區署所屬分署 帶廣、遠別、根室、國後、紗那
網走營林區署所屬分署

野付牛、遠輕 保護區 各本署並分署に屬し全道を二百四十の保護區に分け、森林主事二百四十名を置いて森林保護並森林事務に當らせて居る。
最近五箇年森林面積 大正十二年度以降五箇年間の森林面積比較は次の通り
大正十二年度 三、五三七、七四九町
大正十三年度 三、五三二、四三四町
大正十四年度 三、五二五、八八四町
昭和元年度 三、五二五、九六六町
昭和二年度 三、五三六、七三二町
昭和二年度末森林面積地方別 國別分布を見れば左の通り
石狩 三、八、五〇三町 釧路 二、七九、四八八町
後志 三三、四四五町 根室 一、六三、九七五町
渡島 一、九、九八〇町 千島 一、〇六、九三七町
膽振 一、七、四〇〇町 北見 六三、六九四町
日高 三、八、九〇〇町 天鹽 一、四六、五三三町
十勝 三、八、〇〇九町 計 三、五三六、七三三町

本道國有林面積並蓄積高管轄別一覽表

(昭和三年四月一日現在)
道廳林務課調査

署別	保護區數	面積		蓄積	
		針葉樹	闊葉樹	計	保護區平均
札幌	一	一、一八〇、〇二四町	二、三三一、三〇一町	三、五一一、三二五町	三、五一一、三二五町
室蘭	一	六三、八二七町	五、〇一八、一七一町	五、六五六、九八四町	五、六五六、九八四町
浦河	一	一、〇〇〇町	三、〇〇〇町	四、〇〇〇町	四、〇〇〇町
知床	一	一、〇〇〇町	三、〇〇〇町	四、〇〇〇町	四、〇〇〇町
網走	一	一、〇〇〇町	三、〇〇〇町	四、〇〇〇町	四、〇〇〇町
稚内	一	一、〇〇〇町	三、〇〇〇町	四、〇〇〇町	四、〇〇〇町
天鹽	一	一、〇〇〇町	三、〇〇〇町	四、〇〇〇町	四、〇〇〇町
中頓別	一	一、〇〇〇町	三、〇〇〇町	四、〇〇〇町	四、〇〇〇町
釧路	一	一、〇〇〇町	三、〇〇〇町	四、〇〇〇町	四、〇〇〇町
帯廣	一	一、〇〇〇町	三、〇〇〇町	四、〇〇〇町	四、〇〇〇町
遠別	一	一、〇〇〇町	三、〇〇〇町	四、〇〇〇町	四、〇〇〇町
根室	一	一、〇〇〇町	三、〇〇〇町	四、〇〇〇町	四、〇〇〇町
國後	一	一、〇〇〇町	三、〇〇〇町	四、〇〇〇町	四、〇〇〇町
紗那	一	一、〇〇〇町	三、〇〇〇町	四、〇〇〇町	四、〇〇〇町
計	一	一、〇〇〇町	三、〇〇〇町	四、〇〇〇町	四、〇〇〇町

管轄別	面積	蓄積
函館	一、〇〇〇町	三、〇〇〇町
旭川	一、〇〇〇町	三、〇〇〇町
天鹽	一、〇〇〇町	三、〇〇〇町
中頓別	一、〇〇〇町	三、〇〇〇町
釧路	一、〇〇〇町	三、〇〇〇町
帯廣	一、〇〇〇町	三、〇〇〇町
遠別	一、〇〇〇町	三、〇〇〇町
根室	一、〇〇〇町	三、〇〇〇町
國後	一、〇〇〇町	三、〇〇〇町
紗那	一、〇〇〇町	三、〇〇〇町
計	一、〇〇〇町	三、〇〇〇町

備考 (1)面積()内に示したのは北千島を除いたものである。
(2)面積中には森林附屬地を含む。
(3)面積、蓄積は營林財産、雜種財産を合併したものである。

最近五ヶ年保安林面積比較表

(昭和二年度末現在)
道廳林務課調査

管轄別	面積	蓄積
函館	一、〇〇〇町	三、〇〇〇町
旭川	一、〇〇〇町	三、〇〇〇町
天鹽	一、〇〇〇町	三、〇〇〇町
中頓別	一、〇〇〇町	三、〇〇〇町
釧路	一、〇〇〇町	三、〇〇〇町
帯廣	一、〇〇〇町	三、〇〇〇町
遠別	一、〇〇〇町	三、〇〇〇町
根室	一、〇〇〇町	三、〇〇〇町
國後	一、〇〇〇町	三、〇〇〇町
紗那	一、〇〇〇町	三、〇〇〇町
計	一、〇〇〇町	三、〇〇〇町

年 度	薪 材		木 炭		挽 材		計	生 産 歩 合	副 産 品
	積	計	積	計	積	計			
昭和二年	三、七〇、四〇	一、四、八三八	一、四、八三八	六、九一、六〇四	六、九一、六〇四	六、九一、六〇四	五、七%	薪丸、太木、太材、太木、太材、太木、太材	一、〇六七、七三
昭和元年	二、〇九五、一九	一、三、五〇七	一、三、五〇七	五、九七、五二八	五、九七、五二八	五、九七、五二八	五、八%	薪丸、太木、太材、太木、太材、太木、太材	三、七〇六、四四
大正十四年	二、四三九、九八	一、四、五七九	一、四、五七九	五、〇三、五七二	五、〇三、五七二	五、〇三、五七二	五、八%	薪丸、太木、太材、太木、太材、太木、太材	三、七〇六、四四
大正十三年	九、九七、七九	二、五、六四〇	二、五、六四〇	五、二〇、六四〇	五、二〇、六四〇	五、二〇、六四〇	五、九%	薪丸、太木、太材、太木、太材、太木、太材	二、一七五、一三
大正十二年	四、〇七九、八二	二、二、九八四	二、二、九八四	六、三三、四五〇	六、三三、四五〇	六、三三、四五〇	五、八%	薪丸、太木、太材、太木、太材、太木、太材	三、七〇六、四四

(3) 施業案
 本道の本土並に千島に亘つて事業區數を七十八(昭和二年度末)、施業豫定基案を九十八、合計一七七に分けてゐる。今左に昭和二年度末現在に於ける施業作業者種別及施業案地種別を掲げよう。

施業案事業區別一覽表 (昭和二年度末現在) (道廳林務課調査)

施業案地種別	面積	歩合	蓄		伐	
			計	面積	計	面積
擇伐喬林	一、三四六、九五三	六〇、六七	八、五八、四四〇	三、〇五、五二八	一、〇六、七三	三、七〇六、四四
皆伐喬林	一、三〇〇、〇二一	九一、〇七	一、五九、三七一	二、二七、八二二	一、〇六、七三	一、〇六、七三
前更喬林	一、七三六、九七三	四六、〇〇	一、〇五、八七一	一、三三、七九六	一、〇六、七三	一、〇六、七三
矮喬林	一、三〇〇、〇二一	四六、〇〇	一、〇五、八七一	一、三三、七九六	一、〇六、七三	一、〇六、七三
中喬林	一、三〇〇、〇二一	四六、〇〇	一、〇五、八七一	一、三三、七九六	一、〇六、七三	一、〇六、七三
數段喬林	一、三〇〇、〇二一	四六、〇〇	一、〇五、八七一	一、三三、七九六	一、〇六、七三	一、〇六、七三
二段喬林	一、三〇〇、〇二一	四六、〇〇	一、〇五、八七一	一、三三、七九六	一、〇六、七三	一、〇六、七三
作業種ナ	一、三〇〇、〇二一	四六、〇〇	一、〇五、八七一	一、三三、七九六	一、〇六、七三	一、〇六、七三
計	一、三〇〇、〇二一	四六、〇〇	一、〇五、八七一	一、三三、七九六	一、〇六、七三	一、〇六、七三

(5) 造林關係事業
 造林關係事業の主なるものは、造林事業、防風林事業、造林奨励事業、病虫害防除事業、林業試験等である。是等の昭和二年の實施成績を左に掲げよう。

造林事業 該事業は森林造成の中心事業として、先づ苗圃により苗木を育て、人工造林並天然更新によつて森林の増殖維持を圖り防火線の新設手入により是等を保護せんとするものである。即ち昭和二年に於ては

(1) 苗圃 播種、床替、据置の施行面積は二五〇、〇八九坪、山出苗木は四、八九三、九四四本に達した。

(2) 人工造林 新殖一、二七四町、補植一、七六七町で下刈、除材、間伐の手入面積は五、八八六町歩である。

(3) 天然更新 補植六四八町、追植一、〇五七町、下刈二、八一五町、手入一四、六七四町、除材六、四七六町である。

(4) 防火線 人工造林及天然更新によつて防火線を造つてゐるが其成績左の通り

人工新設 毛町 二六六町
 歩道八、三六間 更新(手入)一、七三町
 防風林事業 本事業の主なるものは苗圃施設、人工造林、天然更新の三つ、昭和二年の實施成績は左の通り

(1) 苗圃 播種、床替、据置施行面積五、八三九坪、山出苗木一、二三〇、四九八本
 (2) 人工造林 新殖四〇〇町、補植四〇町、手入一、六八四町
 (3) 天然更新 補植二八町、手入二九八町、除材二一町、追植五八町、下刈一八町、自然生育二七六町
 造林奨励事業 其事業の主なるものは國定苗圃の施設、山苗養成苗圃の育成の二である。其實施成績次の通り

(1) 國定苗圃 播種、床替、据置施行面積二一、七三四坪
 (2) 山苗養成苗圃 實地面積は六、三一五坪で、山苗採取一九五、四三四本、固定苗圃及山苗養成下付本数は四四五、四六二

(3) 造林補助費支出 一、九四一圓
 (4) 防火線補助費支出 五八圓

病虫害防除事業 其主要事業は苗圃病虫害防除、造林地病虫害防除、其實施成績次の通り

(1) 苗圃病虫害防除 二〇七、四九八坪
 (2) 造林地病虫害防除 九、六一六坪
 (3) 害虫検査 三、〇六八、〇〇〇町

林業試験事業 森林經營の合理的經營をなすしめんが爲めに野幌の國有林内に林業試験場を設け、主として該場に於て林業試験を實施してゐる。其事業の主なるものは苗圃、人工造林、天然更新、

二二二
 施業、利用、保護、保安林關係、樹木園蝦夷松、潤葉樹更新、混農林業の各試験並附屬事業等其經費支出高二七、五五〇圓である。

道有林

道有林は模範林と公有林の二種から成つてゐる。模範林は本道公有林に對し林業奨励上營林の模範を示す目的で明治廿九年渡島國外六ヶ國に亘つて臺帳面積十八万八千七百四町四段八畝十五歩を國有林から譲り受けて始めて設けられたもので之の收支は明治四十年から特別會計とし、之から生れる毎年度の利益は全部地方費の一般會計に繰入れて今日に至つてゐるものである。又公有林は國有として存して置く必要のある林地及私有と爲す以外の林地で國有林整理綱領に基き道内十ヶ國に日りに森林面積四十五万町歩を設定し其收益は全部本道市町村の教育、勸業、土木、衛生等の資源に充てる目的で明治四十四年以降森林整理事業の進捗に伴つて漸次割讓され大正十年に於て豫定面積全部の編入が終つた。其後昭和二年第二十七回通常道會に於て公有林費剩餘金處分に關する長官の諮問に對し市町村の土木費、補習教育費、産業技術員に關する經費、社會事業費等の費用に充つる爲めに半額は各市町村に等

割に三割を人口割に殘る二割を面積割となして配附額を決定し既に昭和三年度分として六十萬三千圓の分配を了した。昭和四年度分よりは昨年の道會の決議により之を變更して面積割を除外し六割を平均

等割に殘る四割を人口割として算出されることになつた爲之によつて昭和四年度分として五十三萬五千圓を配分した。而して現在總面積四十五萬三千八百五反三畝十九歩を有してゐる。

道有林所管別面積一覽表

(昭和三年六月末現在 道廳地方林課調査)

所別	保安林	供用林	農耕地	計	保安林	供用林	農耕地	計	合計
湯川	二、〇二二、五九〇	一、五、六四九	九、六二二	一、七、二一七	一、七、二一七	一、七、二一七	一、七、二一七	一、七、二一七	一、七、二一七
福山	一、三三六、七〇〇	一、三、三三三	三、三三三	一、四、〇〇〇	一、四、〇〇〇	一、四、〇〇〇	一、四、〇〇〇	一、四、〇〇〇	一、四、〇〇〇
俱知安	一、三三六、七〇〇	一、三、三三三	三、三三三	一、四、〇〇〇	一、四、〇〇〇	一、四、〇〇〇	一、四、〇〇〇	一、四、〇〇〇	一、四、〇〇〇
追分	一、三三六、七〇〇	一、三、三三三	三、三三三	一、四、〇〇〇	一、四、〇〇〇	一、四、〇〇〇	一、四、〇〇〇	一、四、〇〇〇	一、四、〇〇〇
岩見澤	一、三三六、七〇〇	一、三、三三三	三、三三三	一、四、〇〇〇	一、四、〇〇〇	一、四、〇〇〇	一、四、〇〇〇	一、四、〇〇〇	一、四、〇〇〇
旭川	一、三三六、七〇〇	一、三、三三三	三、三三三	一、四、〇〇〇	一、四、〇〇〇	一、四、〇〇〇	一、四、〇〇〇	一、四、〇〇〇	一、四、〇〇〇
名寄	一、三三六、七〇〇	一、三、三三三	三、三三三	一、四、〇〇〇	一、四、〇〇〇	一、四、〇〇〇	一、四、〇〇〇	一、四、〇〇〇	一、四、〇〇〇
留萌	一、三三六、七〇〇	一、三、三三三	三、三三三	一、四、〇〇〇	一、四、〇〇〇	一、四、〇〇〇	一、四、〇〇〇	一、四、〇〇〇	一、四、〇〇〇
興牛	一、三三六、七〇〇	一、三、三三三	三、三三三	一、四、〇〇〇	一、四、〇〇〇	一、四、〇〇〇	一、四、〇〇〇	一、四、〇〇〇	一、四、〇〇〇
野付	一、三三六、七〇〇	一、三、三三三	三、三三三	一、四、〇〇〇	一、四、〇〇〇	一、四、〇〇〇	一、四、〇〇〇	一、四、〇〇〇	一、四、〇〇〇
池田	一、三三六、七〇〇	一、三、三三三	三、三三三	一、四、〇〇〇	一、四、〇〇〇	一、四、〇〇〇	一、四、〇〇〇	一、四、〇〇〇	一、四、〇〇〇
厚岸	一、三三六、七〇〇	一、三、三三三	三、三三三	一、四、〇〇〇	一、四、〇〇〇	一、四、〇〇〇	一、四、〇〇〇	一、四、〇〇〇	一、四、〇〇〇
浦河	一、三三六、七〇〇	一、三、三三三	三、三三三	一、四、〇〇〇	一、四、〇〇〇	一、四、〇〇〇	一、四、〇〇〇	一、四、〇〇〇	一、四、〇〇〇
計	二、〇二二、五九〇	一、五、六四九	九、六二二	一、七、二一七	一、七、二一七	一、七、二一七	一、七、二一七	一、七、二一七	一、七、二一七

地方林課 地方費に關する森林事務は當初道廳林務課に屬してゐたが模範林を經營する様になつてから國費支辨事務と區別することが便利であることと認め、明治廿九年四月地方林業課を新設して之の經營を爲すと共に地方行政に屬する林業奨励の事務を併せて管掌してゐたが明

治四十年四月課を廢し地方林業係と改め更に明治四十三年五月拓殖部林務課に合併し次で四十四年地方費公有林設置されたのでこの經營もして來たが大正十一年九月道廳處務細則改正と共に再び分課して地方林と改稱せられる様になつたのである。

三箇所に森林事務所を置き其下に監護員駐在所六十一箇所を置いて事業實行並に保護の任に當らせてゐる。昭和三年九月一日現在に於ける事務所所在地及監護員駐在所數左の通り。

湯川 駐在所數 四 留萌 駐在所數 三

福山	五
俱安	五
道分	四
岩澤	八
旭見	四
名寄	六
計	六

經營狀況
一、模範林
施業案編成 全般に亘つて合理的經營を爲す必要を認め明治四十年から同四十四年度に至る間に於て第一次の編成を終り爾來施業期の満了と共に漸次檢定

を行つてゐるが昭和二年度末現在に於て事業區數十七施業面積十七萬四千八百六十三町六反二畝歩、蓄積針葉樹一千四百五十石、潤葉樹約五千五百六十八萬三千石である。

模範林施業面積及蓄積

(昭和三年三月末現在 道廳地方林課調査)

事務所別	事業區	施業地	施業制限地	未利用地	除地	計	針葉樹	潤葉樹	計
湯山	二	一、七二二・八八	二、二〇九・七〇	二、五八六・六一	一、三三九・九四	一、五三三・五二	三、八五七・五三四	一、六五九・五〇〇	一、六五九・五〇〇
福安	二	一、八五二・七二	三、一七五・九〇	二、五八六・六一	二、七〇九・〇〇	二、七〇九・〇〇	一、六五九・五〇〇	一、六五九・五〇〇	一、六五九・五〇〇
俱分	二	一、九〇四・九三	三、一七五・九〇	二、五八六・六一	二、七〇九・〇〇	二、七〇九・〇〇	一、六五九・五〇〇	一、六五九・五〇〇	一、六五九・五〇〇
追分	二	一、七五五・一五	三、一七五・九〇	二、五八六・六一	二、七〇九・〇〇	二、七〇九・〇〇	一、六五九・五〇〇	一、六五九・五〇〇	一、六五九・五〇〇
旭澤	二	二、三九五・二三	三、一七五・九〇	二、五八六・六一	二、七〇九・〇〇	二、七〇九・〇〇	一、六五九・五〇〇	一、六五九・五〇〇	一、六五九・五〇〇
名寄	二	二、四〇四・八一	三、一七五・九〇	二、五八六・六一	二、七〇九・〇〇	二、七〇九・〇〇	一、六五九・五〇〇	一、六五九・五〇〇	一、六五九・五〇〇
野川	二	二、四〇四・八一	三、一七五・九〇	二、五八六・六一	二、七〇九・〇〇	二、七〇九・〇〇	一、六五九・五〇〇	一、六五九・五〇〇	一、六五九・五〇〇
合	計	一四、五六九・八〇	一六、一四四・〇二	二、五八六・六一	一四、五八三・〇〇	一七、四八三・六三	一〇、四五五・八四	五五、六八三・三〇	六五、七三九・三四

模範林植栽標準

(昭和三年三月末現在 道廳地方林課調査)

事務所	事業區	作業級別	作業級面積	未立	立	天	地	然	人	更	植	新
八	一六	皆伐	計	一三、〇八・三三	一〇、〇九・四四	一三、〇八・三三	一〇、〇九・四四	一三、〇八・三三	一〇、〇九・四四	一三、〇八・三三	一〇、〇九・四四	一三、〇八・三三
計	計	計	計	一三、〇八・三三	一〇、〇九・四四	一三、〇八・三三	一〇、〇九・四四	一三、〇八・三三	一〇、〇九・四四	一三、〇八・三三	一〇、〇九・四四	一三、〇八・三三

模範林伐採標準

(昭和三年三月末現在 道廳地方林課調査)

事務所	事業區	作業級別	面積	針葉材	潤葉材	薪材	面積	針葉材	潤葉材	薪材	面積	針葉材	潤葉材	薪材
九	一七	皆伐	計	二、三〇三・〇三	三、三三三・七三	一、一〇一・九二	二、三〇三・〇三	三、三三三・七三	一、一〇一・九二	二、三〇三・〇三	三、三三三・七三	一、一〇一・九二	二、三〇三・〇三	三、三三三・七三
計	計	計	計	二、三〇三・〇三	三、三三三・七三	一、一〇一・九二	二、三〇三・〇三	三、三三三・七三	一、一〇一・九二	二、三〇三・〇三	三、三三三・七三	一、一〇一・九二	二、三〇三・〇三	三、三三三・七三

新伐 施業案標準年度伐量は針葉樹八萬四千二百九十八石潤葉樹四萬三千九百九十九石計五十二萬三千八百八十八石之對し昭和二年に於て針葉樹九萬四千五百六十四石潤葉樹三十三萬九千四百六十二石計四十七萬九千五百二十六石を伐採した。

苗圃事業 造林用苗木は自給主義により現在常置苗圃七箇所面積二十九町七畝十八歩移動苗圃十六箇所面積四町一反八畝二十九歩之を養成してゐる。而して本年度に於て山出した苗木は百四十二萬七千九百八十二本で所要本數百四十三萬一千六百本に對し九十九%に當る生産をした。

造林事業 造林は施業案に則り明治四十一年以降之を實行して來たが諸種の事情によつて植伐の均衡を期することが出来なかつたので大正六年に於て特に造

公有林施業面積及蓄積

(昭和三年三月末現在 道廳地方林課調査)

林計畫を樹て同十年度に於て更に之を改訂し毎年人工造林約四百町歩天然造林約五百六十町歩を施行することとなつた。爾來施業案檢訂に依り年々修正され且同計畫に依る立木地皆伐人工造林と共に昭和二年迄迄實行した面積人工造林四千五百九十八畝歩に達した。

林道防火線事業 森林の保護利用増進並農耕地小作人の交通等に便する爲明治四十一年から事業に着手し大正十年以降は造林計畫に基き爾來施業案檢定に依り年々改訂され昭和二年迄迄に林道二十四萬二千九百四十間防火線八萬一千五間の開鑿をした。

境界調査 本林は元圖上選定の儘附與されたものであるから施業案編成と共に簡易な境界測定を行ひ立木を利用し標杭として來たが管理の集約となるに従つ

て境界を一層明瞭とする必要を認め大正十一年から測量を開始し現在に於て二十九萬一千五百七十四間の査定をした。農耕地の經營 林業労働者の養成並土地の集約的利用を目的とし明治四十四年から林内に農耕地を選定し區劃測定の上小作人を收容したもので五ヶ年餘下期間を附し成功すると共に借地料を徴し且林業労働者として相當資金で雇傭に應ずる義務を負はせた。昭和二年度末現在區劃數八百九十九面積四千四百四十三町で入地戸數七百二十六戸である。

施業案編成 施業案は林地の割讓を受けると共に編成に着手し昭和二年度末に於て事業區數三十五面積四十三萬九千四百九町四反六畝歩の編成を終つた。

に多事多望な状態では等は漸次調査され適當の施設をされるであらう。今既往に於ける概要並昭和二年度に於ける成績を左に記そう。

林業獎勵施設概要

保安林調査 拓地殖民の進展に伴つて民有林で国土保安に關係ある地域に對し濫りに斧鉞を加へ荒廢に委せられるものが尠くない。故に斯様な林野に對しては森林法第十條に依り之を保安林に編入して施業の制限をすると共に、復舊工事又は植樹をさせる必要がある。依て大正八年度から之が調査を開始したが、創始以降昭和二年度末迄調査完了し保安林に編された面積が一万二千六百五十九町歩に達した。而して編入決定箇所を對しては其の位置を瞭かにし違反行為のない様にさせる爲、十年度以降標柱の建設をさせてゐる。

町村有林施業案編成

町村有林野に對する財産上の管理を確實にすべきは町村制の命ずる所て、管理の確實を期するには先づ經營法宜しきを得ねばならぬ。即ち一定の施業方針を確立し、永久永續的經營をさせる必要があるが、而も現在の町村の財政は容易に實況に應ずるの施業を確定し難い實狀に在る。因て道廳では大正八年度以降技術的見地に立脚した施業案の編成に當らせ合理的經營法の誘導を企て専任の吏員を新設し町村の申請

に應じて町村有林の測量並施業案の編成に當らせて居る。創始以來昭和二年度迄に施業案又は施業計畫を樹立したものの七十八箇町村此の面積二万七千六百十六町歩である。

造林獎勵

民間造林獎勵事業を分けて二とする。一は國費事業に屬し樹苗無償交付及特殊樹造林獎勵が即ち是である。即ち明治卅一年全道樞要の地十六箇所に國費で模範苗圃を設け、樹苗養成の範を示すと共に之が養成苗木を普く民間の造林家に無償交付し以て造林思想の普及徹底を圖つたのに其の端緒を開いた。昭和二年度末現在苗圃面積二十町三反二十歩創始以來昭和二年度迄に交付した樹苗數五十三万五千六百七十四本、獎勵金交付額二千二百三十七圓に達してゐる。他の一は地方費事業に屬し荒廢地造林補助が是である。拓殖の進展に連れて林業地として經營する外に他に利用の途のない林地に迄徒らに斧鉞を加へ、此跡地は荒廢に委せられる傾向があるのを鑑み大正九年度荒廢地造林補助規程を制定公布し、市町村其他公共團體又は個人て其所有に屬する荒廢林野に對し一團地一町歩以上の造林をした場合其所要經費に對し相當補助金を交付する途を開いた。創始以降昭和二年度迄に交付した補助金額は十三万四千八百九十圓である。林産増殖獎勵 林産物の増殖獎勵は

明治三十七年度始めて國費を以て廣島縣の實地家督崎主三を招聘し専ら築窯製炭の改善指導に當らせ一面推挙栽培に關する講習講話實地指導を掌らせたるのを其の嚆矢とする。而して三十八年度之を其の費の事業に移し三十九年度に醋散石灰製造の指導をも兼ねさせ、次で四十年度以降は専任の職員を置いて從來の巡回指導の外長期製炭講習會を開き、大正三十五年五月斯業者漸次覺醒の機運に向つたのを認めためたので築窯補助金下付規則を制定公布した。施設以降昭和二年度迄の講習會數九十五、開催延期間二千三百十五日、講習人員數一千九百十二人、補助金額二千八百五十圓である。而して大正十五年以降は農林技手一人を増置し専ら補助移民に對する製炭實地指導に當らせ移住者に對し副業を勸奨すると共に林木の利用と林産の増殖とを計らせてゐる。木炭倉庫建設補助 道産木炭の生産高は最近一箇年五千五百萬貫を突破し道外輸移出高亦二千萬貫に垂んとする趨勢にある。然るに之が輸送驛港に於ける貯藏は倉庫の設備を缺き、殆んど野天積の儘に放置され徒らに品質を損する現況に在るので昭和二年木炭倉庫建設獎勵規程を制定公布し倉庫建築費補助の途を開いた。創始年度に於ける補助金交付件數一件補助額二百圓である。以上の外大正十四年野

鼠驅除劑交付規程の制定公布により驅除劑無償交付の途開かれ、町村又は各種團體其他の集會の機を利用して道廳吏員を

製材工場累年比較表

(道廳林務課調査)

Table with columns for Year (昭和, 大正), Power (有動力, 無動力), and Consumption (原木消費高, 工場平均原木消費高). Rows include years 昭和二年, 昭和三年, 昭和四年, 大正十一年, 大正十二年, 大正十三年, 大正十四年, 大正十五年, 大正十六年, 大正十七年, 大正十八年, 大正十九年, 大正二十年.

して林業思想の普及作興を圖る等の獎勵施設をなしてゐる。

製材工場地方別一覽表

(同上調査)

Table with columns for Prefecture (札室浦, 室浦, 浦, 俱, 南, 檜, 旭, 天, 中, 稚, 釧, 帶, 津), District (知, 頓), and various metrics like Number of Factories, Personnel, and Consumption.

水産業

概況

本道の沿岸は一千三百五十餘里、四面深海を以て繞らし魚族相集り介藻繁茂し時に鯨群の悠々遠洋にその威を示すありて眞に世界三大漁場と稱せらるるや。即ち寒暖二海流の相交る所は彼等安住の郷土であり、本道沿岸の海底臺地(陸棚)は彼等の食餌を得る所と共に又蕃殖の所である。實に本道開拓當初の産業は漁業を以て始まり、往年に於ける生産額は又漁業が首位を占めてゐた。文明が海岸から次第に奥に進む様に開拓の進歩に連れて本道の水産も勢ひ農工に先んぜられ今日では第三位に下つたが、昭和二年の生産額一億二千六百有餘万円に達し、本邦水産總額四億圓の約三分の一を占め依然水産地たる名を辱しめない。

水産業の趨勢一覽

Table showing trends in water production from 1917 to 1934. Columns include year, number of fishermen, number of fishing boats, and various types of fish catch (total, seawater, aquaculture, manufacturing). It also includes per-household and per-person catch data.

鯨、鯨、鰻、鰻、鰻、章魚、柔魚、帆立貝、蟹、昆布等て年産六千五百萬圓、就中鯨は其第一に位し生産額の三分の一を占めて居る。最近免許漁業權數約八千、許可漁業數約一萬八千、之に従事する漁業者四萬七千人、被用者十四萬人を數へ其の使用漁船五萬九千六百餘艘を算する近來發動機付漁船の數噸に増加し漸次沿岸漁業から沖合漁業に進み、回泳魚に對する新規漁業及機船曳網漁業又は深海底延繩漁業等夫々發達を見る様になつた。而して是等發動機付漁船の新造及新規漁業試驗に對しては國費又は地方費を以て補助金を交付し、或は指導を爲す等極力其助長に努力して居る。

處理改善に就ては其事業に補助をなし助長策を講じ又製品の改良統一並に取引の利便を計る爲には從來水産會の自治的検査に一任した水産物検査事業に對し道廳に専任監督官を置いて検査を督勵し徹底的に之が効果を擧げることゝ努めて居る。

Summary table for water production from 1917 to 1934, showing total production and trends.

昭和二年水産概況

(一) 水産業者一覽表

Table listing water producers by category: aquaculture, manufacturing, fishing, and others, with counts for main and secondary roles.

備考 水産價格水産養殖欄中大正九年迄は海獸皮を示す。

(三) 漁業入出稼一覽表

Table showing fishery income and expenses by region (e.g., Ishikawa, Sorachi, Sorachi, Sorachi) and type of fishery (e.g., salmon, sea bream, etc.).

(昭和二年中) 道廳統計課調査

(四) 沿岸漁獲物一覽表

(昭和二年 中 道廳水産課調査)

種類	種類	数量	金額	種類	数量	金額	種類	数量	金額		
										種類	数量
魚類	イシノ	一七四、一三〇、九六	一八、二七、五二八	魚類	サマケ	一五五、一九八	二、八一九、〇九二	魚類	サマケ	一五五、一九八	二、八一九、〇九二
	カツシ	四九、四一、三三九	四、一七、八四七		マス(チマケ)	三六六	二、九四三、八三〇		マス(チマケ)	三六六	二、九四三、八三〇
	カハチ	一、三八八、六七〇	一四、三、四九一		アサギ	三、二四一	九二七		アサギ	三、二四一	九二七
	オヘ	一〇五、二五五	八六、八八八		ウナギ	三、二四一	三、二四一		ウナギ	三、二四一	三、二四一
	マガロ(シビ)	七六四、七八九	四〇、二五六		コナ	一、五九一	一、五九一		コナ	一、五九一	一、五九一
	カサキ	三、二四二	一、一六八		ナギ	三、九四三	三、九四三		ナギ	三、九四三	三、九四三
	アサキ	四、一五〇	四〇、八六八		サマケ	三、九四三	三、九四三		サマケ	三、九四三	三、九四三
	ラ(スケラウ)	一九、七四、六九四	三、二〇、六五二		サマケ	三、九四三	三、九四三		サマケ	三、九四三	三、九四三
貝類	ホクキ	四一六、二二六	三〇、五〇〇	貝類	ホクキ	四一六、二二六	三〇、五〇〇	貝類	ホクキ	四一六、二二六	三〇、五〇〇
	アサキ	二五九、〇一七	三〇、五〇〇		アサキ	二五九、〇一七	三〇、五〇〇		アサキ	二五九、〇一七	三〇、五〇〇
其水産物	エタ	一九、八二二、四一一	六、五六三、七七一	其水産物	エタ	一九、八二二、四一一	六、五六三、七七一	其水産物	エタ	一九、八二二、四一一	六、五六三、七七一
	イ	一、六四五、七三三	六〇四、五八〇		イ	一、六四五、七三三	六〇四、五八〇		イ	一、六四五、七三三	六〇四、五八〇
	カ	六九、九三九	九九、八四九		カ	六九、九三九	九九、八四九		カ	六九、九三九	九九、八四九
藻類	アサキ	一九三、五八八、八一五	一三、七〇、六六三	藻類	アサキ	一九三、五八八、八一五	一三、七〇、六六三	藻類	アサキ	一九三、五八八、八一五	一三、七〇、六六三
	アサキ	九六、二四七	一〇三、二五〇		アサキ	九六、二四七	一〇三、二五〇		アサキ	九六、二四七	一〇三、二五〇
合計	合計	一、三三三、五三〇	一〇九、一五七	合計	合計	一、三三三、五三〇	一〇九、一五七	合計	合計	一、三三三、五三〇	一〇九、一五七

(五) 遠洋漁業一覽表

沖曳網漁業 刺網漁業 延繩漁業 一本釣漁業

(在現末年)船漁		數量	金額	數量	金額	數量	金額	數量	金額
動力機	有動力機								
乗組員數	乗組員數	二、四、一八五	二、〇七九	乗組員數	乗組員數	二、四、一八五	二、〇七九	乗組員數	乗組員數
乗組員數	乗組員數	二、四、一八五	二、〇七九	乗組員數	乗組員數	二、四、一八五	二、〇七九	乗組員數	乗組員數
乗組員數	乗組員數	二、四、一八五	二、〇七九	乗組員數	乗組員數	二、四、一八五	二、〇七九	乗組員數	乗組員數
乗組員數	乗組員數	二、四、一八五	二、〇七九	乗組員數	乗組員數	二、四、一八五	二、〇七九	乗組員數	乗組員數

(六) 水産養殖一覽表

種別	養殖場數	養殖場面積	數量	金額	數量	金額	數量	金額	數量	金額
高獲	高獲	高獲	高獲	高獲	高獲	高獲	高獲	高獲	高獲	高獲
高獲	高獲	高獲	高獲	高獲	高獲	高獲	高獲	高獲	高獲	高獲
高獲	高獲	高獲	高獲	高獲	高獲	高獲	高獲	高獲	高獲	高獲
高獲	高獲	高獲	高獲	高獲	高獲	高獲	高獲	高獲	高獲	高獲

(七) 水産製造物一覽表

水産業

室蘭市 八三、一〇〇 一九、五七三
計 五五九、四七六 三三、七九〇
處理製造 棒鱈、開鱈、シノ鱈を主とする。其他ソホロ、鱈の子、搾粕、鱈肝油等の製品がある。

昭和二年度鱈製造一覽表

Table with columns for fish types (開鱈, 棒鱈, etc.), quantity, and price. Includes a note about the main production area and the period from November to January.

漁獲高及主産地

道各地に棲息する而して本漁業は近年發動機船の使用によつて急激に發達したもので後志支廳管内岩内最も盛に行はれ、後志、檜山、膽振、日高方面之に次ぎ其他全道到る處其産額を見る。漁期は十一月

より翌年五月まで 最近五箇年漁獲表

Table showing fish catch statistics from 1921 to 1926, including quantity and price for various fish types like 鮭, 鱈, and 鰻.

路國支廳管内である。大羽鱈は六、七月の候、其他は十月乃至十二月に盛に漁獲され最近五箇年の漁獲高は左表の通り。最近五箇年漁獲表

主産地、漁期及漁獲高 本道到る處に産し就中後志、石狩、天鹽國に多い。

其種類三十數種あるが内マガレイ、プラガイ、宗八ガイ等重用される。漁期は日本海は冬期から翌年五月迄、又太平洋方面は二月頃から夏季に亘ることが多い。

最近五箇年漁獲高表(鱈)

Table showing salmon catch statistics from 1921 to 1926, including quantity and price for various locations like 室蘭市, 根室, etc.

鮭の沖合漁業として行はれるに至つたのは大正二、三年頃で釧路地方に行はれ、其他は沿岸建網により漁獲される。而其産地は釧路、噴火灣、エトロフ島を主とし其他は後志、檜山、留萌、浦河、膽振各支廳管内に産し六月より十一月末迄漁獲される。

昭和二年度鱈製造一覽表

Table with columns for fish types, quantity, and price. Includes a note about the main production area and the period from November to January.

最近五箇年漁獲高表

Table showing fish catch statistics from 1921 to 1926, including quantity and price for various fish types and locations.

昭和三年 一三、五九
而して昭和三年の主産地は左の通り
後志 三、九六五
渡島 六、〇八八
三、九〇三

主として日本海方面に多く地曳網に依り漁獲せらるゝ外流網、延網等によつて漁獲され、近時益々沖合漁業勃興の機運にある。漁期は六月乃至十月である。

最近五箇年漁獲表

Table with 2 columns: Year (大正十三年 to 昭和三年) and Catch (e.g., 三〇一、三九三H, 二七、七五五)

昭和三年度主産地漁獲高表

Table with 2 columns: Location (留萌, 渡島, 後志) and Catch (e.g., 二八、五六一, 一四、八七四)

右の内筋節は渡島を主産地とし同年度に四五〇貫、八、一八二圓製出された。
根室、北見地方に主産し同地方は沖合

昭和二年 一九、八三三、四二一
昭和三年 八、一八三、五六六
昭和三年度漁獲高地方別表

石狩 一、五八八
後志 三、七五三
渡島 一、九四三、〇八八
根室 四、八五三、二七一
釧路 二、五、六〇〇
河内 二、三、六五四
浦振 二、三、六五四
胆振 二、三、六五四
檜島 二、三、六五四
渡島 二、三、六五四
後志 二、三、六五四
石狩 二、三、六五四

主産地、漁期及漁獲高
種類はスルメイカを主としヤリイカ之に次ぎ其他は甲イカの漁獲も甚だ多い。其産地を見るに太平洋方面にあつては日高、日本海方面にあつては後志國以南には到る處之を産するも就中渡島國を第一とし後志、膽振、日高方面之に次ぐ。漁期は、ヤリイカ四月乃至六月、スルメイカは七月乃至十二月で九月、十月を盛期とする。

最近五箇年漁獲表

Table with 2 columns: Year (大正十三年 to 昭和三年) and Catch (e.g., 六、四七五、八五八H, 九、六七〇、三三三)

大正十三年 三、五八、一八〇貫
大正十四年 三、八七九、二五五貫
昭和元年 八、二七九、六八七貫
昭和二年 三、七七八、二八八貫

本道産品製造業中主要位置を占めるもの必要を認め北見、天鹽二國沖合に於ては昭和二年から五箇年間漁獲を禁止せしむるのみにては國後島東岸沖合及エトロフ島東岸沖合並に北千島に於て漁獲さるのみである。漁期は三月乃至六月及び自九月至十月の二期で北千島にあつては五月乃至九月迄である。

最近五箇年漁獲表

Table with 2 columns: Year (大正十三年 to 昭和三年) and Catch (e.g., 一、三三七、七四八H, 七〇三、九三二)

昭和二年製造一覽表

Table with 2 columns: Product (酢章魚, 釧路國, 宗谷) and Value (e.g., 六八〇、八九四貫, 二七、一四八)

昭和二年 九、九五、五四七
昭和三年 一、〇二五、一九四
昭和三年度漁獲高地方別表

河内 一、〇〇〇貫
釧路 一、〇〇〇貫
室蘭 一、〇〇〇貫
根室 一、〇〇〇貫
計 一、〇〇〇貫

主産地、漁期及漁獲高
種類はスルメイカを主としヤリイカ之に次ぎ其他は甲イカの漁獲も甚だ多い。其産地を見るに太平洋方面にあつては日高、日本海方面にあつては後志國以南には到る處之を産するも就中渡島國を第一とし後志、膽振、日高方面之に次ぐ。漁期は、ヤリイカ四月乃至六月、スルメイカは七月乃至十二月で九月、十月を盛期とする。

最近五箇年漁獲表

Table with 2 columns: Year (大正十三年 to 昭和三年) and Catch (e.g., 六、四七五、八五八H, 九、六七〇、三三三)

大正十三年 三、五八、一八〇貫
大正十四年 三、八七九、二五五貫
昭和元年 八、二七九、六八七貫
昭和二年 三、七七八、二八八貫

本道産品製造業中主要位置を占めるもの必要を認め北見、天鹽二國沖合に於ては昭和二年から五箇年間漁獲を禁止せしむるのみにては國後島東岸沖合及エトロフ島東岸沖合並に北千島に於て漁獲さるのみである。漁期は三月乃至六月及び自九月至十月の二期で北千島にあつては五月乃至九月迄である。

最近五箇年漁獲表

Table with 2 columns: Year (大正十三年 to 昭和三年) and Catch (e.g., 一、三三七、七四八H, 七〇三、九三二)

昭和二年製造一覽表

Table with 2 columns: Product (蟹罐詰, 帆立貝) and Value (e.g., 一九七、三四八貫, 九、九三、〇八一)

高、渡島、天鹽、利尻及禮文島等で、其採取期は七月乃至十月である。

最近五箇年採取表

Table with columns for years (大正十三年, 十四年, 十五年, 十六年, 十七年) and locations (石狩, 後志, 檜山, 渡島, 根室, 釧路, 河内, 浦河, 胆振, 網走, 宗谷, 留萌, 小樽, 函館, 室蘭, 釧路市).

昭和二年製造一覽表

Table with columns for locations (長切昆布, 元揃昆布, 折昆布, 刻昆布, 根室, 宗谷, 浦河, 釧路, 渡島, 檜山, 折昆布, 刻昆布, 函館市, 銀杏, 草) and values.

釧路國一〇、四五〇貫、四五、四七〇圓、根室二〇、四八三九貫、四四、九六七圓である。

海産 (フナリ)

主として根室、釧路、日高、渡島東岸、利尻、禮文等に産する。採取期は三月乃至六月で採取後は日乾にして販賣する。

最近五箇年採取表

Table with columns for years (大正十三年, 十四年, 十五年, 十六年, 十七年) and locations (根室, 宗谷, 浦河, 釧路, 渡島, 檜山, 折昆布, 刻昆布, 函館市, 銀杏, 草).

海産

本道に於ける捕鯨は六月乃至十月の間に太平洋方面を漁場として行はれ、種類は長須鯨、鯨を主とし往々抹香鯨、座頭鯨、背美鯨等漁獲される。

漁獲物は冷蔵の上九州方面に賣出されるもの多く他は罐詰に製造せられ道内に消費せらる。生肉は年五十万斤内外である。大正十五年に於ける捕獲数は左の通り。

鯨捕獲數

産地別 四八圓 六五、五二四圓

Table with columns for species (年古丹, 斜布, 霧多, 室蘭, 種類計) and values.

水産養殖

本道に於ける水産養殖の主なるものは、鮭、鱒の人工孵化で河川湖沼に於ける放流事業である。其他近年池沼に於ける温水魚族の養殖、深河を利用する介藻類の増殖事業漸く勃興するに至つた。

水産業

て居る。其數西別、留別の二官營孵化場の外民營二十一箇所ある。其孵化設備一億四千万粒に達する。以上民營孵化事業に對しては國費で其の設備及經費に補助金を交付して助成を計り専任吏員を常置して指導監督して居る。鮭は後志、檜山、渡島の日本海沿岸地方に産し民營孵化場四箇所、柳葉魚も凡て民營孵化場にて蕃殖を圖り其設備六億二千二百萬粒に達し今後益々勃興の趨勢に在る。

昭和二年度孵化事業成績表 (道廳水産課調査)

Table with columns for species (魚種, 採卵數, 放流數) and values for various fish types like 鮭, 鱒, 紅鱒, 鮎, 柳葉魚, 湖沼養殖.

に於ては鮭の人工孵化を行つてゐる。其他の湖沼は水産試験場に於て基本調査を遂げ養魚計畫を樹立して漸次之を民間の利用に資する豫定になつて居る。池の中養殖 池塘に於ける主たる養殖は鯉魚で之を專業とするもの十箇所、副業的に爲すもの數十箇所ある其産額三萬圓内外である。淺海養殖 本道沿岸は島嶼港灣に乏しく干潟を現出する面積甚だ少く従つて淺海増殖の發達しないのは自然止むを得ない所であるが昆布、銀杏草、海藻、海苔等の蕃殖保護の爲め投石、雜藻除去、混濁土地盤築設等を漁業組合に依つて實施されるもの次第に多く成績を擧げるものも少くない。其他の移殖、牡蠣養殖、帆立貝の害敵驅除等を計るものもあつて將來に於ける本事業發達の餘地頗る大なるものがある。優良品種の移殖 本道在來の増殖を圖ると共に優良種を道外から移殖するを有利と認め從來から之を行ひ既に紅鱒は種卵の供給を爲し得るに至つた。近年に於ては北米産の白鱒ザリガニ、河貝、滋賀縣産鱈、源五郎鮒等を移殖した。重要水族の人工孵化 鱒、鱒、鱒、タラバ蟹等の重要水族は近年益々減少し從來の消極的方法に依つ

ては其の蕃殖を保護するに足らないので人工孵化に依る積極的増殖を必要なりと認め之に關する基礎的試験を爲し其實施可能な確め得たので、先づ鯉に付ては年産百万石を目標とし其他の種類に對しても夫々適當な増殖施設を計畫した。

水産關係團體

大正十年六月水産會法施行以來當局に於て水産會の設立を奨励し郡市水産會十八及北海道水産會の設立を見全道に普及し其事業の主なるものは水産製品検査各種の施設を爲し漸次其成績を擧げて居る。而して行政廳の補助機關としての機能發揮を爲し一方地方費から補助金一萬圓を道水産會に交付し内七千圓を郡市水産會に事業補助として交付させ其の活動を助成して居る。然るに郡水産會の地域は概ね一支廳管轄區域であつた爲め事務の整理及事業の施行其他各種の事項に亘つて支障多く水産會の機能發揮させるのに遺憾の點少くなかつた故に水産會分割の議が起り昭和三年八月以降に於て天鹽國、釧路國、宗谷、渡島、後志の各郡水産會は既に分割し其結果郡市水産會は昭和四年四月現在五十となり尙石狩、日高十勝の各郡水産會は分割手續中に在る。

本道に於ける水産組合は水産會の設立と共に組合事業は水産會に移り、水産組合は漸次解散されたが特殊事業の目的の爲め存置するもの次の通り、組合事業に就て道廳では指導奨励を加へ又は事業補助金を交付して組合事業の發達を助成して居る。

- 機船漁業水産組合 一五五
- 鮭鱒養殖水産組合 一五五
- 陸上蟹鱒結業水産組合 一五五
- 沖合漁業水産組合 一四一
- 北千島水産組合 一四一

漁業組合

本道には漁業組合百五十二あり、同組合の活動如何は漁村の改善發達に至大の關係があるの道廳では之が指導奨励に關しては周到な注意を拂ひ各地に講習講演會を開き組合員の自覺を促し且實地指導に努め適切と認める共同施設を奨励して居る。

- 同業組合 組合員數
- 函館海産同業組合 三三五
- 小樽海産同業組合 一〇三
- 根室千島海産同業組合 一〇三
- 函館刻昆布同業組合 一七
- 北海道水産會 一二

本道水産業の改良發達を圖り水産に關する行政を翼賛する目的で昭和三年九月一日に設立されたもので、會長には道廳長官を擧げ、事務所を道廳水産課内に置いてある。現在會員數は個人會員二、〇五三人、團體會員八十二。

北海道鮭鱒孵化事業協會

昭和三年六月本道孵化事業の改善發達を圖り事業の連絡統一を期する目的で設立され事務所を道廳水産課内に置き會長は道廳産業部長内藤晴三郎氏である。現在會員數は一種會員二十八名(團體二四個人四名)二種會員六十名。

水産製造研究會

大正十四年九月本道に於ける水産製造業の改良發達を圖る目的で設立され事務所は北海道水産會内に置いて居る。昭和三年末現在會員は團體二四二、個人一七八名。

水産物検査研究會

會員相互の親睦連絡と知識技能の向上を圖り本道水産物検査事業の進歩發達に資する目的を以て昭和四年三月十日設立され事務所は道廳水産課内に置いて居る創立日尙淺いが正會員三百名に達し水産物検査及取引に關する調査研究の外各種の事業著々實行の豫定を計畫して居る。

其他の團體

北水協會 財團法人で大正十三年五月北海道水産業の改正發達を圖る目的で

水産試驗場

設立され、事務所を札幌市北三條西七丁目に置き、宅地千九百坪五合を有して居る。
大日一漁 長同志會 社團法人で大正十五年十二月、露領漁業に従事する漁務長及漁夫の實力養成と人格の向上、弊害矯正、風紀改善、露領漁業の改正發達會員相互の利益増進等の目的で設けられ、現在會員百八人、事務所は函館市西濱町に置いて居る。

明治三十四年十二月地方費で水産試驗場を高島町に設立し、水産調査試驗を行つて居たが明治四十三年本道拓殖計畫確立と共に國費支辨となり同時に明治三十四年以來國費を以て高島町辨天島に設置の水産調査部を水産試驗場に合し其事業を經營し其後數多の變遷を経て別表の現状を呈するに至つて居る。而して高島の本

場は昭和四年度から余市町に移轉される豫定である。事業は調査及試験の二に分類され、調査は本道主要水産たる鯉、鮭、鱒、鱒、大鯿、鱒、鰻、海藻類、鮑、海扇、柔魚、海鼠、蟹を始め其他水産に關する科學的調査研究と海洋に關する調査を爲し、漁業の開發並に漁政の指針たらんとするもので、試験は漁撈、製造、養殖の三部に分ち専ら實營上の指導奨励資料と爲す目的で事業を行つて居る。

水産試驗場設備一覽表

(道廳水産課調査)

名稱	位置	擔當區域	施行事業
北海道水産試驗場	後志國高島郡高島町	北海道一圓	漁撈、製造、調査、養殖
函館市支場	函館市	函館市及渡島、檜山兩支廳管内	漁撈、製造、調査、養殖
室蘭市支場	室蘭市	室蘭市及釧路、浦河兩支廳管内	漁撈、製造、調査、養殖
根室市支場	根室市	根室、支廳管内及釧路市	漁撈、製造、調査、養殖
宗谷支場	宗谷支廳管内	宗谷支廳管内	漁撈、製造、調査、養殖
支笏湖鮭鱒孵化場	北見國稚内町	支笏湖	鮭鱒人工孵化ニ關スル試驗及調査

噸二三)の五隻である。

鮭鱒孵化場

現在孵化場は千歳、西別、留別の三箇

所て何れも國費經營に係り鮭鱒族の人工孵化放流、調査、試験、種卵種苗の配布技術員の養成等を行つて居る。

鮭鱒孵化場設備狀況一覽

(道廳水産課調査)

名稱	所在地	設備	人員
北海道水産試驗場	後志國高島郡高島町
函館市支場	函館市
室蘭市支場	室蘭市
根室市支場	根室市
宗谷支場	宗谷支廳管内
支笏湖鮭鱒孵化場	北見國稚内町

昭 和 三 年	昭 和 二 年	昭 和 元 年	大 正 十 三 年	大 正 十 四 年	大 正 十 五 年	年 次	種 別	延		其		他		計	
								鑛區數	延	鑛區數	坪數	鑛區數	坪數	延	坪數
106	102	99	177	177	177	昭和三年	鐵	4	4,310,000	4	4,310,000	4	4,310,000	4	4,310,000
6,361,007	5,820,543	5,547,406	4,310,000	4,310,000	4,310,000	昭和二年	鐵	4	4,310,000	4	4,310,000	4	4,310,000	4	4,310,000
67	68	67	35	35	35	昭和元年	鐵	3	3,000,000	3	3,000,000	3	3,000,000	3	3,000,000
89,245,58	87,331,17	87,141,17	5,820,543	5,820,543	5,820,543	大正十三年	鐵	4	4,310,000	4	4,310,000	4	4,310,000	4	4,310,000
149	149	149	35	35	35	大正十四年	鐵	3	3,000,000	3	3,000,000	3	3,000,000	3	3,000,000
3,827,989	3,990,311	3,990,311	4,310,000	4,310,000	4,310,000	大正十五年	鐵	4	4,310,000	4	4,310,000	4	4,310,000	4	4,310,000
192	192	192	35	35	35	昭和三年	其他	3	3,000,000	3	3,000,000	3	3,000,000	3	3,000,000
121,193,38	129,066,50	129,066,50	4,310,000	4,310,000	4,310,000	昭和二年	其他	3	3,000,000	3	3,000,000	3	3,000,000	3	3,000,000
44	44	44	35	35	35	昭和元年	其他	3	3,000,000	3	3,000,000	3	3,000,000	3	3,000,000
5,107,005	3,827,989	3,827,989	4,310,000	4,310,000	4,310,000	大正十三年	其他	3	3,000,000	3	3,000,000	3	3,000,000	3	3,000,000
5,054,035	5,054,035	5,054,035	4,310,000	4,310,000	4,310,000	大正十四年	其他	3	3,000,000	3	3,000,000	3	3,000,000	3	3,000,000

地方別鑛區數 (昭和三年十二月末日現在) 札幌鑛山監督局調査

國別	種別	金		石		炭		石油		硫		黃		計		砂鑛
		試掘	探掘	試掘	探掘	試掘	探掘	試掘	探掘	試掘	探掘	試掘	探掘	試掘	探掘	
後志	石	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3
天北	石	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
北見	石	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
十勝	石	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
日高	石	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
釧路	石	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
根室	石	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
計		4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4

昭和三年本道鑛産概況

本道の鑛業は金、銀、銅、石炭、石油、硫黄を始めとして各種有用鑛物に富んで

おるので開發後日尙淺いのに不拘逐年隆盛に赴き昭和三年の鑛産物總價額は五千

五百四十三万九百五十六圓に達した今主要鑛物につき其概況を記述すれば左の通りである。(札幌鑛山監督局調査による)

石炭 本鑛業の大宗たる石炭鑛業は炭質の優秀と埋藏量の豊富など因つて開發以來長足の發達をした今既往を顧みるに明治二十年には年産僅に六萬三千餘噸に過ぎなかつたが明治三十年には五十九萬六千九百九十五噸となり、明治四十年には百三十八萬四千三百四十九噸となり、更に十年後の大正六年には三百六十一萬四千六百四十噸の產出を見た。而して昭和三年には市況の不振であつたに拘り六十八萬四千七百三十八噸を產出した。之を大正六年に比すれば八割九分の増産となり更に明治四十年の產額に比する時は實に三十九割の激増となつた。由是觀之本道石炭鑛業の一大發展は近き將來に期待することが出来る。

石油 石油鑛業は明治初年既に着手されて居たが其發達歩々しくなく明治廿八年漸く五千五百餘石出油し、初めて世人の注目を惹くに至つたが其後數年は年々衰微し明治四十四年の產額は千三百五十八石に減少した大正元年漸く回復して五千餘石を產出したが其後亦一進一退の状態にあつたが大正十一年から急に擡頭し來り爾後年々の發達を爲し昭和二年には六万二千七百九石昭和三年には八万二千二百四石を產出し旭日の勢を示した

金及銀 金銀鑛業は最も早くから着目されたのに不拘大正七年頃迄は著しい發展を見ない。其間最も順調であつた明治四十三年に於ても其產額は金八萬二千三百九十一匁銀九十二萬二千三百七十三匁に過ぎなかつたが大正八年頃から優良な鑛山が新に事業を開始したので漸次隆盛に赴き昭和元年には金貳拾六萬一千七百九匁銀二百萬三千七百三十八匁の製出を見、越えて昭和三年には金貳拾七萬四千二百六十一匁銀三百八萬九千二百一十五匁を製出した外金銀鑛三百七十八萬一千五百五十八匁を產出し大に今後の發展を期待される様になつた。

銅 本道の銅鑛業は明治三十九年頃から漸く其緒につき同年の製出高は僅に五千九百五十一斤に過ぎなかつたが爾後漸次盛大に赴き大正五年には年産二百六十七萬三千三百九十三斤に達した然るに大正九年頃から一般銅鑛業不振の大勢に伴ひ其產額は漸減の傾向を示し昭和二年には六十一萬四千三百五十四斤昭和三年には六十八萬四千六百七十七斤を製出したに過ぎなかつた。

鐵 鐵鑛業は其盛衰最も著しく明治廿八年頃漸く勃興の機運に向つたが數年ならずして全然休業の状態となり大正三年歐洲戰亂の刺戟を受け再び擡頭し來り大正八年には鐵鑛十四萬六千二百七十九噸を產出するに至つたが大正十一年以後は

又々工業界の不振に累され產額皆無の悲境に陥つたが大正十四年に至つて俱知安鑛山の復活した外一、二試鑛鑛山の事業に着手したものがあつて同年には鐵鑛一千六百四十七噸の產出を見其後引續き繼續し昭和三年には五萬五千九百三十一噸を產出した。

硫化鐵鑛 本鑛業は大正十二年以降休業中であつたが昭和二年に入り復活し同年は三十二萬三千四百二十三匁を產出し昭和三年には五十七萬八千二百四匁の產出を見た。

滿庵 滿庵鑛業は明治廿八年から明治三十四年頃迄一時著しい發展を爲し其後長く沈衰の状態にあつたが大正四年頃から歐洲戰亂の好影響を受け再び隆盛に向ひ大正七年の產額は二百二十萬八千九百六十九匁の多きに達した然るに歐洲戰亂の燃熄と共に需要減退し漸次不振状態に陥り大正九年の產額は十五萬九千二百四匁に激減したが近時「ラヂオ」の普及と道内製鐵業の復興に依り需要旺盛となつた爲め昭和二年には六十一萬六千四百六十七匁昭和三年には七十五萬八千三百三十九匁の產出を見た。

格魯護鐵鑛 本鑛業は大正五年始めて產額を見たが同年の產出高は三十五萬六千四百五匁であつた以後も顯著な發展を見ない大正九年の四十四萬三千九十七匁を最高とし其後は需給關係上一時衰

微を極め大正十年又復活して四十二万四千二百三十二貫を産したが其後再び振はれない。昭和三年の産額は二十七万二千四百六十七貫を産出したに過ぎない。

硫黄 本道の硫黄鑛業は天恵豊て明治三十四年頃から漸次擡頭し來り大正五年、六年頃最も隆盛を極め年産六万六千餘疋に達し盛に海外に輸出したが歐洲戰亂終熄の頃から海外に於ける需要頓に減少し市價亦低落したので本道硫黄鑛業は

其影響を蒙り産額著しく減少するに至つたが昭和元年下期頃から市況の回復に伴れ幾分活況を呈し昭和三年には二万七千四百八十七疋を産出した。

砂金 明治二十七年、八年頃から隆盛となり明治三十四年には實に二十五万八千二百三十六疋を産出するの盛況に達した。其後漸次衰微し明治四十二年には四万六千四百五十五疋となり大正七年には四万五千五百五十五疋に減少し昭和三年には

一千八百十二疋を産したに過ぎない。

砂白金 大正五年頃から世人の注目する所となり同年には五百七十八疋を採取するに過ぎなかつたが五年後の大正九年には二千三百三十八疋を産出した。其後一進一退の状態にあつたが昭和二年には市價の暴落に累せられ其産額三百八十九疋に激減したが昭和三年には幾分回復して八百二十八疋の産出を見た。

北海道鑛産額累年比較表 (1)

(札幌鑛山監督局調査)

年次	鑛種	金		銀		銅		鐵		鉛	
		數量	價額	數量	價額	數量	價額	數量	價額	數量	價額
大正十三年	大正十三年	一、五八、五七五	二九二、八二五	七、七三、九五六	一四九、七二〇	九、九五、三七〇	四、四四、九四四	—	—	—	—
大正十四年	大正十四年	一、六一、一七〇	二九四、三二二	一、三三、七〇九	二六七、五一一	一、三〇、二四一	五、九八、八七九	—	—	—	—
昭和元年	昭和元年	二、六一、一七〇	三、五六一、九四四	二、一〇、三三三	三、三六、五九八	七、九六、六三三	四、四二、一〇三	—	—	—	—
昭和二年	昭和二年	二、四三、一五三	三、五六一、九四四	二、一〇、三三三	三、三六、五九八	七、九六、六三三	四、四二、一〇三	—	—	—	—
昭和三年	昭和三年	二、七四、二六一	三、五六一、九四四	三、〇八、九二五	四、六五、八四九	六、八四、六七一	三、三三、四八九	—	—	—	—

年次	鑛種	金銀銅鑛		小銀		水銀鑛		鐵鑛		鐵		鉛	
		數量	價額	數量	價額	數量	價額	數量	價額	數量	價額	數量	價額
大正十三年	大正十三年	一、〇五〇、五五六	一八一、四三八	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
大正十四年	大正十四年	三、八七四、四七二	七、七四、八八三	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
昭和元年	昭和元年	五、四〇三、七二二	六八八、一一九	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
昭和二年	昭和二年	五、四〇三、七二二	六八八、一一九	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
昭和三年	昭和三年	三、七四、二六一	六六三、六四八	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—

同上調査 (2) (同上調査)

年次	鑛種	鉛		黑鉛		鉛		格魯漢鐵鑛		硫化鐵鑛		滿侖鐵鑛		石	
		數量	價額	數量	價額	數量	價額	數量	價額	數量	價額	數量	價額	數量	價額
大正十三年	大正十三年	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
大正十四年	大正十四年	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
昭和元年	昭和元年	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
昭和二年	昭和二年	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
昭和三年	昭和三年	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—

年次	鑛種	石油		瓦		硫		黃		砂		砂白金		砂鐵		總價額
		數量	價額	數量	價額	數量	價額	數量	價額	數量	價額	數量	價額	數量	價額	
大正十三年	大正十三年	二、五、〇八三	三、九五四、〇〇〇	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	四三、一五、六九五
大正十四年	大正十四年	四、八、四三七	七、八八九	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	四五、四一、一五九
昭和元年	昭和元年	四、五、八九七	八、八二一	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	四七、六二、九七二
昭和二年	昭和二年	六、二、七〇九	三、四三三	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	五四、四四、九六六
昭和三年	昭和三年	八、二、二〇四	三、八三三	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	五五、四三、〇九五

主要鑛山産額一覽表 (昭和三年中) (札幌鑛山監督局調査)

鑛種	名稱	所在地	鑛業權者	産量		産額
				數量	價額	
石炭	夕張	夕張	夕張炭鑛株式會社	三六、七三〇	一、八八、五五九	
同	三井	三井	三井鑛山株式會社	九四七、五五三	七、七七〇、〇六六	
同	三井	三井	三井鑛山株式會社	九二六、六八三	七、四三五、五〇八	
同	三井	三井	三井鑛山株式會社	六八五、二一八	四、七〇六、一五〇	

石炭需要高累年比較表

(北海道石炭鐵業會調查)

種別	年次	
	大正十三年	大正十四年
内國移出	二、三三、五九	二、三三、九六
外國移出	六九、一三三	一、五四、六二
船舶燃料	一、四三、七四三	一、〇四、九八五
外船出送	八八、三九五	三九、一五五
鐵道消費	一、三三、一三八	一、〇八、一四〇
内道消費	三、五三、〇四九	三、六六、三三六
合計	五、一七三、八〇九	五、五三、八八三
昭和元年	二、六五、三〇五	二、七二、七〇六
昭和二年	八三、六三一	一、〇一、二二七
昭和三年	一、二八、〇四六	一、二八、〇四六

運輸

運輸の便否が鐵業の發達に重大な關係のあることは茲に暇を要しない。本道鐵業は鐵道と共に發達したと云ふよりも寧ろ鐵業に依つて鐵道の發達を促したものであるといふ方が適切である。即ち慶應三年茅沼炭山に於て本邦最初の軌道を敷設し、蒸氣機關車を運轉し、次で幌内炭山開設を目的とした幌内手宮間の鐵道開通し、明治二十三年北海道炭礦鐵道株式會社の創立せらるゝに及んで空知夕張から室蘭に至る鐵道敷設され、明治三十八年末に於ける同社所有鐵道延長二百七哩で本道鐵道總延長五百九十七哩に對し實に

北海道内石炭運賃表

(北海道石炭鐵業會調查)

方面	炭礦發送驛	室蘭		手宮		留萌	
		哩數	運賃	哩數	運賃	哩數	運賃
炭礦	發送驛	室蘭	二、八〇	手宮	二、八〇	留萌	二、八〇
		手宮	二、八〇	留萌	二、八〇		

三四・七%を占めたのを見て、炭礦の開發が如何に交通機關の發達を促し延びて一般拓殖上に貢献したかを知るに充分である。說開歐洲鐵道の發達は千五百年代獨逸國ハルツ鐵道から鐵道運輸の爲め軌條を敷設したのに始まると、東西其軌を一にするも亦奇なりと云ふべきである。昭和三年末本道鐵道總延長哩數は千八百五十七哩(内私線二百五十六哩五分)で其輸送貨物の四五%は石炭である。本道の石炭は後志茅沼炭礦の外殆んど全部鐵道に依つて室蘭、小樽(手宮)、函館、釧路の各港及道内各地に運出されるもので、各炭礦から港頭に至る距離及運賃は別表の通りである。

港灣設備としては室蘭、小樽兩港に石炭積込高架棧橋を設け積込能率の増進及積込費の低減を圖つてゐるが、共に使用後既に十數年を経過してゐる爲め腐朽甚だしく且つ年々増加する石炭取扱に對し能力不十分となつたので鐵道省に於て此改良計畫を樹て本年度から該工事に着手する事になつた。釧路港は設備定全と云ふ事は出来ないが地方炭礦の産出近年激増したため重要な積出港となつた。留萌は今尚ほ築港工事中に屬し最後の炭田亦殆んど未開發の状態にあるが最近關係鐵業家間に留萌鐵道株式會社を創立し大に炭田の開發と港灣の利用を圖らうとしてゐる、不遠一方の勢力となるであらう。

夕張線	新張	若邊	眞地	大張	登川	萬字炭山	
						根室線	根室線
夕張	新張	若邊	眞地	大張	登川	根室線	根室線
九〇	八八	八八	八八	八八	八八	二、八〇	二、八〇
二、六〇	二、五五	二、五五	二、五五	二、五五	二、五五	二、八〇	二、八〇
九八	九八	九八	九八	九八	九八	二、八〇	二、八〇
二、八〇	二、八〇	二、八〇	二、八〇	二、八〇	二、八〇	二、八〇	二、八〇

鐵夫

昭和三年六月末現在鐵業鐵夫數は三三、四〇一人(男三〇、九九三、女二、四〇八)之を鐵種別に示すと左の通り炭礦は全數の九割三分に當つて居る。石炭山 一、九四八 其他 一、一三三 金屬山 一、四四一 計 三、五二二

鐵夫の移動は戰時好況の際に最も甚だしく、爲めに能率の低下、生産の減退を來したことが尠くなかつたが、其後事業界の不振によつて稍々鎮靜し殊に本道各鐵に於ては募集法、待遇法の改善、保安設備の完全、勞資協調機關の設置、教育施設の普及等により人心頓に安定し、移動が著しく減少した。北海道石炭鐵業會の調査によれば大正六・七年の炭鐵夫平均移動率は一ヶ月一〇%以

上て最も移動の烈しい四月、五月にあつては實に一三%以上に及んだが、大正八年平均九・八%、同十年六・四%、同十二年五・九%と漸次低下し、昭和二年には五・二%、昭和三年に於ては四・二%を示した。

由來本道は地元鐵夫に乏しく大部分内地各府縣及朝鮮から募集して來る關係上比較的移動性に富み、殊に四月、五月融雪の候に至ると鯉魚場、農耕地及諸工事に吸引されて移動最も行れ易く、之が防止に關しては精神的に又物質的に經營者の施設を要する點である。

鐵夫の雇傭 鐵夫の雇傭は直接採用の外出張募集、新聞廣告等の方法に依り、内地應募者には旅費を支給し若干の前貸金を與へるのが通例である。採用に當つては戸籍謄本を徴し健康診斷

夫に就き作業の訓練を受けさせる。夫が行ひ、或炭礦に於ては一定期間熱練賃金を特殊の場合即ち美利河滿鐵及砂金地に於ける様に地祿制度(鐵夫の採取した鐵物を一定の價格で買上げる)に依るものがあり、出來高拂は採鐵夫、支柱夫、運搬夫、日給は製鐵夫、選鐵夫、工支夫、雜夫等に適用せられる。支拂日は概ね月一回又は二回であるが、一二月は現金拂をしてゐる所もある。賃金は時給に依つて異なり、一定の標準を示すことと年六月に於ける一工當賃金を示すと左の通りである。

石炭	二、四九
金屬	一、七八
石油	一、九三
硫磺	一、九三
鐵礦	一、九三
石炭	一、九三
金屬	一、九三
石油	一、九三
硫磺	一、九三
鐵礦	一、九三

小樽市南濱町六丁目七番地



樺太工業株式會社

小樽出張所

電話 五七八番・二九七八番

小樽市南濱町六丁目七番地

樺太汽船株式會社

小樽派出所

電話 五七八番・二九七八番

本店 東京市麴町區永樂町二丁目

工業

概況

沿革 本道の工業は、徳川時代に於て幕府が自ら經營の第一線に立つて、或は資金を供給し、或は工業智識の普及に努める等、銳意獎勵を試みたことに始まつてゐる。然し當時は現今の様な交換經濟が發達しないて唯自給自足に傾いて其發達を見るに出来なかつたのである。明治になつて政府の獎勵に依つて官業勃興し製糖、製粉、麥酒、罐詰等の機械工業が相次いで起つたが、民間營利事業の見るべきものなく、多くは試験的の規模また大ではなかつた。

資本主義的營利的色彩を帯びた近代工業勃興の萌芽は明治十九年以降、道廳が政府から移管された官業の全部を民業に移し、從來の直接經營の方針を捨て、資本の移入、補助金の交付等の間接保護主義を執つたことに始まつてゐる。爾來二十餘年間は所謂成立期を成し、各地に新規事業の計畫を見、大小の工場林立し内容の整備も亦此間に行はれて着々と穩健な發達を遂げたのである。

大正に入るに及んで歐洲大戦亂の勃發に會ひ、未曾有の盛況を呈し、遂に其産額本道産業の首位を占むるに至つた。今

工業

之を大正八年の統計に見るに、約一億六千四百萬圓に達し、戦前大正三年の二千万圓に比する時は、約六倍の増加に當り實に隔世の感があるのである。

現況 近時財界の不況の影響を受け、既設事業の整理縮小を餘儀なくされ、戦時中の様な活氣がないと云はれてはゐるが漸次穩健なる發達を見、昭和二年に於ては一億六千六百餘萬圓を算し本道生産業中其首位を占むるに至つたのである。乍然本道の工業は數種大規模の事業を除く外は概ね小資本を擁し、技術また幼稚の域を脱しないものも多く日用品の如きは内地府縣から移入するものが尠くない状態であるが近年概して急速な發達をしてゐる殊に特殊工業である麥酒、製糖、製紙、酒造、製鐵、製鋼、製粉等の如き諸工場隨所に大規模で經營されてゐる。開拓時代に於ける官營事業が民營事業に移つたのに端を發したもので、工業原料である海陸産物の豊富であるのと石炭及水力電氣等の動力の供給の潤澤であるとは相倚り相伴つて累次斯業の發展を促す様になつたのである。如斯由來本道は一大工業地たるの素質を有つてゐるものであるから、これに資本の輸入、技術の招徠を圖り之が助成を爲すことは刻下の急務であるばかりでなく、國民經濟上の重大問題である。故に道廳に於ては夙に此點

二五三

- に留意し企業資金の招徠、既存工業中有望なるものに對しては補助金の交付、技術の養成施設を獎勵する等直接間接工業の發達助長に努めてゐる。又大正十一年には工業試験場を設け昭和二年拓殖計畫の更新に際して從來の地方費經營たるに移し以て各種の研究試験着々行ひ斯業の指導に備へてゐる。本道工業の將來蓋し刮目すべきものがあらう。
- 現在大規模に經營せられてゐる特殊の工業は、麥酒、製糖、製紙、清酒、燒酎、醬油、煉乳、バター、製鐵、製鋼、製糖、製粉(小麥粉、澱粉)、機械器具、船舶、電氣、セメント、肥料、ベニヤ板、薄荷(取卸)、皮革製品、護謨製品、木製品等であるが、甜菜製糖事業の如きは近年著しく發達の状態にあり將來測り知れない潛勢力を有してゐる。大体之等大工業發達の原因によつて大別すれば
- (1) 開拓使時代の積極的獎勵に基因するもの
 - (2) 日用物資自給の必要に依るもの、清酒、味噌、醬油、其他飲食物家具等
 - (3) 事業用具並に原料、セメント、煉瓦、機械類、馬具、船具、農具、木管
 - (4) 本道特産物の加工で罐詰、薄荷、沃度、魚油、製糖、ベニヤ等
 - (5) 副業獎勵の結果、薬工品、竹細工、澱粉
 - (6) 海外需要増加のため勃興したもの、

主要生産品状況

製麻 本道特産の亞麻を原料とするもので紡績作業に移る第一の工程を意味し、帝國製麻株式會社の一手に懸る。即ち農家の耕作した亞麻莖を抜き取り乾燥の上種子を脱落したものを其の栽培地附近に設置されて居る製線に於て碎莖機ムラン機を以て纖維分を採取するものである。累年の生産價額状況左の通り

Table with 2 columns: Year (大正八年 to 昭和二年) and Value (e.g., 五,九二五,三三九円)

機械工業主要製品製造價額表

(道廳商工課調査)

Table with 4 columns: Year (昭和二年 to 大正十三年), 工場數, 使用職工數, 製造價額

機械工業

に屬してゐるが現在工場數十二ヶ所、其生産額四十餘万円に對する百二十餘万円に達し將來の進展を囑望されてゐる。今昭和二年の狀態を左に表示しよう。

概況

本道に於ける機械工業は多種多様であるが、其代表的のものは金屬製煉、鐵工(兵器)、造船、製罐の四である。然し鑄物、原動機、農業用器具機械の製造等は忘れてはならぬ。

兵船製造

兵器製造

二四一

二,〇〇〇

五,四六〇,五五九

五,一四一,六八一

五,八八九,三六五

九,七四四,五三三

備考 本表は工場統計規則により調査したものを基礎にして作製したもので、製造價額は普通生産價額に修繕料、加工料等を合算したものである。

主要製品状況

金屬製煉業(製鐵)

本業は株式會社日本製鋼所輪西工場唯一で當時使用職工の數は八百人に達し、本道代表工場の一である。而して本場は大正十三年室蘭工場から製鐵工場を分離して出來たもので今日其の事業は銑鐵及探鐵並副産物肥料及各種油類製造をしてゐる。原料鐵礦は本道産の褐鐵礦、支那及朝鮮産の赤鐵礦、岩手縣の磁鐵礦等を使用して居るが其多くは道産の褐鐵礦で製鐵されてゐる。

鐵工(兵器)

兵器の製造は株式會社日本製鋼所室蘭工場の一手に懸るものである。同所は明治廿九年北海道炭礦汽船株式會社が、時運の趨勢に鑑み、資金の一部を割き、製鋼、製鐵の事業に投資する計畫を樹て、多數我國に軍艦及兵器の供給をして來た英國阿姆斯特朗及ビッカースの兩社と協同し、資本金一千五百万圓で本邦に斯業を開始することになり明治四十年七月倫敦に於て契約を締結し同年十一月東京に創立總會を開き其設立を見たもので、此事は實に我國民間に於ける製鋼並造兵器業の嚆矢である。

製造價額累年一覽表

(道廳統計課調)

Table with 2 columns: Year (大正三年 to 大正十三年) and Value (e.g., 七三,八〇八円)

大正十四年 三,二〇,〇〇〇
昭和元年 五,〇九,八二六
昭和二年 五,二〇,五〇八

大正十四年 本道に於ける造船の業は其創立古いが、明治廿九年函館船渠株式會社の設立によつて斯業發展の一機軸となり歐洲大戰の勃發に際しては海運界の異數の盛況に連れて大小の造船所成立されたが戰局終結の結果は財界の反動に會ひ深刻に斯業の沈衰を強ひ淘汰される數も多く、今日に於ては僅かに二十有餘の造船所があるに過ぎない而も其大部分は漁船で規模大でなく、只茲に特筆に足るものは函館船渠株式會社のみである。同會社は資本金四百萬圓を擁し、普通船舶の製造に止まらず大汽船の修理補全の上場としての一つである。

製罐業 本道は四圍の環境から夙に海産罐詰業の發達を見たものであるが、之と密接不離の關係に在る罐類の製造は大正四年以降の事に屬し其以前に於ては罐類は道外よりの供給に俟たねばならぬ實狀にあつた。而し歐洲大戰に際しては

海外に於ける物資の缺乏と相俟つて、罐詰の需要は大に増大し、之に伴ふ製罐の業亦一進展を爲すの機運に會ひ、殊に特産蟹、鮭、鱈、鱈鱈は、歐米に確乎不動の商權を把握するに至り、其生産は逐年増加の一路を辿り、加ふるに北洋漁業の進出と工船の勃興は、必然に罐類製造の發展を促し大正十年から小樽市に北海製罐倉庫株式會社(現在資本金百萬元)の設立を見るに至つた。同社は其規模廣大で生産能力の豊なと眞に東洋に冠たるもので、大正四年四月本邦最初の大規模な製罐會社として設立した函館市の日本製罐株式會社

主要製罐製品價額累年表

(道廳統計課調査)

Table with columns for Year (年次), Quantity (數量), Price (價額), and Product Type (製品). Rows include items like 昭和二年, 昭和三年, 昭和四年, 大正十三年, 大正十四年, 大正十五年.

主要製罐製品狀況
セメント
株式會社北海支店工場の生産に係るものである。明治二十三年函館區の有力者吉川泰次郎外三氏發起の下に北海道セメント株式會社の創立されたのが其前身である。爾來經營を續けて來たのであるが

日露戦争後の財界不振の影響により經營困難に陥り遂に大正四年七月淺野セメント株式會社に合併され其の北海道支店となつたのである。合併後直に淺野セメント會社の工場設備に大改善を加へ輪廻は廢し製造方法も淺野式特許生石灰燒成法に改め一意専心品質の改良に努めた結果

逐日信用を博し需要額に増加し機械の増設となり資本金約三百五十萬圓を投じたが更に大正六年春以來巨費を投じて最新の設備を以て第二工場を工場構内に起工し同十一年竣工を遂げ、品質の優と産額の多とを以て誇とする最優良の工場として其聲價を擧ぐるに至つたのである。合併

本製罐兩會社の活躍は期して待つものがある。

本道に於ける製罐業は「セメント」、煉瓦及瓦、硝子製品、陶磁器、「コークス」等であるが、「セメント」及硝子器(麥酒罐)の製造を除いては他は概ね規模狭少で未だ幼稚の域を脱せず産額從つて寡少で後に俟つ所が多い。左に最近の産額を掲げよう。

當時は一ヶ月生産高僅々一萬樽内外に過ぎなかつたが現今は十六萬樽以上に達し東洋に於ける第三位(第一位淺野セメント門司工場、第二位同川崎工場)の工場とまでになつたのである。

北海工場規模

- 敷地其他 工場敷地面積五二、〇〇〇坪
工場建物坪數九、一〇〇坪、職工數九百名、石灰石探掘面積一、二〇〇、〇〇〇坪
○坪、粘土探掘面積三〇〇、〇〇〇坪
主要セメント製造機械
原料部 骸炭窯一三六基、石灰燒成窯二四基、粘土乾燥機六基、フーラーミル一七基、エーヤセレークター一一基
燒成部 石炭乾燥機二基、石炭粉砕用フーラーミル四基、セメント燒成用廻轉窯三基
仕上部 コンベヤミル四基、エーヤセレータ四基
樽詰部 樽詰機二〇基、袋詰機一基
原動機 廢熱利用蒸氣汽罐五基、蒸氣タービン並に發電機一、五〇〇KW一基、〇〇KW一基、電動機五百馬力以下各種一〇七基
動力 工場平均所要動力五千馬力
セメント生産能力年額百八十萬樽
以上の通りであるが其原料は石灰石、

粘土は工場附近から採掘し、石炭木材鐵粉は道内に求め、石膏は秋田地方から得てゐる。而して其製品の約七割は道内に於て消費され他は奥羽、北陸地方及樺太に仕向けられてゐる。本道は原料豊富なので將來土木建築業の發達と相俟つて斯業の進展に値するものがある。
煉瓦、瓦及土管
本業の其起源は古く其發達遲々として振はなかつた。歐大正七年の統計に見るに三十六の煉瓦製造工場を有し、其使用職工數八百餘人、生産高二千五百餘萬圓、五十三萬餘圓を算し、瓦製造工場十二ヶ所、生産高四十四萬圓、二萬四千圓に達し、爾後大に進展の趨勢に在つたが財界の反動に遭遇して廢業する者多く昭和二年末に於ては製造場數 製造場數 職工數
煉瓦 一四 三二
土管 一五 九

達するものと思はれる。但し本道は積雪多量に上る關係上瓦葺にするもの少く從つて需要の實際に照して瓦製造の發達は期待出來ない。主産地、煉瓦は石狩支管内で全道の約七割五分、瓦は檜山、石狩、網走の各支管内、土管は石狩支管内である。
硝子製品
昭和二年末現在で硝子製品工場は道内各地十二ヶ所あるが、大日本麥酒株式會社札幌支店工場の「ビール」罐製造の外は小規模な硝子屑を原料とする牛乳罐、投藥罐の製造に過ぎない。従つて本道に於て需要する板硝子及硝子器の移入は毎年百萬圓を超過してゐる。昭和二年に於ては其生産價額十一萬五千餘圓の函館市第一位を占め、七萬八千餘圓の札幌市に亞いてゐるが札幌市の九割七分は罐類であつて其産額は全道の約六割に當つて居る。
陶磁器
本道の起源は古いが優良原料の發見が出來なかつたのと技術に欠ける所があつて其發達程度は實に遅々たるもので昭和二年末現在極小規模の工場十ヶ所、其使用職工數僅々三十六人で産額も三萬圓に過ぎない。然し先年工業試驗場を設置以來同場に於ては斯業興隆の爲め調査研究を重ねて居るが既に新たな優良原料の發見を爲し範を示して目下當業者に對し指導獎勵をして居るので自給自足の域に達するは之を遠い將

來に待たねばならぬとしても、相當の發達を見るのは疑のない所である。而して現在會社組織で將來に發展を期し着々歩を進めて居るものに札幌郡江別町宇野幌に地を卜する北海道窯業株式會社がある。昭和二年に於て函館市九千六百餘圓を産し第一位を占め、石狩支廳管内八千七百餘圓で第二位で札幌市の五千八百圓に次いでゐる。

コークス

歐洲戰亂當時は一時盛況を呈したが戰後の不振に一頓挫を來し、今日に於ては比較的小規模な岩見澤町の大倉炭製造所、夕張町の三菱炭礦附屬夕張炭製造所及北海道瓦斯株式會社の札幌、鹽谷の兩工場に於て副産物的の製造あるのみで其の産額も一千四百萬斤、價額十五、六萬圓程度に止まつて居る。然し本道は氣候の關係上燃料として本品の需要決して尠いものでなく且原料たる石炭は豊富なので、一旦斯界に好況を萌すと其の發展は疑ひがない。昭和二年の生産價額空知一〇、一九二圓、後志六〇、二二三圓、札幌市四二、〇六八圓、函館市四四、三七五圓で、計一五六、八九八圓。

化學工業

本道に於ける化學工業の主なるものは製紙、製薬、護膜、肥料、油脂類(魚蠟及蠟燭を含む)及石鹼の製造並取卸薄荷

等である。之等の内、其經營の規模最も大で設備亦完全し多額の生産を擧げて居るものに先づ第一に指を製紙業に屈せねばならぬ。王子、富士の兩製紙工場は即ち其代表的のものである。之に亞ぐは護膜工業で、本業は最近實に顯著な發達を遂げ府縣先進の地を凌駕する趨勢である。第三は人造肥料で函館に大日本人造肥料株式會社の工場があり、室蘭には日本製鋼所輪西工場の副産的硫酸安母尼亞の生産があつて、此の兩者は即ち本道人造肥料界の代表的のものである。尙ほ本道には特産地である周知の如く本道は薄荷の産地を占めて居るのである。然し惜しい事は未だ本道には精製工場がなく薄荷栽培地方の農家に於て副産的に薄荷草を蒸溜して取卸薄荷と爲すのみである。而して右の外製薬、油脂類及石鹼の製造等があるが之等は副産的或は其の經營狭少乃至幼稚の域を脱して居ないもので其の發展は今後に俟たねばならぬ實情にある。

製紙工業

現在本道の製紙業は之を大別して木材を原料とするバルブ及洋紙類の製造と和紙漉返し紙の製造の二者と爲すことが出来る。

戰亂は終熄し文化は進展し洋紙の需要之に伴つて増大し今や其生産高は三億三千五百萬封度(昭和二年中の産額)に對する價額二千九百餘萬圓を示して三千万圓に程近く、我國新聞紙生産高の七割五分に當つて居るのである。これを以て見ても如何に本道の製紙業が我國に於て重要なものであるかを察知されよう。又最近のものでは印刷紙として多量の輸出を爲しつゝあるが兎角支那は懸案事情に絡まれて輸出の上にも變化の甚しいものがある。然し事態が安定して其の文化が開發され國民教育の普及を見るに於ては四億の人口に對する子弟の教科書のみにて

紙製造高累年及地方別一覽表

(道廳統計課調査)

Table with columns for '區分' (Division), '製造場數' (Number of manufacturing sites), '職工數' (Number of workers), '印刷料' (Printing cost), '紙價' (Paper price), '包裝用紙' (Packaging paper), '半造' (Semi-finished), '漉返し' (Recycled paper), '其他' (Others), and '價額計' (Total value). Rows include '大正' (Taisho) and '昭和' (Showa) years, and '支廳及市別' (By Prefecture and City) with '昭和二年' (Showa 2nd Year) data.

りと言ひ得るのである。尙洋紙製品の主なるものは新聞紙、模造紙、ハトロン紙、紡績包紙、蠶座紙、ロール紙等であるが、就中新聞紙は既述の如く總生産高の九割を占めて居るのである。漉返し紙 本道に於ける漉返し紙の製造は明治初年の開拓使時代から營まれたのであるが其後遅々とし振はない。然し産額は逐年増加し今日に於ては六、七十萬圓の生産を擧げてゐる。其製造工場は函館の北日本製紙株式會社及函館製紙會社、小樽の北海製紙株式會社、札幌の藤井製紙所の四がある。

バルブ及洋紙 本道に於ける木材を原料とするバルブ及洋紙の製造は日露戰爭直後に於ける我國印刷紙の激増に刺戟されて富士製紙會社及王子製紙株式會社が原料材たるトド松、エゾ松の本道に豊富なのを見て取り其製造工場設置の議を起し、富士は江別町に明治三十九年八月工事を着手し、王子は苫小牧に明治四十年六月工を起し同四十二年春竣工九月から其製造を開始したのに始まつた。一方富士は上川郡金山に地を卜し原料バルブの製造工場を設け専らバルブの製造に従事して其製品を江別工場に供給させ、更に大正七年十月には十勝池田の地に姉妹會社たる富士バルブ株式會社(大正十二年十月富士製紙株式會社が買収合併した工場を新設し、次で大正九年七月釧路郡鳥取村にバルブ及洋紙の兩設備を裝ふ工場の設置を爲し陣容は茲に整ひ社運は富士及王子共に昇天の勢を示すに至つたのであるが其後格段なる輸入洋紙の爲め兩社共經營上甚大なる打撃を被つたが一度歐洲大戰勃發するや外來洋紙の輸入杜絶すると共に斯界は一躍活況に轉じ機械の増設、工場の新設となり、生産能力は大に擧り本邦需要の大部分は之を充し得るに至り、其結果外來洋紙を完全に喰止める餘剰を海外に仕向けるの隆盛を見るに至つた。

年次	全		支		支	市	別	高
	製造場數	職工數	製造場數	職工數				
大正十二年	六	一、八四五	一	九四〇	計	別	高	一、一八二、九六七、九〇八、三三三、七二一、四八四、四七二、四〇三、一三三、七八一、四六〇、四〇五、一、二六七、一六一、
大正十三年	六	一、九五一	一	九〇	計	別	高	二、一〇五、七二四、二六四、九三、六七五、三、〇四、一、一五、九八、五六九、九八、五六九、一六三、八二四、四六五、〇七七、六二二、〇五六、
大正十四年	六	一、六六六	一	二二一	計	別	高	一、一八二、九六七、九〇八、三三三、七二一、四八四、四七二、四〇三、一三三、七八一、四六〇、四〇五、一、二六七、一六一、
昭和二年	四	一、六八三	一	四〇二	計	別	高	二、一〇五、七二四、二六四、九三、六七五、三、〇四、一、一五、九八、五六九、九八、五六九、一六三、八二四、四六五、〇七七、六二二、〇五六、
昭和二年	四	一、六六三	一	一、六六三	計	別	高	二、一〇五、七二四、二六四、九三、六七五、三、〇四、一、一五、九八、五六九、九八、五六九、一六三、八二四、四六五、〇七七、六二二、〇五六、

パルプ製造高累年及地方別一覽表 (道廳統計課調査)

年次	全		支		支	市	別	高
	製造場數	職工數	製造場數	職工數				
大正十二年	六	一、八四五	一	九四〇	計	別	高	一、一八二、九六七、九〇八、三三三、七二一、四八四、四七二、四〇三、一三三、七八一、四六〇、四〇五、一、二六七、一六一、
大正十三年	六	一、九五一	一	九〇	計	別	高	二、一〇五、七二四、二六四、九三、六七五、三、〇四、一、一五、九八、五六九、九八、五六九、一六三、八二四、四六五、〇七七、六二二、〇五六、
大正十四年	六	一、六六六	一	二二一	計	別	高	一、一八二、九六七、九〇八、三三三、七二一、四八四、四七二、四〇三、一三三、七八一、四六〇、四〇五、一、二六七、一六一、
昭和二年	四	一、六八三	一	四〇二	計	別	高	二、一〇五、七二四、二六四、九三、六七五、三、〇四、一、一五、九八、五六九、九八、五六九、一六三、八二四、四六五、〇七七、六二二、〇五六、
昭和二年	四	一、六六三	一	一、六六三	計	別	高	二、一〇五、七二四、二六四、九三、六七五、三、〇四、一、一五、九八、五六九、九八、五六九、一六三、八二四、四六五、〇七七、六二二、〇五六、

護謨製造業

本市に於ける護謨工業は大正八年小樽市に設立された北海護謨工業合資會社に依り其端が開かれ、茲に始めて組織立つた護謨製品の生産を見るに至つたものである。其の發達は斯業の起源が浅いにも拘らず、長足の進歩を示し、昭和二年の統計に見るに其製作工場十八、之が使用職工數千七百七十一人で、生産總額は二百八十

餘万円に上り、今後益々増産の趨勢にある。而して製品の大部分は靴類で、其他ホース等の生産もある。且つ製作技術は既に熟達の域に達し、體裁及耐久力共に優秀で、先進府縣を遙に凌駕するの現況である。然し本市は氣候の關係上護謨靴の需要殊に多く、今日の生産に於ては未だ以て自給自足の域に達せず、猶ほ相當多くの道外移入をしてゐる。就一面には道産護謨靴

護謨製品高累年及地方別一覽表 (道廳統計課調査)

年次	全		支		支	市	別	高
	製造場數	職工數	製造場數	職工數				
大正十一年	一	二、四五	一	一〇〇	計	別	高	三、八、〇一九、
大正十二年	一	二、三三	一	一〇〇	計	別	高	三、八、〇一九、
大正十三年	一	二、三三	一	一〇〇	計	別	高	三、八、〇一九、
大正十四年	一	二、三三	一	一〇〇	計	別	高	三、八、〇一九、
昭和二年	一	二、三三	一	一〇〇	計	別	高	三、八、〇一九、

人造肥料製造業

本市に於ける農業の經營は年々所謂掠奪農業の域を脱して合理的の經營に向つて進んで居ると共に耕地面積の擴張に依り或は多收を望む爲の手段として、肥料の消費は逐年増加の傾向にある。元來本の消費は魚肥の生産巨額に上るものであるが、道より地質の關係で他肥料の需要も多く、植物質の大豆油粕の如きは滿洲よりの輸入に依り其の需要を満して居る。然し、礦物質肥料たる過磷酸石灰及硫酸安母尼亞は本市に於て生産せられ、又動物質及調合肥料の生産も相當に多く之等は、克く本市肥料の需給關係を圓滑ならしめて居る。而して本市に於ける人造肥料の製造は明治三十九年に始まり、其後幾多の消長を経て今日に至り、昭和二年の生産高百七十餘万円を示すに至つた。其生産額の最も多いのは、礦物質肥料で、此礦物質肥料の内

過磷酸石灰は七十五万円、硫酸安母尼亞は三十餘万円、日本製鋼所輪西工場に生産に係るものである。此外動物質植物質及調合肥料等を合し六十餘万円、の生産あり、其製造工場も十七を算へるが、之等は概して規模狭少で機械的生產の工業的價値は極めて少い。兎も角、本市人造肥料界を代表するものは、前記過磷酸石灰を製造する大日本人造肥料株式會社と硫酸安母尼亞を製造する日本製鋼所輪西工場との兩者である。

昭和二年人造肥料生産高 (道廳商工課調査)

礦物質	七四八、〇四五、H
動物質	三〇〇、〇三五
硫酸安母尼亞	四九、九三三
調動植物質	四六、六五八
合計	一、一七四、三七八
	一、七〇九、〇四八

取卸薄荷 本市に於ける薄荷の栽培は明治二十五年山形縣から上川郡永山村に種苗を移植したのに濫觴し、取卸薄荷も亦此時に始まつて居る。其後一張一弛を経て、戦前即ち大正三年には高調に達し、其作付一萬一千町歩に上つたのである。其作付増加し、好況時代の出現に他農作物の作付増加し、薄荷の如きは殆んど壓倒された形となり、暫くは其形を潜ませる状態に陥つた。然し、薄荷は醫藥、工業用、香料或は化粧料等として文化の發達と共に其用途を増加するの、其後徐々に恢復し、昭和二年に於ては其作付一萬二千五百八十町歩に達して居る。

既述の如く本市は世界に於ける薄荷の特産地で、全世界生産の約六割を占めて居るが、惜しい哉、未だ本市には精製工場の見られず、其の工業的價値の豊な此薄

荷に對しては唯農家が苧取つた薄荷草を蒸溜して腦分と油分とに分離せしめ取卸る。薄荷となすのみで全くの副業的生産である。かくして取卸薄荷の儘神戸、横濱等の大手筋に買付けられ同地に於て精製の上更に輪移出されて居る。本道に於て精製を爲し海外に向つて眞に天然薄荷の生産地とし面目を發揮し得る日は何時であらうか。然し目下工業試験場に於て之が試験研究に努めて居るから資金さへ順調に取運ばれさへすれば其實現も強ち遠い將來ではあるまいと思はれる。

昭和二年取卸薄荷生産高表

Table with columns: 支廳市別 (支廳市別), 數量 (數量), 價額 (價額), 單價 (單價). Rows include 空知, 上川, 後志, 河内, 釧路, 網走, 宗谷, 留萌, 計, 即ち網走支廳管内は全道の八割六分餘を占めて居る.

工業藥品、賣藥及其他

現在本道に於ける工業藥品としては沃度、鹽化加里、ベンゾール、クレオソール、酒精、酸素等を挙げ得るが獨立的の工

業的價値のあるものは殆んどないと云つてもよい。それに昭和二年の生産總額百六十九万四千餘圓を示して居るとは云へ個々の生産額は僅々のものである。兎に角本道に於ける工業藥品の製造は今後の發展に俟たねばならぬ。沃度及鹽化加里 各種工業品中生産額の最も多きを占めて居るものは沃度である。沃度は明治六年釧路方面に於て製造されたのが創始である。元來本道沿岸は海産物に昆布の生産多く從て沃度及鹽化加里の製造も逐年増加し歐洲大戦當時需要激増し其産額(大正六年の工業藥品總額)主として沃度及鹽化加里)六百萬圓に垂んとするの盛況を示したが其後財界の反動に頓挫し昭和二年に於ては沃度七十二万八千餘圓、鹽化加里二万四千圓餘となり往時の盛況は見られない。

昭和二年沃度製造高

Table with columns: 釧路, 留萌, 根室, 計, 他, 共計. Rows include 釧路, 留萌, 根室, 計, 他, 共計. Values for 釧路: 三〇三、六六六円; 留萌: 一七、六三三円; 根室: 二、〇七一円; 計: 三二二、三〇七円; 他: 一、六七、七四六円; 共計: 三二三、九八三円.

帶廣町の北海道製糖株式会社

製材及木製品工業

硬化油、肝油、蠟燭等は生産額の僅少なもののみである。今猶ほ二十四億萬石の材積を蓄藏する本道は毎年多量の各種優良用材を製出し

製材及木製品製産價額表

Table with columns: 區分 (區分), 工場數 (工場數), 使用職工數 (使用職工數), 昭和二年 (昭和二年), 昭和元年 (昭和元年), 大正十四年 (大正十四年). Rows include 製材 (製材), 木製品 (木製品), 鉛筆軸木 (鉛筆軸木), 合板 (合板), 薄板 (薄板), 經木 (經木).

備考 本表は道廳商工課編纂「北海道の商工要覽」による。

本道に於けるベニヤ板の製造工場は現在二ヶ所あるが其一は規模狭少で生産亦寥寥たるものであるが、十勝止若の合資會社新田ベニヤ製造工場は東洋に於ける工場中最も進歩した設備と最大の能力を有するもので、本道に於ける代表的工場として誇りの一である。原料材は道産潤葉樹のナラ、カシハ、ヤチダモ、カイデ、アサダ、カバ、セン、カツラ、シナ等を主とするが其他府縣産の杉、桐、樺及外國産のマホガニー、チーク、スラビヤ等

も用ひてゐる。因に合資會社新田ベニヤ製造所は大正八年五月の設置である。現在薄板經木工場は十四ヶ所あつて毎年六、七十萬圓の生産を擧げ、ベニヤ板用に、包装用に將又折箱用に其の需要を年々高めてゐる。鉛筆軸木 鉛筆軸木の製産は未だ多くはないが、原料は豊富であり需要關係の如何によつては相當進展するに疑がない。代表工場としては旭川市に山下鉛筆製材所がある

本製品は履物、挽物(轆轤細工)曲物、箱類、箸類等其産額合計して九百萬圓に垂んとしてゐるが優良原料の豊富と相俟て進展の趨勢にある。今左に昭和二年に於ける木製品の生産額八百七十六万八百九十五圓(道廳統計課調)の内譯を掲げよう。履物 七四九、四七四円 箱類 一、四四、二〇二円 轆轤細工 六三三、七五六円 桶樽 一、六六、八九七円 曲物 一五七、九二一円 箸 一三三、〇四六円 指物 四、二四、五三八円 合計 八、七〇、八九五円 之を地方別に見るに其主産地は函館市 三〇四、二八〇円 渡島一、一五、七五五円

て居り木材を原料とする製作業亦大に發展の趨勢にある。殊にベニヤ板及ベニヤドアー並家具類の製作は技巧の進歩、體裁の優美、質の堅牢等相俟て其の需要を彌が上にも増大せしめて居る。

石鹼は札幌市の羽鳥千賀恵(粉末石鹼)小樽市の西村石鹼製造所及旭川市の北星石鹼株式會社に於て製造され、植物油(菜種油、亞麻仁油及椿油)中菜種油は混合製油したのと異なり絶對優品として小樽市北海製油株式會社に於て製造されてゐる。亞麻仁油は小樽市小樽製油株式會社の製造に係り塗料及工業用として價値が多い。硬化油は本道に多量生産される鯉及鯉油を以て製造されるもので石鹼蠟燭、人造バター、化粧用油、靴クリム等の原料として道内は勿論府縣にも移出されて居る。小樽市北海油脂工業株式

に於て糖蜜を原料としてこれ亦最近生産せられる様になつたもので將來は甜菜製糖の増産と共に彌々増加するは疑ひない所である。昭和二年六七三石約十四萬圓を産した。硫酸礬土 株式會社末次商會苦小牧工場の生産に係り昭和二年三萬餘圓生産。酸素 合資會社三省社小樽製油所及函館酸素株式會社の兩者に於て製造され昭和二年中に小樽市十四萬餘圓、函館市六萬八千餘圓の製産を擧げた。賣藥 賣藥の製造は札幌市に三星藥品株式會社工場が唯一つあるのみで昭和二年末統計を見るに職工十人、製造價額 七五、二八二圓、主として脚氣藥「コルンエキス」を製造してゐる。

札幌市一、四三、三三
函館市總生産高の約三割四分を占めて
ゐる。

印刷製本業

文化の向上が齎す必然の趨勢として、

近年斯業の發達は實に顯著なるものがある
然し製本業に就ては中央の夫れに歴せら
れて未だ見るべきものがないのが甚だ遺
憾である。今最近に於ける製造價額(工
賃)を掲げると

區分	昭和二年		昭和元年		大正十四年	
	工場數	使用職工數	製造價額	製造價額	製造價額	製造價額
活版印刷業	一、五四三	八、五八八、六六三	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇
其他印刷業	二、八四四	二、八四四	三、八八〇、〇五三	三、八八〇、〇五三	四、七三三、八三三	四、七三三、八三三
製本業	五二	九四	一、四八、九〇四	一、四八、九〇四	四、五〇七、五七四	四、五〇七、五七四

備考 本表は大正十二年農務省令第十二號工場統計規則に基くもので一般工産總額の表には加へられて無きもの。道廳商工課調査による。

俟たねばならない状態にある。

食料品工業

概況

本道に於ける食料品工業は之を醸造、製粉、製糖、製菓、罐詰、乳肉製品、製氷、清涼飲料製造及製麵の九に分類して見るを便宜とする。

本道開發の當初に於ては日用食料品の大部分は之を道外よりの供給に俟たねばならなかつたが天與の資源に恵まれて居

る本道は漸次拓殖の進展に伴ひ農産、水産等の自然的食用品は生産増大と共に加工生産の業亦大いに其の發展を促され就中、ビール、清酒、小麥粉、澱粉、砂糖(ビート糖)、罐詰(蟹、鮭、鱒)、バター、煉乳等の加工食品に至つては其量は勿論品質に於ても府縣産品乃至外國産品に對抗し寧ろ優秀の地位を占むるに至り年々多量の移輸出をして居る。殊にビート糖は本道の特産品として米國の需給關係に重要な使命を有し蟹、鮭、鱒の罐詰亦本道に於ける特産品として米國を始め歐洲各國に於て絶大の賞讃と歡迎を受け又バターは本邦總生産高の約七割を占め、其質は既に市場に定評があつて今後の生産増大と相俟て本邦に於ける外來品を完全に驅逐し以て道産バターの獨壇場を現出せんとするの趨勢にある。

最近三ヶ年醸造物製造高一覽表

(道廳統計課調査)

種別	昭和二年		昭和元年		大正十四年	
	工場數	使用職工數	製造價額	製造價額	製造價額	製造價額
清酒	七三	九八二	一、三、七九〇、三〇四	一、六〇、八二九	一、五、四三三、〇四七	一、五、四三三、〇四七
麥酒	一一	一一二	二、一〇四、一〇五	二、一、五八八	一、九四七、四七三	一、九四七、四七三
啤酒	二二	二二六	四、三三九、二二五	四、五八六、六〇〇	四、八七九、一一五	四、八七九、一一五
其他	三	三六	一、九五〇、六〇五	二、〇〇八、八二五	二、六四一、〇五五	二、六四一、〇五五
計	一〇九	一、三三六	一〇、七〇四、二四九	一〇、七〇四、二四九	一〇、七〇四、二四九	一〇、七〇四、二四九

種別	工場數	使用職工數	製造價額	製造價額	製造價額	製造價額
清酒	七三	九八二	一、三、七九〇、三〇四	一、六〇、八二九	一、五、四三三、〇四七	一、五、四三三、〇四七
麥酒	一一	一一二	二、一〇四、一〇五	二、一、五八八	一、九四七、四七三	一、九四七、四七三
啤酒	二二	二二六	四、三三九、二二五	四、五八六、六〇〇	四、八七九、一一五	四、八七九、一一五
其他	三	三六	一、九五〇、六〇五	二、〇〇八、八二五	二、六四一、〇五五	二、六四一、〇五五
計	一〇九	一、三三六	一〇、七〇四、二四九	一〇、七〇四、二四九	一〇、七〇四、二四九	一〇、七〇四、二四九

備考 本表中工場數及使用職工數は職工五人以上使用するもの、數の事である。
清酒 前表に見る如く昭和二年には十四万三千餘石の生産を見たが之で本道の全需要を充し得るものでなく年々府縣から六、七万石程度の移入をして居る。其事は本道に現在以上の生産餘力無しとの意味でなく府縣産品の餘剰品が値押しを以てして入込む關係上自然本道の當業者に於て其需給關係を考慮して年々醸造を減して居る現象に外ならない。
元來本道は水質良好で氣候は酒造に適し恰も天然の一大冷蔵庫と云ふ天恵に浴して居る關係上將來我國に於ける一大銘酒醸地たらんとする事は、地の利を得て居る點より推して決して誤つた觀察ではあるまい。殊に國稅たる酒造稅は本道拓殖財源の上に重要性を持つて居るのであるから今後斯業の發展如何は本道拓殖事業の遂行上影響する所極めて多いのである。故に生産の増大を圖ると共に、より以上品質の向上に努めて道産酒愛用の實

を舉げ更に販路を府縣に擴張して彌々斯業の發展を期せねばならない。
而して原料米は既に「農業の欄、米穀需給狀況の項に示した如く本道米最も多量、朝鮮米之に亞ぎ、秋田、播州、青森、加洲、越後米等其好む所に依つて使用されて居るが、道米使用は漸次増大するの傾向を有して居る。
次に品質について見るに、素より多種多様、各其好む所によつて一概には云ひ得ないが、道産酒は決して府縣酒に比して優るとも劣るものではない。此事に就ては昭和三年の秋開催の第十一回日本醸造協會主催全國酒類醬油品評會に於て本道からの出品點數七十五點に對し、優等賞六點、一等三點、二等十七點、三等三十一點、計四十七點の入賞を見て居る點から考へても其品質の優れて居る事が察せられるであらう。今次に入賞品中優、一、二等の品名を左に掲げよう。

- 優等賞 富久天狗正宗(第一、二、三、八號、イ、ロ號)日本清酒株式會社(札幌)
- 一等賞 旭高砂 旭川市 小樽山鐵三郎
- 北の譽 札幌市 西尾長次郎
- 保久名正宗寄町名寄釀造株式會社
- 二等賞(主なるもの)
 - 鶴 鳳 小樽市小樽銘釀株式會社
 - 我 日本 函館市 菅谷合名會社
 - 北 寶 小樽市 渡邊徳次郎
 - 龜 甲 旭川市 山崎與吉
 - 北 里 札幌市日本精酒株式會社
 - 巴 泉 上川郡愛別村 梅津寛藏
 - 福 司 釧路市合資會社敷島商會
 - 五 陵 正 函館市丸善菅谷合名會社
 - 花 友 旭川市 野崎小三郎
- 右の中優等賞を贏ち得た「富久天狗正宗」の如き真正最上の灘の銘酒に比しても劣りはしない。又一等入賞の分も本道の銘

酒として内外に推賞して憚らぬものであり、二等も亦其の味、其の香氣、愛酒家を以て眞に喜悅せしむるに足るものがあらう事を信ずる。

尙昭和四年九月二十一日日本醸造協會北海道支部主催第六回北海道酒類醬油品評會に於ける受賞者左の通り

- △一等賞
北の譽ハ號札幌西尾長次郎、同ハ號同
同人、同ニ號小樽市小樽銘醸株式會社
龜甲長口號小樽野口吉次郎、龜甲長、
口號旭川與吉、北の譽一號小樽市小樽
銘醸株式會社、龜甲長一號旭川山崎與
吉、北の譽ト號小樽野口吉次郎、同ハ
號札幌西尾長次郎、龜甲長ハ號旭川小
樽山鐵三郎、五稜正宗ニ號函館丸善管
谷合名會社、富久天狗口號札幌日本清
酒株式會社、鶴鳳口號小樽小樽銘醸株
式會社、龍甲長ハ號旭川山崎與吉、北
海旭正宗五號同大谷岩太郎、同六號同
同人、富久天狗口號札幌日本清酒株式
會社

- △二等賞
旭高砂三號小樽山鐵三郎、北泉ハ號梅
津寬藏、同ハ號同人、旭高砂四號小樽
山鐵三郎、北の譽ハ號野口合資會社、
旭高砂二號小樽山鐵三郎、富久天狗二
號日本清酒株式會社第一工場、同イ號
同人、北泉ニ號梅津寬藏、同ハ號同人
五稜正宗ハ號丸善管谷合名會社、幌泉
三號伊藤留吉、富久天狗二號日本清酒
株式會社、幌泉四號伊藤留吉、常盤泉
三號日本清酒株式會社第二工場、花の
友一號野崎小三郎、富久天狗二號日本
清酒株式會社、北海旭正宗七號大谷岩
太郎、常盤泉一號日本清酒株式會社、旭
第二工場、北寶二號渡邊德次郎、旭高
砂五號小樽山鐵三郎、龜甲長二號山崎
與吉、巴里イ號日本清酒株式會社、名
寄泉ハ號名取元造、富久天狗ト號日本
清酒株式會社、北の譽ト號西尾長次郎
巴里ハ號日本清酒株式會社、北寶三號
渡邊德次郎、同一號同人、花の友四號
野崎小三郎

△三等賞
龜甲ト號山崎與吉外四十名
燒酎
本道に於ける燒酎の醸造は大
正七年第四十議會に於て燒酎原料に馬鈴
薯及玉蜀黍を使用し得る事に税法が改正
になつた以後の事に屬し、其の先鞭は明
治三十四年の創立以來「アルコール」の醸
造に萬丈の氣を吐いて居た神谷酒精株式

會社(大正十三年東洋酒精、北海道酒精
北海道酒精の三株式會社と合併し名稱を合
同酒精株式會社と改む)が税法の改正と
共に率先して燒酎の醸造に着手したに在
る。かくの如く本道燒酎醸造の沿革は極
めて新しいものであるが、昭和二年の生
産高は二萬一千餘万石に達してゐる。而
して其の醸造原料は馬鈴薯澱粉の殘滓を
利用してゐるもので全くの廢物利用であ
るが、他產品と異なる芳香は愛香家の等
しく推賞措かざる所、昭和三年の秋に
開かれた日本醸造協會主催の全國品評會
に於て五點の出品に對し四點の入賞を見
内、函館の丸善管谷合名會社の「ハコダ
テ」は優等賞を受け、旭川の合同酒精株
式會社の「東洋」及「ゴード」の兩者が何
れも一等を勝ち得て居る所より推して、尚
其質の優れて居る事が窺知されよう。尙
昭和四年九月日本醸造協會北海道支部主
催の品評會に於て函館市丸善管谷合名會
社の「ハコダテ」及旭川合同酒精株式會社
の「ゴード」は共に優等賞を得た。

麥酒
現在本道に於ける麥酒醸造場
は大日本麥酒株式會社經營の札幌支店工
場唯一つて年産五萬餘石を擧げ道内の消
流は勿論樺太にも可成りの移出をして居
る。

而して原料は一切道産大麥を以て之に
充て、其製品「サツホロビール」は芳香酸
味其の度に適し一度之を口にすれば忽ち

爽快清楚の氣全身に漲るとも云はる、優
秀品で、其名は既に内外に喧傳され賞讃
を博して居る。尙ほ種類は札幌ラガビー
ル、札幌黒ビール、ミュンヘンビール、
生ビール等があり、ミュンヘンビールは
上戸下戸共に適する所謂獨逸ミュンヘン
式の芳醇のもので、婦人にも飲み易く且
クロビールと共に滋養に富んで居る。
本道生産の「ビール」は叙上の如くて、
其量より見る時は敢て府縣よりの移入を
要しないのであるが、然し「サクラ」キ
リン「ユニオン」等の道外產品が無理押
しに多量入込む關係上毎年當業者に於て
或程度の協定を爲し居るとは云へ、どう
しても激烈な競争が免れ得ない。

に就ては優良道産品があるが、道産大麥
は其殆んど全部を「ビール」の醸造用に供
せられ、又小麥は製粉會社の手に其多く
を買付けられる爲め、味噌醸造用には概
して道外產品を求めて之に充てねばなら
ぬ事情に在るを以て、自然其の發達が遅
れて居るのにはあるまいか。然し漸次拓
殖事業の進展に伴れ、斯業も將來大いに
伸展するであらう。

- 醬油
醬油の醸造は明治四年七月札
幌郡篠路村に開拓使に於て醬油醸造所を
設けたのに始まり爾後年々遂に發展し
起き數年前既に其の生産十萬石を突破し
たのであるが、昭和二年に於ては八萬一
千石で、素より本道の全需用を充て得な
い。従つて年々府縣から五、六萬石程度
の移入を爲し以て其の足りない所を補つ
て居る。而して原料たる大豆及小麥は他
に類のない丈の優良道産品があるのに
今日猶ほ此の狀勢に在るのは一面財界不
況の餘映であらうが、幾分は氣候の關係
もあり、又小麥供給も味噌同様の状態に
ないとも云はれない。然し之で道産醬油
の醸造が行詰まり、發展餘勢に乏しいと
云ふのは決してない。斯業の將來は其
の發展する素質を多分に有して居る。漸
次拓殖の進展と共に伸びて行くに違ひな
い。

尙品質に就いては、原料が優良品であ
ると、醸造技術の向上に就いて鋭意當

甲九茂印三號上川郡清水村茂野作造
 △二等賞
 龜甲ノザキ第六號野崎小三郎、山若第一號若桑久治、キ印三號旭合名會社、角甚印二號谷口甚角、金兵一號田中兵藏、角甚印一號谷口甚角、龜甲譽二號松山三太郎、菱丸吉二號堀川太郎治、龜甲別四號下村正之助、龜甲丸小一號小川ツタ、龜甲龍二號前田久吉、龜甲丸茂印二號茂野作造、龜甲ノザキ第四號野崎小三郎、角一別製五號株式會社笠原商會、星丸山第三號村岡勝惠、星丸ヨヘ號石橋彦三郎、富士山八號川治助龜甲藏特製田中虎藏、星丸ヨ印ハ號石橋彦三郎、星丸イ印一號小森伊五郎龜甲藏別製田中虎藏、龜甲丸紀一號愛須正三、第一五號宮本醸造合資會社、山若第二號若桑久吉、角一別製四號株式會社笠原商會、天兩一號佐藤吉之進イ印別製二號板谷商船株式會社

最近三箇年製粉製造高一覽表

(道廳統計課調査)

區分	昭和二年		昭和三年		昭和四年	
	工場數	使用職工數	工場數	使用職工數	工場數	使用職工數
小麥	一、七四七	四六	一、七四七	四六	一、七四七	四六
澱粉	一、七四七	四六	一、七四七	四六	一、七四七	四六
其他粉	一、七四七	四六	一、七四七	四六	一、七四七	四六
計	一、七四七	四六	一、七四七	四六	一、七四七	四六

尙ほ小麥粉の主産地は前記の通りであるが澱粉は上川支廳管内を第一とし網走後志之に強ぐ、昭和二年の製造高次

の通り(道廳統計課調査)
 上川 四三、五三三、五五九斤
 網走 六、六三三、四四〇斤
 二、八七九、五四四斤
 四八、一七六斤

後志 六、五二、一五〇斤
 製糖(ビート糖) 六三、〇七〇斤
 概況 ビート糖は本道特産の甜菜を

式會社笠原商會、天兩一號佐藤吉之進イ印別製二號板谷商船株式會社
 △三等賞
 龜甲角三一號角三猪俣合資會社外三十八名
 小麥粉 現在小麥粉の製造工場は日本製粉株式會社小樽支店工場唯一で、其の生産高は昭和二年に於て六十六萬五千九百袋(一袋五貫九百匁)を示して居る。原料は本道産小麥を以て之に充つるものがあるが、道産小麥のみを以て猶ほ多量の不足を告げ、爲めに滿洲、濠洲、朝鮮加奈陀等からの移輸入品を以て其の不足を補つて居る。而して其の製品は道内は勿論府縣及樺太、支那、朝鮮、滿洲まで仕向けられてゐる。尙今後小麥粉の需要は生活程度の上と人口の増加とに依つて益々増大するを以て將來の發展は期して待つべきである。

澱粉 本道に於ける澱粉製造は明治十一年開拓使に於て馬鈴薯を原料として製造を爲したの端を發し、後、玉蜀黍山慈姑、蛭百合等を以て製造を試みられたが、何れも好結果を得ず、從て澱粉は一に馬鈴薯を原料として居る。元來本道は馬鈴薯の栽培に適し、毎年其生産多量にして澱粉製造の業亦農家の副業として簡易且有利な點からして大いに發展し、殊に歐洲大戰當時に於ては異數の増産を現出し、一名片栗粉として海外に多量輸出し、歐洲各國に雄飛するに至つた。然し戦後は財界の反動により再び往時の盛況は之を見る事が出来ないが、其生産は猶ほ左表の通り其の過半は之を府縣に移出して居る。

原料とするもので、其起源は明治十四年内務省勸農局の手により紋髓に於て製糖開始されたのに其端を發して居る。爾來第一次第二次の甜菜糖業は不幸にして共に失敗に終つたが幾多研究改善の結果今日では近代工業の組織的生産を見るに至つた。即ち大正八年六月帯廣町に北海道製糖株式會社の創立を見、次て翌九年二

甜菜製糖成績累年表

(道廳糖務課調査)

年次	會社名	裁切量	精糖	糖數	歩留糖	蜜	バルブ	酒	精	備考
大正九年	北計	六、一四二、四〇〇斤	四、〇二七	四、〇二七	七、七三	二、〇一三	三、〇〇〇	三、〇〇〇		
大正十年	北計	六、一四二、四〇〇斤	四、〇二七	四、〇二七	七、七三	二、〇一三	三、〇〇〇	三、〇〇〇		
大正十一年	北計	六、一四二、四〇〇斤	四、〇二七	四、〇二七	七、七三	二、〇一三	三、〇〇〇	三、〇〇〇		
大正十二年	北計	六、一四二、四〇〇斤	四、〇二七	四、〇二七	七、七三	二、〇一三	三、〇〇〇	三、〇〇〇		
大正十三年	北計	六、一四二、四〇〇斤	四、〇二七	四、〇二七	七、七三	二、〇一三	三、〇〇〇	三、〇〇〇		
大正十四年	北計	六、一四二、四〇〇斤	四、〇二七	四、〇二七	七、七三	二、〇一三	三、〇〇〇	三、〇〇〇		本年明糖ト合併

月日本甜菜製糖株式會社(大正十二年六月明治製糖株式會社に合併す。工場所在地は上川郡人舞村字清水)の創立となり兩者は何れも資本金一千万圓の大會社である。又本道事業界の重鎮であり其製糖量は年々増加し昭和三年に於ては三千五百萬斤を算するに至つた。乍併之を本道第二期殖計畫による製糖業獎勵計畫の全局より見る時は未だ初期の域にあるもので、將來二億三千万斤を生産し得るのである。兎も角本道のビート糖は我國砂糖の需要關係に重大な使命を有するもので、道廳に於ては特に糖務課の一課を設け之が助長獎勵に努めて居る。

社がある。前者は資本金百万円で社有地八千町歩甜菜穀及畜産等年額八十萬圓を産し、清水村に農場及人舞支場、十勝鹿追村に上登別支場、士幌村に士幌支場を經營してゐる。又後者は資本金百五十萬圓、十勝國清水鹿追間及南熊牛北熊牛間三十一哩の鐵道を有し一般旅客及貨物並甜菜の運輸を業とし地方の開發に貢献してゐる。

最近五ヶ年菓子製造高一覽表

(道廳統計課調査)

Table showing the highest production of confectionery in the last five years, categorized by region (昭, 大, 大, 大) and year (昭, 和, 二, 年). Columns include male and female workers, and production values for various categories like 菓子, 麵, 麵包, 高.

罐詰製造 元來本道は魚介豊漁なため罐詰類も海産物を原料とするもの多く、其の主なるものは蟹、鮭、鱒、鮫、鮑、北寄、帆立海老等である。就中蟹、鮭、鮑は管に本

最近五ヶ年罐詰製造價額一覽表

(道廳統計課調査)

邦の需要のみに止まらず歐米に最も歡迎せられ其の多くを輸出して居る。尙ほ最近蔬菜を原料とする罐詰も大いに進展し殊にアスパラカスの罐詰は範を歐米に取り最新の經營に係る本道の特産にして現

在の産額は未だ多いとは云ひ得ないが其製品は外來品に遜色なく優秀の成績を擧げ目下遠大な計畫の下に着々目的に向つて進んでゐる。

Table showing the results of the 15th year of the '昭和二年度罐詰主要製造地(統計課調)'. Columns include year (昭, 和, 二, 年), production volume (製造場數), number of workers (職工數), and production value (價額) for various products like 鮭, 鱒, 蟹, 鮫, 鮑, 蔬菜, etc.

備考 規定改正の結果大正十五、昭和元年以降職工數調査がない。

昭和二年罐詰主要製造地(統計課調)

鮭 函館市 一三、〇〇〇圓
根室 三九五、一八八圓
根室 二六三、四〇二圓
函館市 三、四〇〇圓
後志 六五、三七六圓
札幌市 五二、八三六圓
乳肉製品は本道畜産業の助長獎勵と相俟つて其の發達實に顯著で、殊に牛酪及煉乳は其の代表的製品たるに恥ぢず全國生産總額の約四割を占めて居る。要する

電氣及瓦斯工業

概況 本道拓殖の進展と共に斯業の發達亦著しく殊に本道は地形上各地に水力に依る發電所適地を有するを以て自然水に依る

發電事業の發達を齎して居る。昭和三年末に於ける發電所の數は供給用、自家用總ての發電工場を合すれば百八十一を算し、今や都市の電化は素より、農村電化の實も着々として其實現に向つて進んでゐる。

電氣事業者數、電線路巨長及發電力數累年比較

(札幌通信局調査)

Table comparing the number of electricity business operators, total line length, and cumulative electricity generation from 1912 to 1933. Columns include year (昭, 和, 二, 三, 年), number of operators (電氣事業者), line length (電線路), and electricity generation (發電力).

設立 大正十五年十月
資本金 參千壹百萬圓

札幌市大通東一丁目二番地



北海電力株式會社

代表電話 二六四〇番

札幌營業部
小樽支店
俱知安出張所
東京出張所

札幌市大通東一丁目二番地
小樽市富岡町一丁目二十一番地
俱知安町南一線西五十七番地
東京市麹町區丸ノ内一番地郵船ビル

商取引

概況

本道拓殖の進展に伴ふ諸生産業の發達

は必然に内外貿易の毀販を促し殊に歐洲大戰の影響による經濟力の膨脹は内外の通商關係に一層其交渉を深からしめ、今や物質の移出額は四億一千五百万圓に達し、移輸入額は四億五千万圓で、之が移輸入の合計は八億六千六百餘萬圓の多

きを示し、戦前即ち大正三年の二億餘萬圓に比べ、四億を遙に超ゆるの状況にある。左に最近數ヶ年に於ける移輸出の統計を掲げ其の趨勢を示そう。

最近數箇年移輸出趨勢一覽表

(道廳商工課調査)

年次	移出		移入		移輸出計
	道外移出	輸出(普通・漁業共)	道外移入	輸入(普通・漁業共)	
昭和三年	三九、七九二、〇三九	三、四一〇、二七〇	四三、三二一、二二九	三、五五九、四七三	八六、七七四、八八三
昭和二年	三八、〇九三、〇四八	三、四四〇、二七〇	四一、四〇一、三三〇	三、九一〇、〇五七	八二、七四〇、四一七
昭和元年	三八、九九九、六九九	三、三三三、三三三	三八、七五二、六六六	三、七四四、九五六	八二、四四〇、六七六
大正十四年	三五、二九九、八二四	三、一四四、六七三	三五、九三三、五八〇	三、七三三、六四四	七九、一六六、三二二
大正十三年	三三、八八四、三一五	二、六一六、四〇八	三三、四四四、四九七	二、九四五、七二一	七六、四〇〇、二一四

内國取引

移出入概況

本道も開拓使の中葉までの移出品は殆んど水産物に限られて、今日の如き複雑な商取引はなかつたが、爾來拓殖の進歩に連れて生産業は興隆し、豊富な天産資源は漸次開發されて各種物資の生産は彌々増大し、從て之が道外移出も年々繁盛に赴き昭和二年に於ては三億八千万圓の移出を爲すに至つた。乍併本道の生産乃

至道外移出の物資は水産、農産、鐵産、林産等の自然的生産物を主とし、加工生産品に於ては新聞紙、バルブ、亞麻製品セメント、澱粉、乳製品等の特殊の工業品を除く外、他は概して移出の餘力に乏しく、爾後の發達に繋がれて、道内の需要も猶ほ充足得ぬ状態にあり、從つて酒類、味噌、醬油、麵類、衣類品等は、道内の生産も年々増加の傾向にあると云へ、他面人口の増加に依る消費力も旺盛にして、多量の移入を府縣に需めて居る

其他煙草、人造肥料等の移入も亦尠くない。從つて移出増加の反面には移入増加の傾向があり、昭和二年に於ては四億二千三百万圓を示して、寧ろ其額に於て移出を凌駕するの趨勢に在る。而して之等移出入を合すれば實に八億三百万圓の巨額に達し、相互取引の殷賑を見てゐる。尙道内各市場間に於ける取引も從て繁盛に赴いて居るもので、今之等商取引の趨勢を數的に左に掲げよう。

最近五ヶ年内國商取引趨勢一覽表

(道廳商工課調査)

品目	数量	金額	品目	数量	金額
馬國白米	一、四八〇、四二石	三、四一〇、二五〇	石炭	二、八五五、五八噸	三、七三三、七〇
大内豆	四、二七三、八八石	七、五二四、七二	鐵計	二、四〇九、三九噸	六、八八八、六七
小豆	二、七九一、八八石	六、八八一、一三	又車	一、四一七、四〇	四、七七一、三六
豌豆	三、四一八、七四石	九、二九一、五八	鐵計	二、四〇九、三九噸	六、八八八、六七
魚粉	五、〇〇八、七四石	一、八八七、九〇	鯨油	一、六八七、六〇打	三、四一三、三三
鹽	九、六四三、〇六石	一、〇八六、五二	燕麥	三、四一三、三三打	一、〇八六、五二
生魚	六、四七九、九四石	七、八六六、五二	鮑魚	四、三六六、六四打	三、四一三、三三
昆布	五、九四一、九四石	九、八八六、五二	角太	三、四一三、三三打	三、四一三、三三
鹽鱈	六、四七九、九四石	七、八六六、五二	丸太	三、四一三、三三打	三、四一三、三三
乾鱈	三、三〇二、七〇石	一、二九一、五八	枕木	三、四一三、三三打	三、四一三、三三
乾魚	二、九四〇、五九石	一、二九一、五八	木炭	三、四一三、三三打	三、四一三、三三
貝柱	三、〇六四、〇四石	一、二九一、五八	木炭	三、四一三、三三打	三、四一三、三三

品目	数量	金額	品目	数量	金額
内國白米	九、九五三、三九石	三、五五八、一七	綿織物	三、七七一、一四噸	二、八四四、四五
内國玄米	四、八七七、七九石	一、六三三、一七	絹織物	四、八三〇、八七噸	三、七七一、一四
朝鮮米	二、六四四、八二石	九、〇二二、〇六	製織物	一、四二二、二〇噸	一、四二二、二〇
外臺米	一、八二二、二八石	一、〇一八、七〇	製織物	一、四二二、二〇噸	一、四二二、二〇
小麥	二、〇五五、〇七石	二、〇八六、七三	製織物	一、四二二、二〇噸	一、四二二、二〇
茶葉	六、二〇五、六七石	二、三三三、六八	製織物	一、四二二、二〇噸	一、四二二、二〇
鹽	二、四四一、三〇石	二、三三三、六八	製織物	一、四二二、二〇噸	一、四二二、二〇
昆布	六、〇七三、二四石	一、〇四五、四六	製織物	一、四二二、二〇噸	一、四二二、二〇
乾魚	五、九三一、七二石	一、三三〇、五五	製織物	一、四二二、二〇噸	一、四二二、二〇
麵粉	二、六、一四九、三九石	二、〇三三、八七	製織物	一、四二二、二〇噸	一、四二二、二〇

品目	数量	金額	品目	数量	金額
麻織同製品	六、二三八、七四石	三、九〇四、七三	製織物	一、四二二、二〇噸	一、四二二、二〇
魚網	二、三七〇、四〇石	二、三三三、六八	製織物	一、四二二、二〇噸	一、四二二、二〇
衣類及同製品	二、五八五、五二石	一、三三〇、五五	製織物	一、四二二、二〇噸	一、四二二、二〇
和紙	二、五八五、五二石	一、三三〇、五五	製織物	一、四二二、二〇噸	一、四二二、二〇
新聞紙	二、五八五、五二石	一、三三〇、五五	製織物	一、四二二、二〇噸	一、四二二、二〇
其他洋紙	二、五八五、五二石	一、三三〇、五五	製織物	一、四二二、二〇噸	一、四二二、二〇

最近數々年本道貿易總額表
 (單位圓、指數は大正十二年を100とす)
 (道廳商工課調査による)

相手とする一般取引を云ひ、漁業貿易は沿海州、カムサツカ、オコツク方面の出漁に對する物資漁獲物の搬出入を指すも、昭和三三年中に於ける普通貿易の輸出入部は二千五百九十七万五千圓、輸入額は一千七百六十二万五千圓を示し、此の輸出入合計は四千三百六十万一千圓、漁業貿易中輸出は八百四十三万四千圓、輸入一千五百九十一万八千圓、其の合計二千四百三十五万三千圓で、普通、漁業兩貿易の總輸出合計は六千七百九十五万四千圓の多きに上つた。

最近數々年本道貿易總額表

區分	昭和三年	昭和二年	昭和元年	大正十四年	大正十三年	大正十二年
輸出	二五、九七五、三五三	二五、五六二、〇八一	二七、三九八、五三二	二六、二〇七、六六九	二三、〇三九、六一一	一八、一〇四、八〇三
輸入	一七、六二五、七三〇	一七、一三六、六二二	二二、六五四、八九〇	一〇、四八三、一五三	九、一五三、七〇一	六、三三〇、四八三
合計	四三、六〇一、〇八三	四二、七〇〇、七〇三	四九、〇四三、四二二	三六、六八九、八二二	三二、一九二、三一二	二四、四三五、二八五
輸出	八、三三九、六三三	八、四三三、四六〇	一四、七三四、六四二	一五、七二五、五二七	一三、八七六、九一〇	一一、七八四、三九一
輸入	八、三三九、六三三	八、四三三、四六〇	一四、七三四、六四二	一五、七二五、五二七	一三、八七六、九一〇	一一、七八四、三九一
合計	一六、六七〇、二六六	一六、八六六、九二〇	二九、四八八、二八四	三一、四五一、〇七四	二七、七五三、八二〇	二三、五六八、七八二

主要林産品 四三、四〇〇
 主要水産品 五八、六二六
 生 魚 一〇七、五八一
 生 魚 四六七、一〇三
 生 魚 一七、三三三
 以上の通り豆類の輸入最も多く、總輸入額の二六%を占めて第一に位し、鉄力の六・八%に次ぎ、小麦、石炭、米、鹽、鐵、石油、木材等順次相次いで居る。而して輸入總額を前年に比するに四十八万一千圓を増加し、一千七百六十二万六千圓に達して居る。之を主要品について其消長を見るに、米は昭和二年に於ける國內産額の増加に輸入制限令布かれ、爲に漸く百八万六千餘圓の輸入を見たのみで、前年に比し二百七十四万九千餘圓を急激に三分の一に、鉄力は前年からの持越の増加に五十八万四千圓を減減し、二十万一千圓に、原油は十一万九千圓を減じ、四十三万五千圓に減退し、之等三品

最近普通貿易價額港別一覽表

(道廳商工課調査)

別港	輸出		輸入	
	出	入	出	入
小 港	出	入	出	入
函 館	出	入	出	入
館 山	出	入	出	入
別 港	出	入	出	入
昭和三年	六、一三三、七四六	九、一五九、九八〇	一、五二七、七二六	三、〇四六、二三四
昭和二年	六、六二二、三九〇	七、八二二、三九〇	一、四四三、三三三	一、九一三、五三三
昭和元年	六、八二〇、五七九	四、七〇七、〇八五	一、五三七、六六四	二、一三三、四九四
大正十四年	八、五四五、三四三	三、三六四、九三三	一、九〇〇、二八一	五、八〇〇、四〇五
大正十三年	六、二四五、三三三	二、三九七、三六四	一、八四三、七三六	三、八四八、〇〇八
大正十二年	五、三三二、〇一〇	一、七二四、六九七	七、〇三六、七〇七	三、五九七、三三三

の減少額實に三百四十五万二千圓を算した。加ふるに玉蜀黍に九万三千圓、大豆に二万六千圓、食鹽に六万八千圓、バラフインツックスに一万五千圓、燐礦石に三十八万八千圓、學術器及機械類に四万圓、揮發油八万四千圓の減少を示した。一方増加を示したものは釜石及室蘭に於ける鉄鐵の増産計畫に石炭及鐵鐵に増加し、前者は七十一万九千圓を増加し、後者は三万九千圓を増加し、小麦及穀類は需要の増加に二十一万八千圓を増加し、前者は百十六万五千圓、後者は四十六万七千圓に上つた。又木材は十三万圓、豆類は三十七万四千圓を増加し、其他諸品も一般に増加を示した。加へ、智利硝石四十一万六千圓、鐵材二十三万四千圓の臨時輸入があつた。以上の如く増加を示したのも多々あるが各品の増加額は何れも少額に過ぎないので前記の減少額を補填するに至らず差引百三十五万四千圓の

減少を見るべき筈であるが、本年は露人關係の漁獲物及漁業用品の再輸入額は本貿易に統計せられ、其額百八十四万一千圓(内、函館百六十九万三千圓、小樽十四万八千圓)を加算される様になつたので輸入總額一千七百六十二万六千圓に達し、前年に比し四十八万一千圓を増加した。港別輸出入 次に輸出入を本道五貿易港別に觀るに小樽港を以て第一とし、昭和三年の輸出入合計は二千二百九十七万二千圓を示し、之に次ぐは函館港の一千五百二十七万三千圓で、以下室蘭港の三百八十三万二千圓、館山港の九十九万二千圓(木材類の輸出不振に著しい減少を示し、昭和元年の二分の一にも足らない)根室港の五十三万圓(海産物殊に昆布の對支輸出不振に致す)は連年減少を辿り、大正十三年に比し殆んど其の三分の一になつて居る)の順である。尚ほ釧路根室の兩港は概して輸出に限られ、輸入は極めて少ない。

港別貿易額比較表

(右表により本社作製)

港 別	昭和三年		昭和二年		昭和元年		大正一四		大正一三		大正一二	
	出	入	出	入	出	入	出	入	出	入	出	入
小 樽	六、七〇三、〇四九	二、二〇七、五二五	九、五七二、二六〇	一、七五五、六九二	八、一三九、〇三九	一、三六八、八七六	七、三七一、八一	二、三三三、〇七四	一、八〇三、三三六	五、九〇九、五八九	一、〇一七、七九六	三、八四八、一九五
室 蘭	二、〇七五、五二五	一、七五五、六九二	二、〇七五、五二五	一、七五五、六九二	二、〇七五、五二五	一、七五五、六九二	二、〇七五、五二五	一、七五五、六九二	一、八〇三、三三六	一、八三三、六四二	一、〇一七、七九六	一、七五五、六九二
釧 路	九、五七二、二六〇	三、八三三、二一七	九、五七二、二六〇	三、八三三、二一七	九、五七二、二六〇	三、八三三、二一七	九、五七二、二六〇	三、八三三、二一七	九、五七二、二六〇	九、五七二、二六〇	三、八三三、二一七	九、五七二、二六〇
根 室	五、六八二、一六二	三、一八八、八三三	五、六八二、一六二	三、一八八、八三三	五、六八二、一六二	三、一八八、八三三	五、六八二、一六二	三、一八八、八三三	五、六八二、一六二	五、六八二、一六二	三、一八八、八三三	五、六八二、一六二
計	二二、〇七五、五二五	七、〇七五、五二五	二二、〇七五、五二五	七、〇七五、五二五	二二、〇七五、五二五	七、〇七五、五二五	二二、〇七五、五二五	七、〇七五、五二五	二二、〇七五、五二五	二二、〇七五、五二五	七、〇七五、五二五	二二、〇七五、五二五

備考 各年合計額を一〇〇としての各港の歩合を示す。
 即ち函館港は本道の海産物市場として益々盛を極め、小樽港は主として農産物木材の市場として近年特に異狀の發達を來し、室蘭港は石炭港並印刷紙の輸

出、鐵鐵の輸入港として永く其使命を果し、釧路港は木材類及印刷紙、海産物の輸出港、根室港は水産物の集散港として各其價値を發揮して居る。

國別輸出入 從來輸出入共支那を第一とし、彼我は超然として最も深い關係に置かれたものであつたが、近年動亂、改變、日貨排斥等々の悲觀材料に累され

て、兎角輸出に不振を來し、殊に對支輸出の大宗たる海産物の滯滞不圓滑は、延いて漁村經濟を怯かす結果となり、之が對策に就ては最も考慮を拂はれて居る所である。

昭和三年主要國別及港別輸出入額表

(函館税關調査による)

Table showing trade statistics for various countries and ports in 1934. Columns include Country (主要國別), Port (港別), and Amount (金額). Rows list countries like 支那, 關東, 佛領印度, etc., and ports like 函館, 小樽, 室蘭, etc.

輸出輸額の二十五%を占め、之に亞ぐは支那の二十%、露領亞細亞、北米合衆國の各十二%、關東州の六%、濠太刺利の四%、以下比律賓諸島、香港、和蘭、獨逸、佛蘭西、加奈陀、喜望峰殖民地、白耳義、新西蘭、英領印度、玫瑰等の順である。

輸出入合計 六二二、七四六、一六、二一、二一〇、七五五、五三、九八五、五七六、五三〇、二九四、三三、一〇〇、九一五、九八〇、六七〇、二〇四、九一、七五六、六三六、九六〇、四九、一七、七三〇、一〇〇

備考 取引二十万圓以上の國のみ掲ぐ。重要輸出入品、本道貿易港及主要取引先國三者の關係 以上は昭和三年中に於ける本道重要輸出入品並取引額本道貿易港別輸出入並取引先國別狀況の概観を述べたのであるが、今等三者の關係即ち輸出入品を中にして、本道貿易港と取引先國との間に如何なる貿易が行はれて居るかを大觀して普通貿易の項は終るとにしよう。

本道主要輸出入品、貿易港及取引國別貿易額表

一、輸 出

Table showing trade statistics for various goods and ports in the region. Columns include Goods (品目), Port (港別), and Amount (金額). Rows list goods like 錫, 昆布, 刻布, etc., and ports like 函館, 小樽, 室蘭, etc.

本道貿易港と主要輸出入品との關係を見るに、輸出に於ては函館港は支那向けの海産物を主とし、小樽港は農産物即ち豌豆、大豆、玉葱等殆んど一手に之を取扱ひ又木材及石炭の輸出も少くない。室蘭港は石炭を主とし印刷料紙、木材、板等を輸出し、釧路港は昆布、印刷料紙及木材板等を根室港は海産物殊に昆布が多い。輸入に於ては函館港豆糖最も多く、露

領亞細亞よりの海産物之に次ぎ、原油及重油、穀、燐礦石、食鹽、米等も妙くない。小樽港は小麦を第一とし鉄力、米、豆槽之に次ぎ、石油、智利硝石、木材、パラフィンワックス、石炭等も相當に上る。室蘭港は鐵礦及石炭を主とし學術器及機械類も輸入を記するに足らない。は輸入極少之を記するに足らない。尙叙上の數的關係は左に掲げよう。

(昭和三年函館税關統計による)

品 目	輸入港		仕 出 先
	港別計	品目別計	
米	九、一五九、九八〇	六、七〇二、〇四九	英領印度支那六五、八八六 佛領印度支那八五八、七三五
小 麥	一、一六四、九八八	八、五〇四、五五一	北米合衆國一五、七四一 加奈陀一八八、四三四 濠太刺利五七三、〇五一
食 鹽	二四三、九四三	一、六四、九八八	英 國七六、八〇六 關東州七三、三五〇 埃及四四、二三〇
石 油	七八八、五二八	六、四六、〇〇八	北米合衆國七八七、〇二四 蘭領印度九、一三五
原 油	四三四、五六六	六、四六、〇〇八	北米合衆國四四、五一六
パラフキン ワツクス	二五六、九八二	二、五、九八二	蘭領印度二、五、九八二
燐 礦 石	四三三、四〇〇	三、四、四〇〇	クリスマス島三、四、四〇〇 濠太刺利九三、〇〇〇
石 炭	一、一三九、三四	二、七、四〇〇	支 那四八七、一〇四 露領亞細亞六五三、一〇〇
鐵 礦	八〇九、一〇七	三、七、〇七四	支 那八〇九、一〇七

品 目	輸出港		仕 出 先
	港別計	品目別計	
錫 力	一、二〇〇、九四一	二、九、〇九六	北米合衆國一、七、八、五八一 英 國二、三、三、六〇〇
木 材	五、六、六、六六	三、三、三、三三	北米合衆國二、四、四、九二 露領亞細亞二、四、四、九二 加奈陀二、六、四、三三 支 那二、七、一、〇七
穀 類	四、六、六、七九〇	三、三、三、三三	支 那三、八、三、三三 關東州四、三、四、〇四八
豆 槽	四、六、三、〇四三	三、三、三、三三	支 那一、九、四、九九五 關東州四、三、四、〇四八
智利硝石	四、六、〇、九六	四、六、〇、九六	智 利四、六、〇、九六
生 鈹	四、六、七、〇三	三、三、三、三三	露領亞細亞四、六、七、〇三
鹽 鈹	一、〇、七、五八一	一、〇、七、五八一	露領亞細亞一、〇、七、五八一
總 計	一、七、六、二、五、七三〇	九、一、五、九、九八〇	支 那四、三、三、三三 關東州四、三、四、〇四八 露領亞細亞二、四、四、九二 加奈陀二、六、四、三三 支 那二、七、一、〇七 北米合衆國二、四、四、九二 英 國二、三、三、六〇〇 露領亞細亞二、四、四、九二 加奈陀二、六、四、三三 支 那二、七、一、〇七 關東州四、三、四、〇四八 智 利四、六、〇、九六 露領亞細亞四、六、七、〇三 露領亞細亞一、〇、七、五八一

備考 本表は輸出入共二十万圓以上のみを抜萃したものである。(合計)左側括弧内の國名は主要輸出入先の内譯である。

漁業貿易
 昭和三年概況 漁業貿易は前述の如く勢力資本を仕込んで(輸出)遠く勘察加、オコック、尼古来扶斯克、サカレン沿海州方面に出漁し、其漁獲物を持ち歸る(輸入)ものを謂ひ、函館及小樽を其の主要港と爲し、釧路及室蘭は極めて僅少である。就中函館は本貿易の策源地で其の大部分を占め、之が消長は直に同市

經濟界に影響する。而して小樽は罐詰殊に蟹罐詰の輸入を主とする。
 昭和三年の貿易額は八百四十三万五千圓、輸入一千五百九十一万九千圓、合計二千四百三十五万四千圓で、是を前年に比すれば輸出に於て五万七千圓を、輸入に於て二百二十八万五千圓を増加した。而して前年まで本貿易に統計した露人關係の漁業用品の輸出並に漁獲物の輸入は本

年六月(昭和三年)以降本貿易から除外し普通貿易に統計されたので夫れを加算すれば輸出は九百九十三万四千九百八十八圓(百五十万圓増加)、輸入一千七百七十五萬九千七百四十三圓(百八十四万一千圓増加)となり、輸出は大正十一年、輸入は大正十三年に次ぎ近年にない好況を呈した。左に最近数年の統計を掲げ其狀勢を明かにしよう。

漁業貿易各港別價額表

(單位圓) (函館稅關調査)

港別	昭和三年		昭和二年		昭和元年		大正十四年		大正十三年		大正十二年	
	輸	入	輸	入	輸	入	輸	入	輸	入	輸	入
函館	七、五三二、五九二	一四、九四六、四四三	八、〇四五、五六一	一三、七九六、二六二	六、二九七、四七八	一四、二七七、五〇〇	六、五二四、八〇九	一六、九〇〇、四九三	七、五三〇、三三〇	一七、〇〇九、七六一	七、五六八、二四七	一三、〇一八、九五四
小樽	九二二、三三六	一、八八四、六二六	三三三、八八〇	一、六九四、四九四	五五五、五六三	二、三三六、六六七	四七〇、八六七	三、三三二、三〇九	八八四、七二二	三、三〇九、五七〇	二、三〇五、三三四	四四三、三三九
小樽輪船	九七二、三〇〇	一、八八四、六二六	八三六、六二四	一、六九四、四九四	二、三三六、六六七	二、七八二、二三〇	三、三三二、三〇九	三、七九三、一七六	四、一〇四、二八二	三、三〇九、五七〇	二、三〇五、三三四	四四三、三三九
超計入出	一、八八四、六二六	五九、九七四	一、六九四、四九四	五〇三、七三四	一、六七二、一〇四	一、六七二、一〇四	二、八五一、四四二	二、八五一、四四二	二、三三四、八五八	二、三三四、八五八	一、七六二、〇一五	一、七六二、〇一五
室蘭	〇〇〇	〇〇〇	〇〇〇	〇〇〇	〇〇〇	〇〇〇	〇〇〇	〇〇〇	〇〇〇	〇〇〇	〇〇〇	〇〇〇
釧路	〇〇〇	〇〇〇	〇〇〇	〇〇〇	〇〇〇	〇〇〇	〇〇〇	〇〇〇	〇〇〇	〇〇〇	〇〇〇	〇〇〇
根室	〇〇〇	〇〇〇	〇〇〇	〇〇〇	〇〇〇	〇〇〇	〇〇〇	〇〇〇	〇〇〇	〇〇〇	〇〇〇	〇〇〇

漁業貿易取引地方別價額表

(函館稅關調査)

國別	昭和三年		昭和二年		昭和元年		昭和三年		昭和二年		昭和元年	
	輸	入	輸	入	輸	入	輸	入	輸	入	輸	入
右ノ内本道	八、四三四、九一八	八、三七八、〇三六	六、八五五、四四一	一五、九一八、七四三	一五、三〇四、八八一	一五、六五三、〇八一	一三、四二一、三六一	一四、八二九、七八五	一三、〇一八、三三三	一四、二五七、八五四	一三、〇一八、三三三	一四、二五七、八五四
ノ分合計	八、四三四、九一八	八、三七八、〇三六	六、八五五、四四一	一五、九一八、七四三	一五、三〇四、八八一	一五、六五三、〇八一	一三、四二一、三六一	一四、八二九、七八五	一三、〇一八、三三三	一四、二五七、八五四	一三、〇一八、三三三	一四、二五七、八五四

輸出の狀況 昭和三年の出漁に關しては漁場の讓渡問題、査證問題等に多少の紛糾を見たが圓滿に解決し大きな支障もなく出漁することが出来た。加之露人經營の蟹工船の仕込、並に鮭鱒罐詰の好況に日露人共に罐詰工場を増設又は新設等あつた爲め、之等材料の輸出旺盛を告げたのと、本年の出漁良好であつた爲め漁業用品の追送されるもの増加とによ

つて、前年薄漁の後を受け漁場に殘存する漁業用品は比較的多量を擁したに不拘前記の様な好況を呈した。而して鐵製品及再輸出其他の増加著しいのは主として函館港は建築材料、小樽(及青森)港は罐詰工場増加したもので木材類の増加と罐詰工場及倉庫等の新増設により、木製品の減少は前年不漁であつた爲め漁場に殘存する箱板が多額に上つた爲めであ

輸入の狀況 昭和三年の出漁は沿海州に於ける鯨及勘察加に於ける蟹は共に不漁に終つたが、蟹は數年來見ない豊漁を告げ、鯨は豊漁と稱することが出来な

漁業貿易主要輸出入品價額表

(函館稅關調査)

品目	年次		
	昭和三	昭和二	昭和元
飲食物	六八九、三六八	八三一、六四一	七八九、六六一
米	三三六、七三六	三〇三、七三六	三〇四、二〇三
其他飲食物	一、〇一六、一〇五	一、三三三、三六九	一、〇九三、八六四
計	一、〇一六、一〇五	一、三三三、三六九	一、〇九三、八六四
漁業用品	七〇、六五三	五三、三三五	一九四、七三〇
魚	一、七四七、三九一	九六三、六〇三	七六六、五七八
小漁	六九四、二五四	九五一、九二五	四八〇、九六八
網	二五七、七六四	三三四、四二二	二九四、八八八
製	三六八、六九四	四八四、九二四	四四三、六〇二
繩	二五二、五三〇	二九六、二〇三	二四三、一七四
布	三四五、二七三	三三三、四七九	三〇〇、七七二
石炭	二五二、五三〇	三三三、四七九	三〇〇、七七二
布	二五二、五三〇	三三三、四七九	三〇〇、七七二
繩	二五二、五三〇	三三三、四七九	三〇〇、七七二
製	二五二、五三〇	三三三、四七九	三〇〇、七七二
鐵	二五二、五三〇	三三三、四七九	三〇〇、七七二
機	二五二、五三〇	三三三、四七九	三〇〇、七七二
製	二五二、五三〇	三三三、四七九	三〇〇、七七二
木	二五二、五三〇	三三三、四七九	三〇〇、七七二
木	二五二、五三〇	三三三、四七九	三〇〇、七七二
製	二五二、五三〇	三三三、四七九	三〇〇、七七二
材	二五二、五三〇	三三三、四七九	三〇〇、七七二
製	二五二、五三〇	三三三、四七九	三〇〇、七七二
品	二五二、五三〇	三三三、四七九	三〇〇、七七二
類	二五二、五三〇	三三三、四七九	三〇〇、七七二
計	二五二、五三〇	三三三、四七九	三〇〇、七七二

再輸出品	六、五三〇
食鹽	六、四三〇
其計	一九、〇一五
其他	五五三、七七五
	五六〇、二五九
	八七、二九九
	九三、六五九
	七四、六〇三
	九三、六二七
合計	八、四四四、九一八
	八、三七八、〇三六
	八、五五、四四一

品目	昭和三三年	昭和三二年	昭和三元年
鮮魚	六、五二六	五、六三三	三、八一八
鮭	六、六五〇	一、八五三	五、五三三
鱈	三、九三六	三、五九四	三、〇七二
魚	九、九二二	三、六四七	九、三六一
合計	二一、〇三三	一五、〇七三	一八、二九六
其他	二、四〇八	六、六三三	四、一七八
合計	二三、四四一	二一、七〇六	二二、四七四
持出品	一、五〇四	九、八五三	一、三七四
合計	二一、九三七	一五、八五三	二一、一〇〇

出入船舶
對外取引の股賑に伴ひ内外貿易船の來往漸く繁く、昭和三年に於ては、出港汽船一千七百七十二隻、其總噸數二百二十二萬五千五百二十二噸、帆船四十二隻、其總噸數六千三百七十一噸、其合計は一千二百一十四隻に對する二百二十二萬六千九百二十三噸に上る。入港汽船は一千三百九十九隻、帆船は三十隻にして五千二百五十七噸、其の合計は一千六百九隻に對する二百八十七萬七千六百七十七噸を示して居る。此の中帆船は殆んど全部が漁業貿易に從事するもので其の數も少ない。

港別出入船舶表

港別	出		入	
	隻數	噸數	隻數	噸數
内外別	一、七七一	一、四七三	一、七七一	一、四七三
合計	一、七七一	一、四七三	一、七七一	一、四七三

出入船舶の内外國籍別に於ては、内國船が大部分を占め、外國船では、英國、露國、米國、諾威、支那の順位で、英國船の活躍が相當目覺しいものがある。港別に於ては、小樽が第一位を占め、函館は北洋材の積取、雜穀類の輸出に於て、室蘭は燃料類の積込、礦物類の輸入等に於て各々特色を有つて居る。尙仕向國及被仕向國の別、就航の状態等は本道輸出入品の種類、本道貿易港の位置、設備、採算等の關係によつて自ら異なる

之を概観すれば本道の輸出品は原産的の物産が多く且つ漁業貿易、北洋材の積取等による出入船が主要なものになつて居る關係上、年によつて就航状態に相當の變化あるを免れない。近時上海、大連浦鹽等の直航路も開かれたが未だ十分な成績を見ない。然し本道の海外取引は京濱、阪神の中繼取引を減少して直取引の進出目覺しいものがあり、且道内の産業の發展に伴つて内外貿易船舶の出入も漸時多きを加へることは素より疑のない所である。

左に昭和三三年中の出入船舶表を掲げる

汽船	出		入	
	隻數	噸數	隻數	噸數
函館	三三九	三、六三三	三三一	三、八〇〇
小樽	四〇八	一、六二一	六九	一、二二九
室蘭	四二七	五、〇七八	三三〇	一、六二一
小樽	七六	六、七四八	三三〇	一、六二一
室蘭	五〇三	三、三三三	四七二	三、七六六
計	一、一七五	一、一七五	一、一七五	一、一七五
汽船	一、一七五	一、一七五	一、一七五	一、一七五
帆船	一、一七五	一、一七五	一、一七五	一、一七五
合計	一、一七五	一、一七五	一、一七五	一、一七五

國籍別出入港船舶表

(昭和三三年中)

國籍別	出		入	
	隻數	噸數	隻數	噸數
瑞典	二	二	二	二
伊太利	一	一	一	一
獨逸	一	一	一	一
白耳義	一	一	一	一
丁抹	一	一	一	一
合計	六	六	六	六

商工業機關

概況

本道産業發展の勢頗る旺盛なるものが、あると共に自ら商業の膨脹を招き、経済力の膨脹を促し、内外の商取引は日に煩瑣を加へ、商團亦年と共に増大して來て居る。こ

會議所六、同業組合二〇、酒造組合一八、内聯合會一、社團及財團法人三、準則組合一八〇、商工六四(内聯合會一)の盛況を呈して居る。以下順次是等につき其概要を述べよう。

取引所

本道には唯一の取引所として會員組織小樽取引所がある。本取引所は明治二十七年一月株式會社小樽米穀、鯀、肥料取引所の設立免許に其端を發し、其後幾多の變更を経て大正十三年二月現在の組織に變更設立免許され、其上場物件を米及本道産雜穀、馬鈴薯澱粉並本道及樺太産の鯀、鯀、鯀と爲し之が認可を得て大正十四年一月より賣買取引を開始したので

ある。現在所在地小樽市堺町七十九番地會員數十八名。而して賣買取引高は財界の不況に累されて不振裡に推移して居るが清算取引の運用は漸く理解されつゝありと共に逐次堅實味を帯びた賣買となり青豌豆の公定相場は如きは内外の採算基準となり、又大小豆、中長鶏豆の如きも内地主要市場の標準相場として重視せらるゝに至り、又米の取引に在つては本所の公定相場によつて乃至本所の指定受渡倉庫の所在地たる等の關係に依つて、旭川、瀧川、深川等の集散地相場は全道に基準視せらるゝに至り今後財界の恢復と共に其の業務も順調に發展するものと思惟されてゐる。

今最近三ヶ年の清算取引高を左に掲ぐ

最近三ヶ年清算取引高一覽表

(道廳商工課調査)

Table with columns for year (昭和三十二年, 昭和三十一年, 昭和三十年), commodity (米, 大豆, 青豌豆, 中長, 長), and metrics (数量, 價額). It contains detailed numerical data for various agricultural products over the specified years.

市場

魚菜卸賣市場

本道魚菜市場の沿革は古い、現在の魚菜卸賣市場は大正十二年八月北海道廳

令第二百二十六號を以て改正の市場規則に依つて設立したもので、目下開設を許可せられたもの百十九箇所ある。之を經營主体によつて分類する時は、普通市場八十五、漁業組合經營二十一、産業組合經營

營六で、此外市場類似の業務を營み市場規則の準用を受けて居るものが七箇所あり、是等市場は公共的機關として完備した衛生的設備の下に其使命を完うする様努めて居る。左に地方別分布を掲ぐ。

魚菜卸賣市場地方別分布表

(昭和二年末現在 道廳商工課調査)

Table showing the distribution of fish and vegetable wholesale markets by region. Columns include market type (普通市場, 漁業組合市場, 産業組合市場, 規則準用市場, 合計) and specific market names (e.g., 石狩, 空知, 上川, 後志, 檜山, 檜西, 釧路, 根室, 網走, 宗谷).

右表に見る如く市場の最も多いのは空知支廳管内の二四ヶ、浦河支廳の十七、後志支廳の十一之に亞ぎ、其他道内各樞要の地に分布して居る。市場の組織は株式會社最も多く其數五十九で、漁業組合の二一、個人經營の十七之に亞ぎ、他は合名、合資、匿名組合又は産業組合經營の市場である。

式又は組合經營に改める傾向が顯著となつて來た即ち株式經營にあつては取引上荷主に對す信用を増進させる必要があるの他、而土地の有力者又は仲買人等に株式を分配して經營上の利害關係を密接にさせることが得策である爲めであらう。

總額の六十%を占めて居る。尙各市場の取扱高で年十萬圓以上を算するものは約四十有餘あり、其最高は約二百萬圓に上る取扱高を示し、最低は一萬圓前後である。而して市場に於て取扱品目に就ては市場規則に於て魚類、肉類、鳥類、卵類、蔬菜及果實類に限定せられて居り、最近の傾向としては本道大都市に於ては魚類と蔬菜果實類の分業的經營を見つゝある

尙社數と資本金との割合を見るに、株式會社では其社數總數の四割二分八厘に對し資本金總額は八割六分弱て其間隙に株式組織に依る資本集中の性質が物語る

れて居る。之に反し合資會社は社數の三割九分に對し資本金は合名會社の七分四厘よりも遙に下つて六分を示して居り、如何にも小額の出資を以て組織して居る

ものが多くあるを判然と窺ひ得られるのである。

最近五ヶ年會社組織別狀勢一覽表

(道廳商工課調査)

Table showing trends in company organization from 1929 to 1933. Columns include Year, Organization Type, Number of Companies, Capital, and Reserves. Rows are categorized by industry (Agriculture, Manufacturing, Commerce, Transportation).

會社の業態を昭和二年の統計に依つて見るに商業最も多く其數七百七十三で總

數の四割八分弱を占め之に亞ぐば工業の四百三十六、其割合二割七分である。以下運輸業の二百三十一、水産業の八十二

農業の七十八、鑛業の十二の順である、尙資本金の狀態並に社數と資本金の割合等左表の通りである。

會社業態別總括表

(昭和二年末現在 道廳商工課調査)

Summary table of company types and capital. Columns: Industry, Number of Companies, % of Total, Capital, % of Total Capital, Reserves.

會社組織別、業態別一覽表

(昭和二年末現在 道廳商工課調査)

Detailed table of company organization by industry and type. Columns: Industry, Organization Type, Number of Companies, Capital, Reserves. Rows include Agriculture, Manufacturing, Commerce, and Transportation.

而して最も多き商業の内、物品販賣業其半を占め金融業、市場業之に亞ぎ、工業にあつては飲食物工業及製紙、印刷等の雜工業各々其の約三割五分を占め、化

學電氣、機械及器具工業相亞いてゐる。資本金を、五万圓未満、五万圓以上十萬圓未満、十萬圓以上五十萬圓未

滿、五十萬圓以上百萬圓未満、百萬圓以上五百萬圓未満、五百萬圓以上の六種に分けて之を見るに、最近五箇年間に於ける變遷は次表の通りである。

最近五年間會社資本金別變遷表

(道廳統計課調査)

右表にて瞭かな如く少額資本のものは漸次減少し多額資本のものは増加するの傾向を示して居る。斯は企業組織の進歩と財界變動に依り資本の合同集中行はれた結果に外ならない。尙是を昭和二年末に於ける状態に見るに五萬圓未満の小資本を擁する會社最も多く總數の五割七分六厘を占め之に亞ぐば十萬圓以上五十萬圓

未滿の會社で總數の二割二分二厘に當る以下五萬圓以上十萬圓未滿のもの、五萬圓以上十萬圓未滿のもの、百萬圓以上五十萬圓未滿のもの順次相亞ぎ、五百萬圓以上の會社は單に六あるのみである。而して今之を資本額の上から見るときは社數六の五百萬圓以上の會社が最高で

其資本總額は八千九百五十萬圓で社數の最も多い五萬圓未滿の會社の資本額は一千七百七十三萬圓で最下位に在る。今左に昭和二年末に於ける組織別、資本別による會社の状態を掲げよう。

年次	昭和二年		昭和元年		昭和四年		昭和十年		昭和十四年	
	社數	資本	社數	資本	社數	資本	社數	資本	社數	資本
五萬圓以上	2	1,015,837	2	1,015,837	2	1,015,837	2	1,015,837	2	1,015,837
十萬圓以上	2	1,015,837	2	1,015,837	2	1,015,837	2	1,015,837	2	1,015,837
五十萬圓以上	2	1,015,837	2	1,015,837	2	1,015,837	2	1,015,837	2	1,015,837
百圓以上	2	1,015,837	2	1,015,837	2	1,015,837	2	1,015,837	2	1,015,837
十萬圓未滿	2	1,015,837	2	1,015,837	2	1,015,837	2	1,015,837	2	1,015,837
五十萬圓未滿	2	1,015,837	2	1,015,837	2	1,015,837	2	1,015,837	2	1,015,837
百圓未滿	2	1,015,837	2	1,015,837	2	1,015,837	2	1,015,837	2	1,015,837
十圓未滿	2	1,015,837	2	1,015,837	2	1,015,837	2	1,015,837	2	1,015,837
一圓未滿	2	1,015,837	2	1,015,837	2	1,015,837	2	1,015,837	2	1,015,837

會社組織別資本別一覽表 (昭和二年末現在 道廳統計課調査)

資本額別	區分	組織別	社數	資本金	拂込資本金	積立金	組織別	社數	資本金	拂込資本金	積立金
五萬圓以上	合	株式會社	2	1,015,837	1,015,837	1,015,837	株式會社	2	1,015,837	1,015,837	1,015,837
十萬圓以上	合	株式會社	2	1,015,837	1,015,837	1,015,837	株式會社	2	1,015,837	1,015,837	1,015,837
五十萬圓以上	合	株式會社	2	1,015,837	1,015,837	1,015,837	株式會社	2	1,015,837	1,015,837	1,015,837
百圓以上	合	株式會社	2	1,015,837	1,015,837	1,015,837	株式會社	2	1,015,837	1,015,837	1,015,837
十萬圓未滿	合	株式會社	2	1,015,837	1,015,837	1,015,837	株式會社	2	1,015,837	1,015,837	1,015,837
五十萬圓未滿	合	株式會社	2	1,015,837	1,015,837	1,015,837	株式會社	2	1,015,837	1,015,837	1,015,837
百圓未滿	合	株式會社	2	1,015,837	1,015,837	1,015,837	株式會社	2	1,015,837	1,015,837	1,015,837
十圓未滿	合	株式會社	2	1,015,837	1,015,837	1,015,837	株式會社	2	1,015,837	1,015,837	1,015,837
一圓未滿	合	株式會社	2	1,015,837	1,015,837	1,015,837	株式會社	2	1,015,837	1,015,837	1,015,837

會社の支店
以上は道内本店會社のみに就て記したものであるが、以下道外に本店を有する本店支店に就て述べよう。從來本店は拓殖事業の促進上内地資本の移入を奨励したのと一面各種産業の發展に伴つて府縣の有力會社で道内各地に支店を設置し活躍するものが多くなり、又道内に本店を有する會社も事業擴張の基礎を固め各地に支店を設くるもの次第に多きに至つた。

今昭和三年末現在に於ける之等支店の状態を見るに、其支店數は總數二百二十六で、其中、道内に本店を有するもの、支店は百〇一(内、銀行支店六十二)である。而して是等支店を業態別に見るときは、商業の二百十五最も多く、工業の二十、運輸及倉庫業の十二が之に亞いてゐる。更に組織別に見ると株式會社が二百九で總數の八割一分に當り、次位は合名會社の二十である。尙近年中央に本店

を有する保險會社の本店進出が實に顯著な趨勢を示して居る。要するに本店に支店を設置し道外に本店を有する會社は其多くが大資本を擁する本邦有数の會社である、其主要なるものを挙げると、商事會社にあつては三井物産株式會社、三菱商事株式會社等があり工業會社にあつては、王子製紙株式會社(工場)、富士製紙株式會社、大日本麥酒株式會社、淺野セメント株式會社、帝國製麻株式會社、日本製鋼所等があり、銀

行ては日本銀行を首めとし、安田銀行、三井銀行、第一銀行、十二銀行及不動、安田の二貯蓄銀行等、運輸及倉庫にあつ

ては近海郵船株式会社、國際通運株式会社、濫澤倉庫株式会社等、鑛業では北海道炭礦汽船株式会社があり、水産業には

日魯漁業株式會社があり、是等何れも本道事業界の重鎮で、本道産業の發展に大なる貢獻を爲してゐるのである。

會社支店一覽表

(昭和三年末現在 道廳商工課調査)

Table with columns: 業別 (Industry), 社數 (Number of Companies), 道内に本店を有するもの、支店 (Number of branches in the prefecture), 道外に本店を有するもの、支店 (Number of branches outside the prefecture), 株式合資 (Incorporated companies), 合名株式合資 (Partnership companies), 計 (Total).

備考 本表は本店の業種に據らず支店業務の實質上から區別した。

實業團體

商工會議所

本道に於ける商工會議所は明治廿八年函館、小樽の兩市に設立されたのを嚆矢とし其後札幌、旭川、室蘭、釧路の各市に設立を見、現在六會議所あり、何れも商工業の改善發達に關し諸般の施設を行ひ其の機能の發揮に努めて居る。即ち下の通り。

商工會議所一覽

(昭和四年末現在 道廳商工課調査)

Table with columns: 會場所名 (Meeting place name), 區分 (Division), 事務所の位置 (Office location), 設立年月日 (Establishment date), 昭和四年度經費豫算 (Estimated expenses for the 4th year of the Showa era).

同業組合 本道に於て重要物産同業組合法に依り設立せられた同業組合は、明治三十三年五月設立の函館刻昆布同業組合が最も古く其後對外的取引の増加と共に組合の設

立に依り検査事業を行ひ以て品質の改良と聲價の發揚を爲すの緊要なるを認められるに至り、漸次各地に各種同業組合の設立を見、現在二十ある。之を業態に依つて分類すれば木炭七、米穀五、海産四

木材一、果實蔬菜一、蠶種一、酒問屋一、何れも和衷協同營業上の弊害矯正、販路の擴張及共同利益の増進に努めて居る今之等組合の名稱、事務所の位置、設立年月日及經費豫算等を示せば左の通り

同業組合一覽表

(昭和三年末現在 道廳商工課調査)

Table with columns: 名稱 (Name), 區分 (Division), 事務所の位置 (Office location), 地 (Location), 設立年月日 (Establishment date), 員組數合 (Number of members), 昭和四年度豫算額 (Estimated amount for the 4th year of the Showa era).

營業所	
本店	札幌市南二條西四丁目
北七條支店	同 市北七條西四丁目
苗穂支店	同 市北三條東七丁目
西出張所	同 市南一條西三十三丁目
東屯田出張所	同 市南七條西八丁目
函館支店	函館市鶴岡町十九番地
小樽支店	小樽市稻穂町東七丁目
手宮出張所	同 市錦町四十四番地
旭川支店	旭川市四條通八丁目
豊原支店	樺太豊原町大通
代理店	室蘭、岩見澤、栗山、美唄、帶廣、余市

創立大正十一年一月
資本金五拾萬圓



株式會社 北門貯蓄銀行

當銀行の特色

安全 預金三分の一の有價証券を政府に供託してゐます。
確實 取締役は連帶無限の責任を負ふて居ります。
有利 貯蓄預金は利子割合よく其上一切税金がかゝりません。
簡便 普通貯金は十錢以上預ります。定期積金は毎月集金に伺ひます。

役員

取締役頭取 板谷宮吉 (小樽)
 専務取締役 小竹文次郎 (札幌)
 取締役 古谷辰四郎 (札幌)
 取締役 藪原惣七 (札幌)
 取締役 笠原定藏 (旭川)
 監査役 岡本康太郎 (函館)
 監査役 岡宮脩治 (札幌)

金融

北海道金融事業概況

北海道は現に開拓の道途に在り、其の經濟的實情は今日と雖も尙内國植民地の域を脱しない。従つて、此の地に大いに資本と努力、換言すれば金と人を入れてこれが開發を圖るは、刻下の我が國情に鑑み寔に一日を緩ふすべからざる喫緊の時勢である。

就中、資金の充實は急務中の急務であり、之に依てこそ諸般の事業は興り得べし、且凡百の施設は遂げ得られる譯で、事業勃興發展し、施設整備完成せんか人々は招かずして集集すべく、斯くてこそ拓地殖民の大業は容易に進捗せしめ得るのである。

此の意味に於て本道の金融事情は頗る注目すべき處に屬し、其の金融政策は拓殖政策の根幹を爲すと斷して差支へない言ふ迄も無く現代經濟界の原動力は金融界に在り、現代金融界の中心は銀行である。金融資本は廣く經濟界の活動を左右すべく、銀行及其の活動を中心として金融界の大波は動き、信用組合、無盡會社、質屋等の庶民金融機關は傍系機關として銀行の金融的機能を補充し、國家、公共團體等の資金運用、例へば簡易保險

金融

積立金貸付其他の低利資金貸付は専ら公共的の謂は公益金融として特筆すべきものである。

本道に於ける上記各種金融機關の体系は、先には北海道拓殖銀行の設立に依り、後には歐洲大戰當時に於ける産業經濟界の躍進的發達に促されて著しく整ひ、全道各地に金融機關網が張られ地方的産業の發達、地方經濟界の開發を促進したること尠くして無い。

然し、之を本道拓殖の理想、本道の經濟的價值から言へば、今日に於ける金融機關普及の程度並に其活動振に付ても尙遺憾の點無しとせず、今後の改善に俟つべき事項は幾多存する。とは言へ、其の改善は素より急激には望むべからず、道内産業經濟の發達に伴ふて或は人為的に或は自然的に行はるべきものであらうが兎も角、或は資金の充實策に於て、或は金利の低下策に於て、更に又庶民金融の現状に於て、若干の欠陥が存することは覆ふべからざる事實である。

これを如何にして改善するかを論ずるのには本書の任務では無いから之を略さねばならぬ。が、茲に本道金融政策上に欠陥が存することを特記して讀者の注意を促すことは無意議ではあるまい。

由來、本道は其經濟的事情に應じ、各種事業の企劃頗る旺盛に、農工商水産業等各方面的の資金需要は、累年駁々乎とし

て遞増しつゝある。而して、現在に於ては、不動産、漁業權、工場財團鐵道財團等を抵當とする長期資金は専ら北海道拓殖銀行の供給に俟ち、短期商業資金は、各地普通銀行及拓殖銀行其他が之に應じて居る。

又所謂金融期節は、地方的事情の相異に基き一概には言へないが、鯨魚、遠洋漁業等の着漁仕込資金即ち漁業資金、肥料、薄荷、雜穀等の農業資金、造材資金、並に本道の特殊事業資金(製紙、石炭、麥酒、製麻等)などを通じ、大体八九月より翌年四五月頃までが繁忙期に屬する。金利は一般に内地府縣に比すれば少く高率ではあるが、これは當然のこととして一面から言へば本道の金利が内地に比し稍高位に在るは即ち内地方面からの資金移入を促す所以であつて強ち悲觀すべきでは無い。

今、昭和三年末現在に於ける各種金融機關の狀勢を示せば左の通り

區分	本店	支店	出張所	合計
銀行	一〇	二三	五	三六
無盡會社	一六	一	一	一八
信用組合	四八	一	一	五〇
質屋	八七	一	一	八九
計	一六二	二七	一	一九〇

(備考) 信用組合数は昭和二年度末現在である。本表は道廳商工課調査。

年次	下合	上合	下合	上合
昭和三年	二九六、八五五、四三四	二六六、六六六、四〇八	一三二、八八七、七六五	七六、五三六、六四八
昭和二年	五三三、八七五、〇七六	五〇六、五八六、六〇〇	一八七、三九九、一五七	一一七、七九六、三〇一
昭和元年	二二〇、九五〇、四二一	二二〇、七四〇、四三三	七三、五九四、〇三三	五三、八六四、二二一
合計	一、〇五〇、五八〇、五三〇	一、〇〇三、九八三、〇四一	三九三、八八〇、九一五	二〇四、一六六、一六〇

銀行總出入金

次に全道銀行の入金、出金の状況を見る
 千七百四十五万八千四十一圓、出金九十二億一千五百二十八万四千三百九十七圓
 昭和三年中に於ては入金九十一億八千七百四十五万八千四十一圓、出金九十二億一千五百二十八万四千三百九十七圓
 二、結局全道銀行に於て取扱つた昭和三年中の總金額は百八十四億二百七十四万二千四百三十八圓の巨額に上ることになる。

昭和三年及二年中銀行總出入金表

(道廳商工課調査)

期別	昭和三年		昭和二年	
	入	出	入	出
上半期	三、九四二、四〇九、三三三	三、九七一、四三七、八〇四	三、九三三、四四三、六二二	三、八九八、九五四、三三〇
下半期	五、二四五、〇四八、八一八	五、二四三、八二六、五九三	四、三六一、〇六七、三三五	四、二五六、八六七、五一一
合計	九、一八七、四五八、〇四一	九、一八五、二七四、九二七	八、二四四、二七〇、九七五	八、一五五、八二一、八四一

最近五箇年銀行總出入金一覽

年次	入		出		合計	金額在高位	有價証券高位	現在金
	入	出	入	出				
昭和三年	九、一八七、四五八、〇四一	九、一八五、二七四、九二七	一八、四〇三、七四三、四三三	一八、四〇三、七四三、四三三	二六、四五九、四五三	二六、四五九、四五三	四四、八八六、五二九	
昭和二年	七、二三三、〇七三、四六四	七、二二七、五九三、九一〇	一四、四七〇、六四三、三七四	一四、四七〇、六四三、三七四	二五、二九六、三〇三	二五、二九六、三〇三	四四、九八二、四〇〇	
昭和元年	九、三六六、九二二、四六四	九、三六六、九二二、四六四	一八、七七一、八三六、三四七	一八、七七一、八三六、三四七	二二、一三三、八五五	二二、一三三、八五五	四四、六五三、〇九七	
大正十三年	一三、〇九三、二七八、七三三	一三、〇九三、二七八、七三三	二四、一八五、九〇八、四七八	二四、一八五、九〇八、四七八	二〇、五八七、一四四	二〇、五八七、一四四	四四、七三〇、一〇三	
大正十四年	八、七三三、九三六、三三三	八、七三三、九三六、三三三	一七、四四三、八五三、〇五三	一七、四四三、八五三、〇五三	一九、三二七、〇七七	一九、三二七、〇七七	四四、九八二、四〇〇	
大正十三年	九、一八七、四五八、〇四一	九、一八五、二七四、九二七	一八、四〇三、七四三、四三三	一八、四〇三、七四三、四三三	二六、四五九、四五三	二六、四五九、四五三	四四、八八六、五二九	

無盡業

備考 昭和三年は道廳商工課調査他は道廳勸業統計による。
 本道に於ける無盡業は大正四年發布の無盡業法に依り翌五年三月旭川市の上川無盡株式会社に免許されたのが其の嚆矢

である。爾來逐年業者の増加と共に一面實業界の有力者、其の經營の任に當り漸次之が普及に努めた結果近時頓に世人の認識を高め庶民金融機關として重要な位置を占むるに至つた。今昭和三年末に於

ける状況を見るに、無盡會社の總數十六で、之が分布は旭川市に三、札幌及函館の兩市に各二、小樽市、室蘭市、釧路市瀧川町、野付牛町、増毛町、網走町、帶廣町及根室町に各一づゝある。其の資本

金の總額は二百六十六万五千圓で、拂込資本金は百五十三万四千七百五十圓になつて居る。

最近五箇年資本金及準備金趨勢一覽

(道廳商工課調査)

年次	公稱資本金		拂込資本金		法定準備金	
	公稱資本金	拂込資本金	公稱資本金	拂込資本金	公稱資本金	拂込資本金
昭和三年	二、六六五、〇〇〇	一、五三四、七五〇	二、六六五、〇〇〇	一、五三四、七五〇	二、六六五、〇〇〇	一、五三四、七五〇
昭和二年	二、四三三、〇〇〇	一、三〇〇、〇〇〇	二、四三三、〇〇〇	一、三〇〇、〇〇〇	二、四三三、〇〇〇	一、三〇〇、〇〇〇
昭和元年	一、六〇五、〇〇〇	一、〇四五、〇〇〇	一、六〇五、〇〇〇	一、〇四五、〇〇〇	一、六〇五、〇〇〇	一、〇四五、〇〇〇
大正十四年	二、六六五、〇〇〇	一、五三四、七五〇	二、六六五、〇〇〇	一、五三四、七五〇	二、六六五、〇〇〇	一、五三四、七五〇
大正十三年	二、四三三、〇〇〇	一、三〇〇、〇〇〇	二、四三三、〇〇〇	一、三〇〇、〇〇〇	二、四三三、〇〇〇	一、三〇〇、〇〇〇
大正十一年	一、六〇五、〇〇〇	一、〇四五、〇〇〇	一、六〇五、〇〇〇	一、〇四五、〇〇〇	一、六〇五、〇〇〇	一、〇四五、〇〇〇

而して昭和三年末に於ける業務の状況は各會社を通じ其總數千七百五十五で、

總口數六万三千九百八十九に達し、此掛金契約高は五千二百五十七万八千九百圓

に及んでゐる。今左に最近の状況を示す。

最近五箇年間組數、口數、掛金契約高一覽表

(道廳商工課調査)

年次	區分	給付金		掛金		年次	區分	給付金		掛金	
		總組數	總口數	契約高	契約高			總組數	總口數	契約高	契約高
昭和三年	年末	一、七五五	六三、九八九	五三、五七八、九〇〇	五三、二九二、二八七	大正十四年	年末	一、三三六	四八、四一五	三五、八八一、四三三	三七、三三三、二六
昭和二年	年末	一、五三二	五七、八九七	四六、一一七、七〇〇	四九、三三三、〇三三	大正十三年	年末	一、一〇四	四〇、三三〇	二七、二四〇、八〇〇	二九、〇四四、〇八五
昭和元年	年末	一、三三〇	五三、六〇六	四三、一五〇、三〇〇	四三、三三〇、三三四	大正十一年	年末	一、一〇四	四〇、三三〇	二七、二四〇、八〇〇	二九、〇四四、〇八五

給付金額別の状況

斯業の趨勢は前表に見て瞭かな様に、逐年發展の一路を辿り將來更に伸暢すべきは暇を要せぬ所である。殊に近時經濟界の事情は農漁村の逼迫に加へて中小商工業者の資金難を叫びしめて居り、之

が簡易に融資の途を講じ其緩和に貢献しつゝあるものは、先づ無盡業に指を屈せねばならない。従つて現今の状況は單なる利殖が其の目的では無く、生産資金の融資が其の大なる目的になつて來て居る其の結果として漸次大額無盡の要求とな

り、現に三百圓會以下の如きは僅少で最も多數を占めて居るのは五百圓會、千圓會、更に逐次二千圓會、三千圓會、五千圓會に進んで居る。

昭和三年末給付高一覽表

(道廳商工課調査)

Table with columns for amount (金額別), number of groups (組數), and number of individuals (口數). Rows represent different categories of payments.

無盡會社一覽表

(昭和三年末現在)

Table listing various companies (會社名), their locations (所在地), and financial details like capital (資本金) and assets (資拂金込).

郵便貯金 附振替貯金

勤儉貯蓄の美風を振興し餘資を積ませる事は國民生活の基礎を安定し、進んで將來に活用する生産資金の充實を期する所以であつて、此等の指導誘掖に就ては今日に到る迄幾多の方法が講ぜられて居る。

最近五箇年郵便貯金趨勢表

(札幌逓信局調査)

Table showing trends in postal savings from 1914 to 1933, categorized by type (種別) and year (年度).

る。従つて貯蓄思想は漸次普及徹底するに至り一般銀行預金の増加と共に零細の資を蓄積するに最も便利な郵便貯金も亦年を逐ふて増加して来る。殊に大正五年小樽に貯金支局が設置されてからは其發達愈々顯著となり更に昭和二年の金融恐慌に際しては其の安全有利を深く印象付

けられ、進度一層高まつて、昭和三年度末(昭和四年三月末)に於ては預入總人員百五十七万七千五百五十六人に對する總貯金額七千四百七十九万九千三百五十六圓を示し、其預金者一人當四十七圓四十一錢となつて居る。

自明治四十二年度至昭和二十二年 大藏省預金部貸付金一覽表

(道廳調査課調査)

Table of financial data for various categories (e.g., 住宅, 公營住宅, 公設住宅, 公設住宅) across different years (e.g., 自明治四十二年, 大正十一年, 大正十二年, etc.).

產畜漁 業産業 組組組 合合合

簡易保險積立金貸付金

(大正八年度ヨリ貸付開始) (同上調査)

Table of financial data for '簡易保險積立金貸付金' across various years (e.g., 自大正十一年, 大正十二年, 大正十三年, etc.).

資金の道外流出入

拓殖の進展に伴ふ道内諸事情の發達は必然に本道對外間の交渉を深からせ、資金の移動亦頻繁を極め其對外的流出入金

昭和二年中に於ける本道對道外(府縣及)の資金流出入に關する調査

は互額に上つて居る。今、昭和二年中に於ける本道對道外(府縣及外國)間の流出入金に就き道廳商工課の調査せる所を見るに、道外から本道に流入した總金額は六億九千八百八十六萬四千七百七十九圓に達し、結局昭和二年に於ては一億一千四百三十六萬四千四百六十六圓の本道資金の道外流出になつて居る。

科	目	金額	科	目	金額
流入	一、公法上に基くもの 各省豫算の配布	一二〇、三三五、三三八圓	流出	一、公法上に基くもの 諸公課官營收入	一三一、四七六、四二六圓
	二、私法上に基くもの (移輸出を除く)	六、五一二、四一八圓		二、私法上に基くもの (移輸出を除く)	一、九〇〇、八六九圓
	(イ)道外投資証券の利子 及配當	一、五〇一、九四六圓		(イ)道内投資証券の利子 及配當	一、九〇〇、八六九圓
	公債	七、〇七六圓		株式配當其の他	(拂込金三四、〇四一、九九二圓)
	勸業債	七、〇七六圓		(ロ)道外人の道内事業及 勞務利益	七、三九八、六六〇圓
	郵便貯金利子	(元金 六一、六〇四、九三六圓) 二、七七二、二二二圓		漁夫出稼給料	二、三五三、九五〇圓
	株式配當其の他	(元金 六一、六〇四、九三六圓) 二、一六七、一七四圓		個人營業收益	一、一五六、六三五圓
	(ロ)道外事業及勞務利益	(拂込金三八、六七一、五三四圓)		不動産貸付其の他收入	三、八八八、〇七五圓
	漁夫出稼給料	七、〇〇三、一八七圓		(ハ)保險關係の支拂	一四、一九二、一八〇圓
	海運	一、四八八、六〇〇圓		(ニ)道内人の道外消費	一〇、〇八一、二七三圓
個人營業收益	二、三五三、九五〇圓	道内人の道外消費	二、七九八、九一三圓		
不動産貸付其の他收入	五、二三八三圓		一、二五九、〇二七圓		
(ハ)保險關係の收入	三、一〇八、二五四圓		二、六五四四圓		
受取生命保險金	九、三二二、七一五圓		五〇、三一四圓		
受取火災保險金	四、四一六、九九九圓				
受取海上保險金	二、〇五二、七九九圓				
	一、一〇〇、一七六圓				

科	目	金額	科	目	金額
流入	受取傷害保險金	四四二圓	流出	(ホ)道内人の道外放資	一九五、一五三、一六六圓
	受取運送保險金	一一、五三九圓		郵便貯金	六一、七四〇、七八六圓
	道内代理店費用	一、七三九、七八〇圓		道外銀行への預金	一、二七七、八五〇圓
	(ニ)道外人の道内消費	四四、〇四〇、二九〇圓		道内銀行の道外貸出	一〇五、五二九、二一六圓
	道外人の道内消費	四四、〇四〇、二九〇圓		(ヘ)道外人の道内放資	二、〇九七、五八二圓
	(ホ)道外人の道内放資	九四、二六四、七四〇圓		勸業銀行年賦金	二七七、〇〇〇圓
	道外銀行の道内貸出	七二、三五八、五七四圓		同上利息	三一、六二六圓
	道内本店銀行の道外吸 収預金	一一、九九三、七六六圓		簡易保險積立金元利息	一一三、八四六圓
	勸業銀行の貸出	二、七九七、〇〇〇圓		低利資金元利息回收	一、三九五、一一〇圓
	低利資金元利息回收	三、〇六六、六〇〇圓			
(ヘ)道内人の道外放資	八二九、八〇二圓				
公債償還元金	七八五、八九七圓				
勸業債券償還元金	二九、三〇〇圓				
同上割戻金	一四、六〇五圓				
三、貿易關係					
輸移	四〇九、五六〇、三九七圓				
出	三八〇、四〇一、三四〇圓				
入	二九、一五九、〇五七圓				
計	六九一、八六七、八八七圓				

差引流出超過

一一四、三六〇、四四六圓

備考 一、本表は道廳商工課編纂發行之「北海道の商工要覽」に據る。二、尙本調査に關し「註」として次の通り附記してある。
「本調査は、商工課に於ける始めての調査にして、未だ他に之れに類する詳細の數字を調査せられたるものなく、從て彼此
参照の便を缺き、完全なりとは素より云ひ得まいが、出來得るだけ精確な資料を蒐集するに努め、以て集計を爲したる
ものにして若し不足の點あらば、後の繼續調査に依つて漸次完璧を期せむとす。」

種別	本年	前年度	増減
郵便	六、一五、一六九 四、七、一六三 二、五、七九〇 三、三、四二一	七、一、四六九 四、九、九〇〇 一、四、九〇〇 四、〇、七	△△
電信	六、一五、一六九 九〇五席	三、〇、六六通 一〇九席	△△
電報	五、五、八、二、五、四、通 五、三、九、九、六、通	三、〇、六六通 三、五、〇三通	△△

種別	本年	前年度	増減
郵便貯蓄	七、二、七、四、九、四、口 三、〇、八、九、六、六、口 四、六、五、四、〇、五、四、口	八、〇、〇、三、〇、口 三、二、五、四、一、六、口 六、三、〇、五、五、口	△△
簡易生命	一、一、七、五、八、八、件 六、四、四、七、二、八、件 四、八、九、六、二、七、件 九、六、六、三、七、九、八、件 一、〇、七、六、九、五、三、〇、件	一、一、二、三、八、件 七、七、七、〇、三、件 六、七、八、六、二、件 一、一、九、九、一、二、六、九、件 一、一、九、五、三、七、〇、〇、件	△△
郵便貯蓄	六、三、四、二、一、八、九、口 一、二、三、三、九、九、口 一、五、七、七、五、五、六、口 七、四、七、九、九、三、五、六、口	四、四、〇、一、〇、九、口 六、三、四、二、一、八、九、口 一、二、三、三、九、九、口 一、五、七、七、五、五、六、口	△△
郵便貯蓄	三、七、八、八、八、件 八、三、七、八、八、件 五、九、四、四、四、件 九、一、八、二、四、四、件 五、一、三、〇、三、〇、件	三、七、八、八、八、件 八、三、七、八、八、件 五、九、四、四、四、件 九、一、八、二、四、四、件 五、一、三、〇、三、〇、件	△△

昭和三年度札幌逓信事業概要

(札幌逓信局調査) (△、減)

通信

社団法人 小樽銀行集會所組合銀行

- 會社 安田銀行小樽支店
- 會社 三井銀行小樽支店
- 會社 北海道拓殖銀行小樽支店
- 會社 第一銀行小樽支店
- 會社 三菱銀行小樽支店
- 會社 北海道銀行
- 會社 第十二銀行小樽支店
- 會社 第四十七銀行小樽支店
- 會社 北門銀行小樽支店
- 會社 中越銀行小樽支店

種別	電 話	電 報	電 報	電 報
電 話	電 話	電 話	電 話	電 話
電 報	電 報	電 報	電 報	電 報
電 報	電 報	電 報	電 報	電 報
電 報	電 報	電 報	電 報	電 報

昭和三年度取扱物數等概況

(札幌遞信局調査)(△、減)

種別	管内郵便局所口數	管内郵便局所口數	管内郵便局所口數	管内郵便局所口數
管内郵便局所口數	管内郵便局所口數	管内郵便局所口數	管内郵便局所口數	管内郵便局所口數
管内郵便局所口數	管内郵便局所口數	管内郵便局所口數	管内郵便局所口數	管内郵便局所口數
管内郵便局所口數	管内郵便局所口數	管内郵便局所口數	管内郵便局所口數	管内郵便局所口數
管内郵便局所口數	管内郵便局所口數	管内郵便局所口數	管内郵便局所口數	管内郵便局所口數

公 濟	會 計	海 事	電 氣
公 濟	會 計	海 事	電 氣
公 濟	會 計	海 事	電 氣
公 濟	會 計	海 事	電 氣
公 濟	會 計	海 事	電 氣

種別	管内郵便局所口數	管内郵便局所口數	管内郵便局所口數	管内郵便局所口數
管内郵便局所口數	管内郵便局所口數	管内郵便局所口數	管内郵便局所口數	管内郵便局所口數
管内郵便局所口數	管内郵便局所口數	管内郵便局所口數	管内郵便局所口數	管内郵便局所口數
管内郵便局所口數	管内郵便局所口數	管内郵便局所口數	管内郵便局所口數	管内郵便局所口數
管内郵便局所口數	管内郵便局所口數	管内郵便局所口數	管内郵便局所口數	管内郵便局所口數

前年比較割合	（渡拂）		契約申込人口千人當數	現在契約受持年度未契約件數	同保險料額	同保險金額	同人口千人當契約歩合	同全國平均	一件平均保險料	一件平均保險金額
	前年比較割合	一口拂渡額								
0.27割	107.58円	0.27割	16,554	65,966件	10,553,610円	1,553,610円	1,553,610円	1,553,610円	1,553,610円	1,553,610円
0.78割	88.94円	0.78割	5,748	23,382件	3,608,203円	3,608,203円	3,608,203円	3,608,203円	3,608,203円	3,608,203円
0.10割	84.81円	0.10割	10,943	49,853件	7,299,489円	7,299,489円	7,299,489円	7,299,489円	7,299,489円	7,299,489円
0.11割	84.00円	0.11割	18,907	107,404件	12,384,294円	12,384,294円	12,384,294円	12,384,294円	12,384,294円	12,384,294円
0.11割	78.03円	0.11割	3,755	21,657件	3,375,849円	3,375,849円	3,375,849円	3,375,849円	3,375,849円	3,375,849円
1.36割	85.00円	1.36割	4,077	17,073件	2,541,297円	2,541,297円	2,541,297円	2,541,297円	2,541,297円	2,541,297円
0.14割	93.97円	0.14割	6,044	28,823件	3,976,174円	3,976,174円	3,976,174円	3,976,174円	3,976,174円	3,976,174円
0.26割	68.10円	0.26割	63,326	376,977件	53,534,333円	53,534,333円	53,534,333円	53,534,333円	53,534,333円	53,534,333円
0.25割	79.78円	0.25割	117,588	644,788件	96,633,798円	96,633,798円	96,633,798円	96,633,798円	96,633,798円	96,633,798円

備考 電報欄中市部郡部二無線局取扱のもの含まず。簡易保険欄中保険局調査市部及郡部は當局調査

日本放送協會北海道支部状況

昭和三年五月三日を以て月寒放送所及中島演奏所共施設工事落成し、同日送信放送開始

大臣宛放送用私設無線電話工事落成届を提出し検査を受けた結果同日二十三日附を以て同廿九日通信大臣より檢定證書の交付を受けた。仍て即日通信大臣宛放送開始届を提出し六月五日から放送を開始したのである。

廣島受信所 無線中繼放送の爲め昭和三年十一月一日札幌郡廣島村字中の澤に廣島青年會館の一部を無料借受をして受信所を設置した。小樽相談所 受信機診療等の爲め昭和四年三月一日小樽市稻穂町今井吳服店の一部を無料で借受け相談所を設けた。

聴取申込、許可廢止増加月表

（昭和三年以降日本放送協會北海道支部調査）

月別	申込數	一日平均	許可數	一日平均	廢止數	一日平均	増加數	一日平均
昭和三年四月末現在	1,184	60	1,184	60	1,184	60	1,184	60
昭和三年五月底現在	1,647	51	1,647	51	1,647	51	1,647	51
昭和三年六月底現在	5,044	151	5,044	151	5,044	151	5,044	151
昭和三年七月底現在	4,408	139	4,408	139	4,408	139	4,408	139
昭和三年八月底現在	4,408	139	4,408	139	4,408	139	4,408	139
昭和三年九月底現在	4,408	139	4,408	139	4,408	139	4,408	139
昭和三年十月底現在	4,408	139	4,408	139	4,408	139	4,408	139
昭和三年十一月底現在	4,408	139	4,408	139	4,408	139	4,408	139
昭和三年十二月底現在	4,408	139	4,408	139	4,408	139	4,408	139
計	40,477	127	40,477	127	40,477	127	40,477	127

聴取者加入概況 昭和三年度状況 聴取者の加入勧誘に付ては事業の周知宣傳と放送内容の改善等に依り極力増加に努めると同時に一面無届聴取者の調査取締をした結果昭和三年四月關東支部から移管された聴取者數は一千八百廿四口であつたが年度末には一万五千六百九十八口に増加した。計畫豫定數の二万を収めることの出来なかつたのは廢止者二千九百十四口あつたのと地勢の關係に依つて礪石に恵まれない地方多い等は其一因をなしてゐるが、漸次増加の趨勢を示してゐる。

聴取者市支廳別表

（昭和四年七月分日本放送協會北海道支部調査）

市支廳別	前月末現在數	本月分許可數	本月分廢止數	變更	本月末現在數	聴取者一人當世帯數	有料	免除	會員	職員	料計
札幌市	5,445	163	193	15	5,315	2.5	5,033	28	210	53	290
小樽市	1,266	118	136	18	1,248	1.7	1,173	75	75	75	75
旭川市	639	111	133	22	617	1.4	584	33	33	33	33
室蘭市	2,634	77	115	38	2,596	1.7	2,467	139	139	139	139
釧路市	1,636	77	115	38	1,598	1.4	1,511	77	77	77	77
石狩支廳	1,574	77	115	38	1,536	1.4	1,468	68	68	68	68
空知支廳	1,574	77	115	38	1,536	1.4	1,468	68	68	68	68
知床支廳	1,574	77	115	38	1,536	1.4	1,468	68	68	68	68
計	21,661	677	808	139	21,492	1.7	20,811	1,173	1,173	1,173	1,173

娯楽演計

劇藝

二〇九
二七
七五六

一〇〇、四四
一五、五三
三三、四八

一、一五七、二六

九五六

三六、三六

六七九

一、一五九、〇三

三三

五〇三

一、一七三、〇三

一、一七三、〇三

一、一七三、〇三

一、一七三、〇三

一、一七三、〇三

一、一七三、〇三

三二、四八

四七二

二五、六、一五

一、一三八

一、一三八

一、一三八

一、一三八

一、一三八

一、一三八

一、一三八

一、一三八

一、一三八

一、一三八

一、一三八

一、一三八

特別放送 本年度放送中道内聴取者に最も大きい衝動を與へ、如何に放送の効果を偉大なるかを如實に示したものは左の通りである。

一、全道樺太少年野球大會中継放送

昭和三年八月五日北海タイムズ社主催に係る右大會の準決勝戦及決勝戦の中継放送は當支部として最初の試みてあるのと當日は強風の爲め「ゲーム」の進行を阻害したが全く豫期以上の好成績を挙げ多大の賞讃を博した。昭和四年八月にも同様中継放送し全道のフアンを唸らせた。

二、御大典御模様の無線中継放送

昭和三年十一月六日から同廿九日に至る八千万の國民が赤誠を以て壽ぎ奉る曠古の御大典に際し最も地理的に恵まれない本道民に對し無線中継放送に依り御大典の御模様を遺憾なく拜得し得しめた効果は永久に忘れる事の出来ない所である。

三、御大禮觀兵式並に觀艦式御模様の無線中継放送

昭和三年十二月二日の大禮觀兵式並に同三日の觀艦式の御模様

の無線中継放送は遺憾なく放送の使命を果し得て聴取者に感激を與へた。昭和四年一月十日から十日間に渉る東京大角力春場所の實況無線中継放送は道民一般の期待した所で大好評を博した。講座に關する發刊物 本年中學術並に技藝講座開講等の爲め發刊した教材及講演集は左の通り

日本放送協會北海道支部 收支計算書

Table with columns for 收入之部 (Income) and 支出之部 (Expenditure). Includes sub-sections like 聴取料收入 (Listener fees), 發刊物收入 (Publication income), 雑収入 (Miscellaneous income), 本年度欠損金 (Annual deficit), 諸感度放臨事加周技放 (Various fees), 合諸感度放臨事加周技放 (Total various fees).

交通

本道國有鐵道

昭和三年事業成績

線路延長 本道に於ける昭和三年末現在の鐵道は國有千六百二哩一分(札幌調査)私設二百五十五哩九分(道廳道路課調査)合計千八百五十八哩で、國有鐵道は面積三方里八四に付一哩の比例である(一方里に付〇・二六哩)今内地府縣の比例を見るに面積二方里七分に付鐵道一哩の割合で、本道は私設鐵道を加へても尙三方里三分に付鐵道一哩(一方里に付〇・三哩)に過ぎず面積の比例すれば本道の鐵道延長は内地府縣に比し將來敷設を要するものが少くない。

業務

機關

(昭和三年十二月末日現在) 札幌鐵道局調査

道の交通系統に新紀元を劃した事は特筆すべき事である。又之を工事の状況に見るに昭和三年末現在北海道事務所管内の石北線、上川、中越間及九瀬布白瀧間、廣尾線、帶廣、中札内間、釧網線、弟子屈、標茶間及斜里、札鶴間、札沼線、石狩、沼田、雨龍間、雨龍線、鷹泊、幌加内間、瀨棚線、國縫、珍古邊間、は七分乃至九分通出來高を示し、本年工事の進捗如何にあつては開業の運びに至るべく延長に於て百哩餘に及ぶものあり實に事務所開設以來の記録である。その他に於ても着々豫定の進捗を遂げてゐるが更に昨年度に於て新に起工を見たるものは

營業成績 本年中の旅客は六億二千八百二十三万五千四百二人、取扱収入一千六百五十二万七千四百八十二圓、貨物は十一億二千六百二十三万七千三百六十噸、取扱収入三千八百三十四万四千八百七十二圓、收入合計四千九百三十九万四千八百七十二圓である。即ち收入合計に於て昭和二年末よりも約四千三百萬圓程増加となつてゐる。

庶務課 文書掛、人事掛、賠償掛、庶務掛

交通

普通客貨營業所、驛場、稚内港

釧路、厚岸、桑園、大泊、天寧、小糸魚、狩勝、東留萌、波若、釧北、常紋

一日計	二五、二五七、四五〇
平均	二五、三三〇、三七三
客	一〇、三六九、一〇〇
貨	一、一三四、六九三
客	一六、〇五〇、〇〇七
貨	四三、八五三
客	三、三四〇、〇八三
貨	八八、三七三
客	四八、三九四、〇八九
貨	一三三、二三四

月別運輸成績表 (昭和三年中)

月	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	計
旅人	一、七五六、四三四	一、五〇〇、四八一	一、八七〇、一九九	一、二八八、五六一	一、九二七、九〇七	一、八九四、四五八	一、九七八、八九三	二、四〇八、六〇〇	二、二〇九、六六八	二、二〇九、六六八	一、七九八、九三〇	一、八三三、八四四	二五、二五七、四五〇
取扱收入	三九、八九六、八六〇	三五、〇六六、一六〇	五〇、四一八、三五九	三七、五二八、二六六	五二、五二六、〇八〇	五一、五六六、八三二	六一、八〇〇、六〇七	六三、一七八、四〇九	五六、六七八、四四八	五六、二七五、五四六	四七、一八三、七四一	四六、一三三、四〇三	二五、三三〇、三七三
客	一、〇九〇、三四四	九三七、四九七	一、二九七、四九五	一、四九四、三二五	一、三三九、九六一	一、三三九、九六一	一、三三九、九六一	一、三三九、九六一	一、三三九、九六一	一、三三九、九六一	一、三三九、九六一	一、三三九、九六一	一〇、三六九、一〇〇
貨	三、五二一、七二二	三、〇六六、三三三	四、〇七三、八一一	三、〇七三、八一一	三、〇七三、八一一	三、〇七三、八一一	三、〇七三、八一一	三、〇七三、八一一	三、〇七三、八一一	三、〇七三、八一一	三、〇七三、八一一	三、〇七三、八一一	一、一三四、六九三
客	一、〇八八、二二二	九三三、八七七	一、〇一六、三三六	九三三、八七七	九三三、八七七	九三三、八七七	九三三、八七七	九三三、八七七	九三三、八七七	九三三、八七七	九三三、八七七	九三三、八七七	一六、〇五〇、〇〇七
貨	七、九九五、五二二	九、一四五、三六三	一〇、〇六三、〇五八	九、一四五、三六三	九、一四五、三六三	九、一四五、三六三	九、一四五、三六三	九、一四五、三六三	九、一四五、三六三	九、一四五、三六三	九、一四五、三六三	九、一四五、三六三	四三、八五三
客	二、一九二、三八四	二、四九一、四三三	二、七五〇、〇八三	二、四九一、四三三	二、四九一、四三三	二、四九一、四三三	二、四九一、四三三	二、四九一、四三三	二、四九一、四三三	二、四九一、四三三	二、四九一、四三三	二、四九一、四三三	三、三四〇、〇八三
貨	二、七〇三、一四八	二、六六三、九三九	二、七〇三、一四八	二、六六三、九三九	二、六六三、九三九	二、六六三、九三九	二、六六三、九三九	二、六六三、九三九	二、六六三、九三九	二、六六三、九三九	二、六六三、九三九	二、六六三、九三九	八八、三七三
客	二、〇九二、三六四	二、〇九二、三六四	二、〇九二、三六四	二、〇九二、三六四	二、〇九二、三六四	二、〇九二、三六四	二、〇九二、三六四	二、〇九二、三六四	二、〇九二、三六四	二、〇九二、三六四	二、〇九二、三六四	二、〇九二、三六四	三、三四〇、〇八三
貨	七、〇七三、八一一	七、〇七三、八一一	七、〇七三、八一一	七、〇七三、八一一	七、〇七三、八一一	七、〇七三、八一一	七、〇七三、八一一	七、〇七三、八一一	七、〇七三、八一一	七、〇七三、八一一	七、〇七三、八一一	七、〇七三、八一一	八八、三七三
客	二、〇九二、三六四	二、〇九二、三六四	二、〇九二、三六四	二、〇九二、三六四	二、〇九二、三六四	二、〇九二、三六四	二、〇九二、三六四	二、〇九二、三六四	二、〇九二、三六四	二、〇九二、三六四	二、〇九二、三六四	二、〇九二、三六四	一三三、二三四
貨	七、〇七三、八一一	七、〇七三、八一一	七、〇七三、八一一	七、〇七三、八一一	七、〇七三、八一一	七、〇七三、八一一	七、〇七三、八一一	七、〇七三、八一一	七、〇七三、八一一	七、〇七三、八一一	七、〇七三、八一一	七、〇七三、八一一	四八、三九四、〇八九
客	二、〇九二、三六四	二、〇九二、三六四	二、〇九二、三六四	二、〇九二、三六四	二、〇九二、三六四	二、〇九二、三六四	二、〇九二、三六四	二、〇九二、三六四	二、〇九二、三六四	二、〇九二、三六四	二、〇九二、三六四	二、〇九二、三六四	一三三、二三四
貨	七、〇七三、八一一	七、〇七三、八一一	七、〇七三、八一一	七、〇七三、八一一	七、〇七三、八一一	七、〇七三、八一一	七、〇七三、八一一	七、〇七三、八一一	七、〇七三、八一一	七、〇七三、八一一	七、〇七三、八一一	七、〇七三、八一一	四八、三九四、〇八九

連絡船輸送成績 (昭和三年中)

路航	船名	總噸數	最大速度	旅客定員	臨時定員	輪送人員	貨物	牛馬	輪送貨物	備考
青函	翔鳳丸	三、四六〇	一七	二〇八	一、一六〇	一、〇五五	二、二五五	一、〇五五	七、八七六	五、〇四二
津輕	前丸	三、四六〇	一七	二〇八	一、一六〇	一、〇五五	二、二五五	一、〇五五	七、八七六	五、〇四二
飛騨	第一丸	三、四六〇	一七	二〇八	一、一六〇	一、〇五五	二、二五五	一、〇五五	七、八七六	五、〇四二
松島	青丸	三、四六〇	一七	二〇八	一、一六〇	一、〇五五	二、二五五	一、〇五五	七、八七六	五、〇四二
比田	第一丸	三、四六〇	一七	二〇八	一、一六〇	一、〇五五	二、二五五	一、〇五五	七、八七六	五、〇四二
田村	青丸	三、四六〇	一七	二〇八	一、一六〇	一、〇五五	二、二五五	一、〇五五	七、八七六	五、〇四二
比羅布	第一丸	三、四六〇	一七	二〇八	一、一六〇	一、〇五五	二、二五五	一、〇五五	七、八七六	五、〇四二
計		一九、三二一、五三三		二、一五六	一、一八	一、〇三	六、四	四、三	五、二	一、九、〇五

列車及車輛走行哩 (昭和三年中)

路航泊稚	計
壹亞	一九、三二一、五三三
計岐庭	三、二九七、八七
丸丸	一、七二七、七八
計	五、〇七〇、六五

機關車及換算車輛走行耗 (昭和三年中)

事務所別	營業哩	列車走行哩	客車	貨車	合計
野	一、三三〇、〇	一、三三〇、〇	五、二九八、二一七	一、九四二、二三八	二、四七〇、三九五
鋼	一、七九三、二	一、七九三、二	七、六三三、五五九	二、四四八、一〇四	三、〇八一、六六三
稚	二、〇五三、三	二、〇五三、三	三、四四八、一〇四	一、〇〇三、七二二	四、四五一、八二六
旭	二、八〇、八	二、八〇、八	三、七三〇、七二三	一、〇三三、七〇四	四、七六四、四二七
室	二、五〇、八	二、五〇、八	三、九六六、八八八	一、〇三三、七〇四	五、〇〇〇、五九二
札	二、四二、五	二、四二、五	三、三三三、三三九	一、〇三三、七〇四	四、三六七、〇四三
函	二、四二、五	二、四二、五	三、三三三、三三九	一、〇三三、七〇四	四、三六七、〇四三
計	一、六〇二、一	一、六〇二、一	二、九一六、九三三	一、〇三三、七〇四	三、九五〇、六三七

機關車走行耗

事務所名	機關車走行耗	換算	客車	貨車	合計
野	二、二四三、一六三	二、二四三、一六三	四八、〇三三、四五九	一、九四二、二三八	五、〇八一、六六三
鋼	三、三四五、六四七	三、三四五、六四七	五七、七九九、三八八	二、四四八、一〇四	六、二〇一、五三九
稚	三、八七二、八二四	三、八七二、八二四	六三、三〇三、〇二九	二、四四八、一〇四	六、七六三、九五七
旭	四、一六六、六六三	四、一六六、六六三	七三、〇四三、〇二九	二、四四八、一〇四	七、〇五五、一三七
室	三、一四一、六六三	三、一四一、六六三	六三、三〇三、〇二九	二、四四八、一〇四	六、〇三三、一三七
札	三、九三三、八六六	三、九三三、八六六	七三、〇四三、〇二九	二、四四八、一〇四	六、一〇五、八三七
函	三、九三三、八六六	三、九三三、八六六	七三、〇四三、〇二九	二、四四八、一〇四	六、一〇五、八三七
計	一、九二六、七四一	一、九二六、七四一	二、九一六、九三三	一、〇三三、七〇四	三、九五〇、六三七

一日計平均

一九、三七九、五八四、八
五二、九四九、七

一六六、三三五、三六七、八
四五四、四六八、二

一四六、七五〇、二六一、九
四〇〇、九七五、〇

四三〇、二七三、三五九、〇
一、一七五、四八四、六

七四〇、三二二、九八八、七
二、〇一〇、九〇九、八

三六〇

機關車運轉用消耗品

(昭和三年中)

(括弧數は脂にして瓦を示す)

事務所	機關車運轉用消耗品		數量	代價	實貯數	換算貯數	油數量	油數量代價
	實貯數	換算貯數						
函館	三六、〇〇〇、一六四	三三、〇八一、三六〇	二六、二五五、一五	六、三九六、〇〇五	一六、〇	一四、七	一、二五	二、八五
札幌	八四、七五九、五五三	七六、八五六、七四七	(一七、三九八)	一五、二〇五、五六五	一五、九	一四、四	一、二五	一、一七
室蘭	四二、一五五、一六〇	三八、八二九、八〇八	(一七八、四三七)	六、七三三、五四〇	一四、七	一三、五	一、一五	九、七
旭川	四四、八八二、〇〇八	四一、四四五、〇九二	(八四、〇六九)	七、三三四、五三八	一四、六	一三、二	一、一八	九、三
稚内	二四、七〇三、五五九	二二、八二九、九七五	(一八〇、〇九九)	四、三三八、八二二	一一、八	一一、一	一、〇一	二、五
釧路	二四、二二八、〇六三	二二、三七六、九七五	(四七、六〇五)	四、六三五、八一九	一一、六	一一、一	〇、九五	三、四
野付	二二、三三三、三六六	二二、三三〇、四五〇	(一五、七二〇)	三、八六八、九八三	一一、二	一一、〇	〇、九四	八、三
計	二八二、〇一九、八九三	二五五、七九〇、〇七九	(一九七、四三三)	四八、四四三、二六一	一四、五	一三、一	一、一三	一、〇一
一日平均	七六七、八四一	六九八、八五三	(六六〇、九七五)	一三三、四九五				二、五〇

線路建造物橋梁用地其他

(昭和三年三月末現在)

種別	數量	代價	摘要
本線軌道延長	四、二九〇	一四七、三五〇、四	平方
本線外軌道延長	一一五〇	二、七七一、八四	平方
鐵道場用地	棟	五、〇〇〇	平方
工物	棟	七〇三、八	平方

應官舎其他建物
乘降場延長
貨物積卸場延長
跨線橋臺橋長
計重機車
信號機臺
第一種聯動道
鐵道橋梁(甲)
橋梁(乙)

種別	數量	代價	摘要
伏水覆林路面	九、七一九	六三〇、八四五	平方米
防雪線	一、〇〇八	二〇、一七八	米
高線側	一、九四三	四、七七八	米
低線側	四、九五六	二八、八六一	米
長構內側	九、九一八	二〇、〇九一	基
長構內側	四、九四三	二、〇九一	基
急勾橋梁	二、六八三	二、〇九一	基
緩勾橋梁	二、六八三	二、〇九一	基
小長曲線	二、六八三	二、〇九一	基
小曲線	二、六八三	二、〇九一	基
大曲線	二、六八三	二、〇九一	基
長直線	二、六八三	二、〇九一	基
最長直線	二、六八三	二、〇九一	基
通信線	二、六八三	二、〇九一	基
電力線	二、六八三	二、〇九一	基

經道間總長五米以上の鐵
道橋を計上す
經間を計上す
架設の暗渠を計上す
以上の計上す

本道内ニ於ケル國有鐵道建設線調

一、工事中線 (當所管線)		線名		始點	終點	哩程
木古内線	上磯	木古内	上磯	一七哩		
瀬田線	國縫	瀬田	國縫	三一哩		
札龍線	深川	札龍	深川	四七哩		
雨龍線	留萌	雨龍	留萌	四九哩		
羽龍線	留萌	羽龍	留萌	三三哩		
石北線	留萌	石北	留萌	四三哩		
釧路線	留萌	釧路	留萌	四三哩		
廣尾線	留萌	廣尾	留萌	四三哩		
日高線	留萌	日高	留萌	四三哩		

二、工事未着手線		線名		始點	終點	哩程
木古内線	上磯	木古内	上磯	一七哩		
瀬田線	國縫	瀬田	國縫	三一哩		
札龍線	深川	札龍	深川	四七哩		
雨龍線	留萌	雨龍	留萌	四九哩		
羽龍線	留萌	羽龍	留萌	三三哩		
石北線	留萌	石北	留萌	四三哩		
釧路線	留萌	釧路	留萌	四三哩		
廣尾線	留萌	廣尾	留萌	四三哩		
日高線	留萌	日高	留萌	四三哩		

線名	始點	終點	哩程
菱標線	菱標	川標	二哩
南興濱線	南興濱	興濱	三哩
北興濱線	北興濱	興濱	三哩
遠別線	遠別	遠別	一哩
音更線	音更	音更	一哩
江差線	江差	江差	一哩

作業收入並支出 (昭和二年度)	
收入	支
旅客收入	旅客收入
貨物收入	貨物收入
雜貨收入	雜貨收入
總計	總計

一、一四八、三三二 軒

驛名	旅客	貨物	取	貨	計	前年比較
函館	九八〇、六九四	一八〇、五八七	一、四八七、七六六	一、六九九、五五三	三、一八七、三一九	一〇〇、三九九
札幌	一、六四一、九三三	一一六、〇五七	一、七三九、四〇三	一、九〇六、三三六	三、六四五、七三九	一五〇、三三四
旭川	九八一、九三〇	八九五、五六〇	一、七三九、四〇三	一、九〇六、三三六	三、六四五、七三九	一五〇、三三四
夕張	九三三、三三七	一五六、六四一	一、一〇〇、〇〇〇	一、一〇〇、〇〇〇	一、一〇〇、〇〇〇	〇
上川	九三三、三三七	一五六、六四一	一、一〇〇、〇〇〇	一、一〇〇、〇〇〇	一、一〇〇、〇〇〇	〇

主要驛旅客貨物取扱數量及收入

(昭和三年中)

品目	發	送	到	着
小神手	七八八、七三〇	八〇六、六四九	九三三、四三六	一、五〇四、五六五
鹿嶋	一一八、〇七七	一一三、三六一	一二九、七六七	一一八、二七八
南谷	一一〇、六二二	一一〇、六二二	一一〇、六二二	一一〇、六二二
幌谷	一一〇、六二二	一一〇、六二二	一一〇、六二二	一一〇、六二二
室蘭	一一〇、六二二	一一〇、六二二	一一〇、六二二	一一〇、六二二
萬石	一一〇、六二二	一一〇、六二二	一一〇、六二二	一一〇、六二二
歌志	一一〇、六二二	一一〇、六二二	一一〇、六二二	一一〇、六二二
茂志	一一〇、六二二	一一〇、六二二	一一〇、六二二	一一〇、六二二
帶志	一一〇、六二二	一一〇、六二二	一一〇、六二二	一一〇、六二二
野付	一一〇、六二二	一一〇、六二二	一一〇、六二二	一一〇、六二二

主要貨物發著噸數

(昭和三年中)

品目	發	送	到	着
麥類	三〇七、一九八	三三八、一七七	三〇七、一九八	三三八、一七七
大豆	一六、六四四	一六、七九〇	一六、六四四	一六、七九〇
雜糧	一四一、四二八	一三六、一七四	一四一、四二八	一三六、一七四
生穀	一〇、九七七	一〇、九七七	一〇、九七七	一〇、九七七
落花生	二五、三六二	二五、三六二	二五、三六二	二五、三六二
生馬鈴	一八二、一八四	一八二、一八四	一八二、一八四	一八二、一八四
生玉	二、五九六	二、五九六	二、五九六	二、五九六
生林	一、七九六	一、七九六	一、七九六	一、七九六
梨	一、七九六	一、七九六	一、七九六	一、七九六

經營者名	區間	免許年月日	哩程	軌間	動力
札幌市電氣軌道株式會社 函館市電氣軌道株式會社 登別市電氣軌道株式會社 札幌市電氣軌道株式會社 江別市電氣軌道株式會社 旭川市電氣軌道株式會社 早來市電氣軌道株式會社 江別市電氣軌道株式會社 旭川市電氣軌道株式會社 札幌市電氣軌道株式會社 大沼電氣株式會社	札幌市及函館市 函館市及登別市 登別市及札幌市 札幌市 江別市 旭川市 早來市 江別市 旭川市 札幌市 大沼	大正 昭和 昭和	四三、五、二 四、一、二 三、八、一 三、六、二 三、四、一 三、二、一 三、一、一 三、一、一 三、一、一 三、一、一 三、一、一	四、一、一 三、一、一 三、一、一 三、一、一 三、一、一 三、一、一 三、一、一 三、一、一 三、一、一 三、一、一 三、一、一	電氣 電氣 電氣 電氣 電氣 電氣 電氣 電氣 電氣 電氣 電氣

未開業線 (昭和四年六月現在 道廳道路課調査)

經營者名	區間	免許年月日	哩程	軌間	動力
札幌市電氣軌道株式會社 函館市電氣軌道株式會社 登別市電氣軌道株式會社 札幌市電氣軌道株式會社 江別市電氣軌道株式會社 旭川市電氣軌道株式會社 早來市電氣軌道株式會社 江別市電氣軌道株式會社 旭川市電氣軌道株式會社 札幌市電氣軌道株式會社 大沼電氣株式會社 北道鐵道株式會社 函館市電氣株式會社 旭川市電氣株式會社 下川市電氣株式會社 輕石市電氣株式會社 旭川市電氣株式會社 三石市電氣株式會社 根室市電氣株式會社 芽室市電氣株式會社 由仁市電氣株式會社 沙流市電氣株式會社	札幌市及函館市 函館市及登別市 登別市及札幌市 札幌市 江別市 旭川市 早來市 江別市 旭川市 札幌市 大沼 北道 函館 旭川 下川 輕石 旭川 三石 根室 芽室 由仁 沙流	大正 昭和	四三、五、二 四、一、二 三、八、一 三、六、二 三、四、一 三、二、一 三、一、一 三、一、一 三、一、一 三、一、一 三、一、一 三、一、一 三、一、一 三、一、一 三、一、一 三、一、一 三、一、一 三、一、一 三、一、一 三、一、一 三、一、一 三、一、一	四、一、一 三、一、一	電氣 電氣

航路

備考 札幌電氣軌道株式會社經營線は昭和四年七月開通した。
 補助航路 昭和四年四月に至り從來の國費補助航路の中、函館小樽線及函館
 北海道的命令航路 (昭和四年四月一日現在) 道廳道路課調査) 〇は臨時寄港地を示す

線名	命令期間	區間	船名	總噸數	航海回数	總航海運數	寄港地名	受命者
小樽線	自昭和四年四月一日至昭和七年三月三十一日	函館 小樽	函館 小樽	六〇〇、一〇	自至 每月六回	三、四六五、〇〇	江差、熊石、釣掛、瀨棚、壽都、岩内、神惠内、余別、千走、青苗、青森	藤山海運株式會社
函館小樽線	自昭和四年四月一日至昭和七年三月三十一日	函館 小樽	函館 小樽	五〇三、一八	自至 每月六回	一、九七三、五〇	福島、福山、江良町、江差、熊石、久遠、釣掛、太櫓、上ノ國、乙部、蚊柱、相沼内、青森	藤山海運株式會社
函館東山丸		函館 東山丸	函館 東山丸	三〇三、〇〇	自至 每月七回	二、六七六、〇〇	小越、庶野、廣尾、音調津、猿留、大津、青森	金森商船株式會社
函館東海丸		函館 東海丸	函館 東海丸	三〇三、〇〇	自至 每月六回	一、五四八、〇〇	浦河、様似、冬島、幌滿、青森	金森商船株式會社
函館東山丸		函館 東山丸	函館 東山丸	三〇三、〇〇	自至 每月六回	一、五四八、〇〇	浦河、様似、冬島、幌滿、青森	金森商船株式會社

	近根海線室同				網小走線樽同	稚小乙內線線樽同
	上				上	上
月江形別	羅根室 白糠室 天祐丸	白根室 永久丸	色根室 東光丸	泊根室 東光丸	網小走 第二北海丸	稚小乙內 稚內宗泰丸 谷辰丸
	三九、〇〇	五三、〇〇	一九九、七〇		八六六、〇九	六五七、三〇 六九〇、六七
至自四計 十五 一月 每月 九九回	至自四計 十五 一月 每月 一〇五回	至自四計 十八 一月 每月 二四回	至自四計 十五 一月 每月 二二回	至自四計 十五 一月 每月 三七回	至自四計 十四 一月 每月 四二回	至自四計 十四 一月 每月 八〇回
	七、三二、〇〇	二、四三、〇〇	五、〇四、〇〇	四、一六五、〇〇	一、八五〇、〇〇 (直航)	三三、一八、五〇
津、狐森、上北村、枯木	砂濱、幌向、下達布、上達布、美唄達布、美唄、新篠	標津、薰別、忠類	東沸、古釜布、植内、乳吞路、内保、留別、紗那	水島島、勇留島、志發島、多樂島、單冠、ゲヤ	稚内、枝幸、乙忠部、雄武、常呂、紋別、幌内、伏木	增毛、留萌、天賣、燒尻、苦前、羽幌、初山別、風連、遠別、仙山志、鬼脇、鴛泊、杵形、香深、船泊、鬼鹿、天鹽、伏木
			根室汽船株式會社		北海郵船株式會社	藤山海運株式會社

稚小甲內線線樽同	函館森線同	千島網走其ノ二線同	千島網走其ノ一線同	同
上	上	上	上	上
稚小內樽 大典丸	函館森 共益丸	函館室 佐川丸	函館網走 花前丸 網走 吹前丸	函館守 大隅丸
六五、三一	一六四、一六 九五、〇〇	一、一八六、〇八	一、四四、四二 一、四三、四二 一、三三、四二	一、二四、四二
至自四計 至十二月 至十一月 至十月 至九月 至八月 至七月 至六月 至五月 至四月 至三月 至二月 至一月 計 至十二月 至十一月 至十月 至九月 至八月 至七月 至六月 至五月 至四月 至三月 至二月 至一月 計	至自四計 至十二月 至十一月 至十月 至九月 至八月 至七月 至六月 至五月 至四月 至三月 至二月 至一月 計	至自四計 至十二月 至十一月 至十月 至九月 至八月 至七月 至六月 至五月 至四月 至三月 至二月 至一月 計	至自四計 至十二月 至十一月 至十月 至九月 至八月 至七月 至六月 至五月 至四月 至三月 至二月 至一月 計	至自四計 至十二月 至十一月 至十月 至九月 至八月 至七月 至六月 至五月 至四月 至三月 至二月 至一月 計
五、六回	一〇、四回	一六、回	七、七回 三、六回 三、三回 三、三回 五、回	一、八七回 一、五七回 一、八七回
二、四七、〇〇	一、四九、二〇	九、七二、〇〇	九、二九、〇〇 三〇、七四、〇〇 二六、七三、〇〇 六、七五、〇〇	二、九八、五〇
志、杵形	增毛、留萌、天賣、燒尻、鬼脇、鴛泊、杵形、香深、仙山志、伏木	新湖、厚岸、青森、船川、伏木、七尾	釧路、厚岸、霧多布、根室、古釜布、單冠、標津、神戶	靜内、捫別、春立、三石
北海郵船株式會社	渡島汽船株式會社	島谷商船株式會社	近海郵船株式會社	

線名	區間	船名	總噸數	回数	寄港地	經營者名
函館室蘭線	函館 室蘭	二隻	月平均約一五回	(主トシテ直航)		金森商船株式會社
函館釧路線	函館 釧路	一隻	月	五回	厚岸、霧多布	東海汽船株式會社
函館浦河線	函館 浦河	二隻	年	一四一回	浦河方面諸港	三好商會
小樽稚內線	小樽 稚內		年	一四一回	利尻、禮文	藤山海運株式會社
釧路函館線	函館 釧路		月	三回	厚岸、霧多布、青森	東海汽船株式會社

對外自由定期航路

線名	區間	船名	總噸數	回数	寄港地	經營者名
北海道上海線	根室、釧路、上海	一定セズ	二、五〇〇	年約二〇回	臨時寄港地トシテ花咲、霧多布、室蘭、青森	近海郵船株式會社
同上	同上	萬雄丸	二、五〇〇	年約二〇回	同上	川崎汽船株式會社
小樽惠須取線	惠須取 小樽	竹島丸	二、五七六	月四回	眞岡、泊居	近海郵船株式會社
東京小樽線	小樽 東京	正保丸、宮浦丸、養老丸	一、八五六 一、三三九 一、三〇〇	月六回	橫濱、函館	同上
小樽神戶線 (西廻)	神戶 小樽	多摩丸、甲盛丸、眞盛丸	三、〇〇〇 三、〇〇〇 三、〇〇〇	月三回	函館、門司、大阪	同上
小樽神戶線 (東廻)	神戶 小樽	三隆丸、西隆丸、喜美丸	二、九三三 三、一七九 三、〇一六	月六回	函館、四日市、名古屋、大阪	同上

線名	區間	船名	總噸數	回数	寄港地	經營者名
小樽惠須取線	惠須取 小樽	臺北丸	二、四七四	月五回	眞岡、野田、泊居、珍内、鶴城	北日本汽船株式會社
小樽知取線	知取 小樽	京城丸	一、一〇〇	週一回	榮濱、元泊、泊岸、圓度、敷香	同上
小樽大阪樺太線	大阪 小樽	豐崎丸、朝熊丸、愛運丸、志摩丸、天海丸	二、〇〇九 二、〇〇三 一、九三〇 二、〇〇二 三、一三七	各船 四週一回	神戶、坂出、尾ノ道、門司、函館、小樽、大泊、眞岡、野田	同上
伏木小樽樺太線	伏木 小樽	眞岡丸、喜代丸、能登丸	一、二三八 一、四三四 一、三三五	各船 三週一回	滑川、魚津、新潟、酒田、小樽、大泊、本斗、眞岡、野田、泊居、久春内	北日本汽船株式會社
函館小樽能登線	能登 函館	大黑丸、天祐丸	七四〇 七四三	月二回 月二回	函館、大泊、野寒、榮濱、東白、浦登、帆、馬群、元泊、知取、新問、泊岸、内路、敷香、遠内、外年三回海馬島、淺瀨	同上
冬小樽大泊線	大泊 冬小樽	京城丸	一、一八〇	月四回	眞岡、野田、海馬島	同上
冬小樽泊居線	泊居 冬小樽	臺北丸	二、四七四	月四回	眞岡、野田、海馬島	同上
小樽樺太線	小樽 樺太	七原丸、愛德丸、青龍丸、菊丸	一、三九〇 一、三三九 一、八九五 一、七六九	各週一回 四週一回	函館、大泊、眞岡、野田、泊居、惠須取、東京、橫濱	同上
小樽伏木線	伏木 小樽	泰北丸	一、二九八	月三回	越中	鳥谷商船株式會社
小樽伏木線	伏木 小樽	佐川丸	一、一六五	月四回	津、尾、滑川、魚津、生地、直江、新潟、土崎	藤山海運株式會社
釧路伏木線	伏木 釧路	常盤丸	一、一〇〇	月三回	同上	鳥谷商船株式會社

阪神線	名古屋線	芝浦線	横濱線	上海臺灣線	釧路神戶線	上海臺灣線	釧路宮古線
神戶路	名古屋路	芝浦路	横濱路	上海路	神戶路	上海路	宮古路
厚田丸	雲海丸	神祐丸	豊前丸	東泰丸	登川丸	筑前丸	春山丸
二、七六	二、〇〇〇	一、六三八	二、五九九	三、〇九九	二、五〇〇	二、四八八	二、五〇〇
月三回	月三回	月四回	月六回	各船一回	又ハ五回	月二回	月三回
大阪				木宮、津山、函館、舞鶴、小樽、新舞鶴、教賀、伏	大坂、横濱、東京、名古屋、四日市	根室、神戶、鹿兒島	東海汽船株式會社
同	同	同	栗林商船株式會社	川崎汽船株式會社	近海郵船株式會社	日本郵船株式會社	

定山溪鐵道の電化

省線函館本線白石驛から定山溪温泉に至る延長十八哩の定山溪鐵道では旅客の便を圖り輸送の充實と運轉時間の短縮とを目標としてこの内札幌定山溪間十六哩を電化すべく本春來五十餘万円を投じて工事を急ぎつゝあつたがこの程全く竣工し十一月二十五日から理想的な高速電車を運轉することとなつた從來は運轉回数が少かつたのと運轉時間が豊平定山溪間一時廿分もかゝつたので温泉場行の遊覽鐵道としては全くその使命を果し得なかつたが今度は運轉回数も

非常に多く殆ど何時行つても電車があるといふわけであるし運轉所要時間も從來の約半分四十分半に短縮したので今度は遊覽鐵道として申分ないこととなつた今同社鐵道開通當時の大正八年と昭和三年との輸送成績を示せば
 大正八年 昭和三年
 乗車人員 二六、〇八八 三三、六〇五
 貨物取扱量 四八、八二九 六四、〇三三
 旅客收入 五九、〇五二 一六、四七九
 貨物收入 四三、七三二 一〇、九六九
 合計 一〇二、七八四 二七、四四八
 何れも約二倍となつて居るが電車の開通に依りこの数字がどんな風に増して行くか兎に角同社は電車開通を一轉期と

して一大發展を遂げるであらう。現在道内の鐵道及軌道で電化してゐるものは左の數社であるが
 札幌市電 開業哩數 一〇
 函館市電 九
 登別温泉軌道 五
 旭川電氣軌道 七
 大沼電氣軌道 五
 洞爺湖電氣軌道 三
 今更に本鐵道十九哩を増加した譯であるが、本鐵道は一五〇〇ボルトの高壓を使用するに不拘關係變電所車輛等全部國産品を使用してゐる點に於て從來のものと趣を異にしてゐる。

土木

道路

現在延長 昭和三年十月末日本道の

最近道路延長表

(昭和三年十月末日現在) 北海道廳調査

道路種別	札幌	函館	室蘭	旭川	留萌	網走	帯廣	釧路	計
國道	八五里	六五里	三五里	二九里	一五里	一〇里	一〇里	一〇里	一五三
地方道	二五里	一五里	一五里	一五里	一五里	一五里	一五里	一五里	一五三
市道	一〇里	一〇里	一〇里	一〇里	一〇里	一〇里	一〇里	一〇里	一〇三
町道	二、八八二	一、〇七五	一、一八七	一、二九二	一、三九七	一、五〇二	一、六〇七	一、七一二	一、八一七
拓殖費支辨町村道計	二、八八二	一、〇七五	一、一八七	一、二九二	一、三九七	一、五〇二	一、六〇七	一、七一二	一、八一七

現在道路延長は一萬三千三十八里である
 其内
 (1) 開拓使以來國費開鑿のもの 明治三十三年度迄 千三百六里
 (2) 明治卅四年度以降同四十二年迄所謂十年計畫に依るもの 千九百九十八里
 (3) 明治四十三年度以降昭和元年度迄即第一期計畫に依るもの 千四百七十一里
 (4) 昭和二年度に於て 四百二十七里
 (5) 通計 四千二百二十二里
 を開鑿したので他は地方團體又は私人に依つて開鑿したもの及び踏分道路である。

一方里當延長 續て交通の状態を見るに今や本道の人口二百五十八萬人餘、各地の産業發達は固より物資の出入、旅客の來往益々頻繁になつて來てゐるに係らず本道道路の面積に對する割合は一方里僅々一里二十四町に過ぎない。之を大正十三年末に於ける本道及内地各府縣を併せ一方里平均十里十八町と比較する時其の相距ること遠きに驚かされるのであ

本道道路の將來 本道の道路は將來人口増殖拓殖の進展に伴れ少くとも東北六縣の一方里當二里二十四町の程度の一萬七千里以上二万里に達せしむる必要がある。加之從來本道に於ける道路の施設は拓殖の進歩に應ぜんが爲め延長を主とし簡易な工法に依つて築造されたので耐久力に乏しく初冬及春分融雪に際すると

其惡路實に名狀すべからざるものがある故に拓殖道路の延長と相俟つて既成道路の改良は極めて焦眉の急務に屬すると共に近時市町村に於て其負擔に屬する市町村道の改良計畫があるの之が助成するの爲補助金を下付し其施設を擴充することとは實に重要な事業である。故に政府に於ても第二期拓殖計畫中之を豫定し着々其實施中である。

土木

第二期拓殖計畫に依る道路橋梁事業一覽 (道廳調査物より採萃)

區別	豫算總額	繼續年度	豫定事業概要			
				新設費	改良費	修繕費
新設費	九、四六、九六	昭和二十年度以降	開鑿並豫定道路延長三千五百里、一里當工費二万三千圓			
改良費	七〇、二七、二六	同上	改良豫定道路延長七百二十八里、橋梁架設一万八千七百六十三間			
修繕費	四、七九、五〇	同上	國道、地方費道全線並町村道中國費開鑿後十箇年を経過しないもの維持修繕並是等路線に附屬の橋梁架換、總延長四三、七五、一里			
道路調査費	一、四九、六五	同上	國道、地方費道敷地調査殘程三六里の完成、右同種道路中三百七里に對し境界標建設以て道路敷地の整理施行			
道路改良補助費	三、四九、九三	同上	市道二十里町村道四百里補助豫定			
驛遞費	一、三六、三〇	同上	毎年廢置し昭和二十一年度に至つて百五十五箇所にせんとする			
渡船費	四〇、一〇〇	昭和二十年度以降	毎年廢置し常に現數二十四箇所維持町村支辨渡船場九十箇所に對し昭和二十年度以降五箇年を限り其費用の約二分一補助			

自動車及自動車道路

自動車 昭和二年末現在道廳警察部調査による統計を左に摘記しよう。

署別	營業用		乗用		官公		私人		合計	
	營業用	貨物	營業用	貨物	官公	私人	官公	私人	甲種	乙種
室旭小函札	九〇〇	三〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇
蘭川樽館幌	二八七	一八九	二二	三四	一三	六八	四一	五〇	一三	四八
計	一、一八七	四〇九	一二二	一三四	二四三	一六八	二〇一	二〇〇	一二三	一四五

其計	他路	自動車		乗合自動車		官公		私人		合計	
		營業用	貨物	營業者	車臺數	官公	私人	官公	私人	甲種	乙種
計	二〇四	一七五	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇

尙道廳道路課調査による最近本道自動車數は
 家用 一六三臺 貨物運搬用 九七臺
 營業用 六〇五臺 貨物運搬用 七九臺

自動車道路

以上の如く自動車の急激なる發達は道路の構造に一轉機を劃し、既に早く府縣からは自動車道路の改良問題も生じ、國庫から相當補助するの議も起つてゐる。本道の道路計劃も亦決して從來の儘を踏襲することが出来ない。然し本道の國道、地方費道全部、準地方費道の大部分及樞要町村道の一部に大改良工事を施し自動車道路網を充成する爲めには改良費約六億圓を要する状態なので現在直ちに其實現を望むことは困難である故に當局に於ては特に必要な路線を選んで數年を期し漸次小規模の改良を反覆して自動車の通行に及ぼす支障を除去し其發達に貢獻し理想實現に一步を進めてゐる。

昭和二年十二月末現在道廳道路課調査による本道自動車道路總延長は
 國道 七里二十二町三十八間

土地改良事業

概況

本道に於ける土地改良事業は、大要之を三大別にする事が出来る。即ち排水事業及灌漑事業並特殊土壤の改良事業である。排水事業は本道各地に散在する泥炭地及濕地約二十五町歩を改良して之を農耕地として利用を可能にさせ拓殖民上に資せんとするもので既に之が事業の遂行を了し現に墾成耕地と化したものも鮮くない。

又灌漑事業は水田灌漑の事業を奨励し本道水田適地四十五町歩の造成を促進せんが爲に行ふ施設で基本調査並獎勵事業等に區分し近時勃興した水田造成の機運に順應せんとするに在る。

而して特殊土壤の改良とは客土及酸性土壤の改良で前者は泥炭地に對し普通土

て不適當であるが之に排水溝を掘鑿し旱
燥を圖る時は自然改良され充分に農地と
して利用することが出来殊に根室、釧路、
宗谷等氣候寒冷な地方の一部を除いては
利用の便を得て水田と爲すことが出来る
而して北海道拓殖費では泥炭地濕地の
改良として大小の排水溝を掘鑿して溜溜
水を排除し土地を乾燥させる事業を施行
して居る。即ち改良工事を施すと地温高
まり分解並腐蝕作用が行はれて兩三年で
普通土壤と殆んど異なる様になり畑
水田等の耕地として利用することが出来

泥炭地、濕地面積及改良濟面積表

(昭和四年三月末現在)
(道廳土地改良課調査)

支廳別	面積	同上の内改良濟面積		計	將來改良を 要する面積
		國費補助工事	私費工事		
留宗網根釧河浦膽波檜後上空石	四〇、六五〇町	一四、六六三町	一〇、三三三町	二五、〇〇〇町	一五、三三三町
計	二五〇、〇〇〇町	六五、五三六町	七、七七一町	七三、二五三町	一七五、七四七町
留宗	二〇、〇〇〇町	六、五三六町	七、七七一町	二七、二五三町	一七、〇〇〇町
網根	一〇、〇〇〇町	三、二六八町	一、八一九町	一四、一六七町	九、〇〇〇町
釧路	一〇、〇〇〇町	三、二六八町	一、八一九町	一四、一六七町	九、〇〇〇町
河浦	一〇、〇〇〇町	三、二六八町	一、八一九町	一四、一六七町	九、〇〇〇町
膽波	一〇、〇〇〇町	三、二六八町	一、八一九町	一四、一六七町	九、〇〇〇町
檜後	一〇、〇〇〇町	三、二六八町	一、八一九町	一四、一六七町	九、〇〇〇町
上空	一〇、〇〇〇町	三、二六八町	一、八一九町	一四、一六七町	九、〇〇〇町
石	一〇、〇〇〇町	三、二六八町	一、八一九町	一四、一六七町	九、〇〇〇町

る。
道廳では拓殖費で全道泥炭地濕地の利
用に關する調査を進めて居ると共に之が
改良に關する調査をも進め土地所有關係
の状況を考慮し其の一團地の面積五百町
歩以上(大正十四年度迄は一團地一千町
歩以上)の土地に對しては國費を以て排
水乾線を掘鑿し又民間の改良施設に對し
ては改良面積一團地三十町歩以上のもの
に對し其の幹線又は支線の工事費に對し
分の五の補助金を與へて獎勵して居る。

排水事業の獎勵
排水事業は前述の如く道廳では國費で直接工事を施行する
外一團地五百町歩以上のもの、外は別に
獎勵の方法を設け之が改良を促進して居
る即ち設計及工事費補助が即ち之である
(1)排水溝設計 此設計は民間の出願
に依つて施行するもので其測量人夫賃、
測量杭其他の諸雜費(一段當り十錢)を
負擔させ、道廳で出願地に就いて如何な
る方法に依ると最も容易に改良の實績を
舉げ得るやを調査研究し其設計圖書を交
付し起業の助成を爲すものである。
大正八年度より昭和三年迄に調査設
計をした成績は左の通り。
個所 一一、二〇八町
改良面積 一一七、〇〇一町
設計工事費 一、六七一、〇〇六圓
(2)排水溝工事費補助 一、六七一、〇〇六圓
歩未滿の原野に對しては現在に於て國費
で改良事業を施行する途が開かれて居な
いので工事費に對し補助金を交付し之を
獎勵をして居る。即ち現在の補助規程に
於ては改良後農耕地又は牧場として利用
し得べき段別が三十町歩以上なる時は其
の幹線及支線工事費に對し五割以内を交
付することになつて居る。今之に依り補
助指令せられた金額及改良面積を見るに
大正九年度より昭和三年迄の成績は
作數 二四

面工補
積事助
費金額
八八八
九七九
町圓
概況 本道に於ける水稻の栽培は其
起源極めて古いが世に認めらるる様にな
つたのは明治二十七年以後で爾來一般農
家の注意を喚起し明治二十九年頃から
二三百町歩の規模の灌漑計畫を爲すもの
がある様になつた。明治三十五年三月北
海道土功組合發布せられたる同年九月
同施行令發布せられたる同千四百町歩の
灌漑段別を有つ角田村土功組合、千三百
町歩の灌漑を計畫する岩見澤町川向土功
組合等相次ぎて起り現在一組合の區域あ
五千町歩を算するもの多數ある状態であ

北海道水田適地段別表

(道廳土地改良課調査作
付ハ昭和三年ノ事實)

支廳市別	水田適地段別	作付水田段別	今後開發スベキ 水田適地段別	支廳市別	水田適地段別	作付水田段別	今後開發スベキ 水田適地段別
石川知	三七、四八二町	一三、一八八町	二四、二九四町	網根	四九、五九六町	一〇、二九二町	三九、三〇四町
上川	七九、五五〇町	四二、八九六町	三六、六五八町	留宗	一〇、〇〇〇町	七、七七一町	二、二二九町
後志	八六、二三三町	四九、七二二町	三六、五〇〇町	宗谷	一〇、〇〇〇町	七、七七一町	二、二二九町
檜山	二一、四五六町	一四、六五五町	六、八〇一町	釧路	一〇、〇〇〇町	七、七七一町	二、二二九町
膽振	九、三六八町	一、四二二町	七、九四六町	河浦	一〇、〇〇〇町	七、七七一町	二、二二九町
渡島	一一、一六一町	一、四二二町	九、七四〇町	浦	一〇、〇〇〇町	七、七七一町	二、二二九町
石狩	一六、〇三三町	一、四二二町	一四、六一一町	室蘭	一〇、〇〇〇町	七、七七一町	二、二二九町
空知	一七、三三三町	一、四二二町	一六、九一五町	小樽	一〇、〇〇〇町	七、七七一町	二、二二九町
上川	一七、三三三町	一、四二二町	一六、九一五町	旭川	一〇、〇〇〇町	七、七七一町	二、二二九町
石狩	一七、三三三町	一、四二二町	一六、九一五町	室蘭	一〇、〇〇〇町	七、七七一町	二、二二九町
釧路	一七、三三三町	一、四二二町	一六、九一五町	網根	一〇、〇〇〇町	七、七七一町	二、二二九町
河浦	一七、三三三町	一、四二二町	一六、九一五町	留宗	一〇、〇〇〇町	七、七七一町	二、二二九町
膽波	一七、三三三町	一、四二二町	一六、九一五町	宗谷	一〇、〇〇〇町	七、七七一町	二、二二九町
檜後	一七、三三三町	一、四二二町	一六、九一五町	釧路	一〇、〇〇〇町	七、七七一町	二、二二九町
上空	一七、三三三町	一、四二二町	一六、九一五町	河浦	一〇、〇〇〇町	七、七七一町	二、二二九町
石	一七、三三三町	一、四二二町	一六、九一五町	浦	一〇、〇〇〇町	七、七七一町	二、二二九町

る。殊に北海道土功組合の如き一万一
百町歩の大區域を有つものを見る様にな
つたのである。而して組合法發布當時に
於ける灌漑段別は一万六千五百町歩に
過ぎなかつたが十ヶ年後の大正元年には
四万五千七百二町歩に増加し越えて昭和
四年の灌漑反別は實に十五万二千六百餘
町歩を算するの域に達し、人をして全
隔世の感ありしむるに至つた。曩に本道
産業調査會に於て本道中央部以南に於て
約三十万町歩の水田適地を選定したが右
調査會で選定をせしなかつた河西、網走、
釧路國、根室、宗谷等の各支廳管内に於
ける試作の成績に依ると水田適地として
加ふべき段別少くないばかりでなく現
在に不適地とした網走の如き一万町歩

河西亦九千餘町歩、其他釧路國、宗谷、
根室等の各支廳に於ても亦相當田せら
れてゐる現狀であるから道廳に於て更
之が調査をした結果四十五万町歩の適地
を得た。北海道拓殖費中の土地改良費に
を記述した泥炭地濕地の改良及特殊土
壤改良事業を施行するの外適地の造田を
獎勵し、將來本道の水田をして四十五万
町に選せしめようとする計畫で、之が爲
に灌漑の基本調査、灌漑溝の設計を爲す外
てこの完成をしようとして居る。
今道廳が水田獎勵の爲行つてゐる事業
の施設内容を概説しよう。

合計 水田適地反別

四五〇、二五町 作付水田反別

一五三、五三町

今後開發すべき 水田適地反別

二九七、五七町

灌漑溝基本調査 前述の本道水田適地約四十五万町歩を各支廳及市別に區分する時は前表の如くて今後の開發に俟つべきものが頗る多い。灌漑溝基本調査は是等未開の水田適地に對し造田區域、純灌漑反別、土性、引用水量、引用河川の湯水量、水路の位置、貯水池の設備、揚水機の設置箇所、工事費の概算等灌漑計畫に必要な各般の事項を調査し、水田計畫上の便に資せんとするもので、曩に大正二年から同四年に亘つて道内七十箇川に對し北海道地方費でこの調査を行ひ、適地百箇所を選定したが經費の都合上繼續するに至らなかつた。爾來五ヶ年開田の機運大に熟し曩日の調査は到底此の異常の趨勢に満足を得ることが出来ないうで更に其範圍を擴大する必要に迫つたので大正九年から拓殖費で再び調査を計畫し大正十年度以降之を繼續調査し昭和三年度迄に完了した約十五万町歩に達した。

灌漑事業の獎勵

(1) **灌漑溝設計** 水田經營の爲め灌漑溝を施設しようとする時に當つて其工事の設計は最も重要なものである。然るに民間に於ては之に適當な技術者を得難く當業者の受ける不利不便が尠くないのに

鑑み、道廳に於ては之に對し適當な施設を講ずることが緊要なことを認め明治廿七年四月灌漑工事設計調査規程を發布し北海道地方費を以て普く起業者の爲に其設計の申請に應ずることになり其助長獎勵を促進することが大であつたが造田事業の勃興と共に従來の地方費のみでは到

灌漑溝工事設計費表

(道廳土地改良課調査)

種別	箇所數	設計面積	幹線水路延長	設計工事費額
地方費	九八	八、九〇	七、八三三	五〇、八四九
國庫費	八九	八、九〇	五、九〇四	五七、四六三
合計	一八七	一七、八〇	一三、七三七	一〇八、三一三

備考 地方費は自明治廿七年度至昭和三年度末期間、國費は自大正九年度至昭和三年度末期間

(2) **灌漑溝工事費補助** 本道水田の好望を畑作に較べ遙に有利である事が一般に認められて以來土地所有者が水利の便を得て開田しようとする者が増したのも素より當然の事であるが工事費が巨額に上る關係上急速の發達を見なかつたが大正九年十二月補助規程が發布され茲に灌漑溝及土地改良排水溝の幹線工事費に對し補助が與へられる途が開かれてから其氣勢頓に昂つた。灌漑溝の補助は其の幹線工事費に對してのみ四割内外が與へ

られて居つたが其補助は府縣に於ける助成に比し著しく少額の憾があり隨つて事業經營者の困窮に陥つたものが尠くない状態に鑑み昭和元年度からは幹線及支線の工費に對し各五割以内の補助が與へられる計畫に改められた外尙昭和二年度からは市町村及土功組合の施設に係る溝路の改良工事に對しても三割以内の補助が與へられる様になり且つ造田費に對しても四割以内を新に補助される等一層この獎勵に力を入れられる様になつた。昭和

二年度以降に許可された是等の工事に對しては現に何れも最高率の補助が與へられ該事業の助成を促進されてゐる。今補助規程發布以來拓殖費を以て灌漑工事費補助を爲した段別及補助指令金額を示せば左の通りである。

年度	補助金額	件數
自大正五年	一〇、四〇四	三五二
至昭和三年	一、八五五	四四八
自大正五年	一、〇〇〇	二五三
至昭和三年	一、二五〇	二五三
自大正五年	一、七〇〇	一七三
至昭和三年	一、四〇〇	一七三
自大正五年	一、七〇〇	一七三
至昭和三年	一、四〇〇	一七三
自大正五年	一、七〇〇	一七三
至昭和三年	一、四〇〇	一七三

造田費補助 造田事業は開畑と異り水路掘鑿區劃整理等に多額の工費を要ると共に土地の自然的條件に支配されることとが大である。故に道廳では昭和元年度から灌漑溝工事費補助を増加及擴張をすると共に新に三反歩以上(昭和元年度は五反歩以上)の造田を爲す者に對して工費の四割内外を補助することとし以て水田四十五万町歩の造田を圖ることとしたのである。

鑛質酸性土壌分布表

(道廳土地改良課調査)

支廳別	段別	支廳別	段別	支廳別	段別	支廳別	段別
石川	五、八四七	後志	七、六〇七	釧路	一、五二一	宗谷	二、〇二一
空知	二、七六九	島山	五、七四三	根室	二、四一九	留萌	一、七五三
狩野	三、六六九	渡島	五、七四三	釧路	一、五二一	留萌	一、七五三
川	三、六六九	島	五、七四三	釧路	一、五二一	留萌	一、七五三

酸性土壌改良費補助事業狀況 之が改良を圖る爲め昭和元年度から道廳では改良助成計畫を樹て其事業費に四割以内の補助を與ふることとし現に實施中である。而して此計畫實施以來未だ三ヶ年を経過したばかりであるが施業者間によく理解され今後補助促進によつて一層改良面積の増加を來さんとするの趨勢に在る。

客土補助事業狀況 拓殖計畫に於ては本道泥炭地約二十万町歩の内中間泥炭及高位泥炭の一部即ち總面積六万町歩に對し反當三立坪乃至六立坪の客入工事費の五割以内を補助することとなり昭和二年而して昭和二、三年度に初めて之を實施した。

昭和二、三年度客土費補助表

走斜里灌溉排水	昭二、二、八	排灌	二、二七、三	河上下	幌河東郡	音更村	明四、六、三〇〇	灌	二、三〇、〇
川勇拂郡 鴨川村大ニ、四、三九	昭二、二、八	排灌	二、三三、三	河上下	川上川郡	音更村	大六、八、一五〇	同	一、七〇〇、〇
振鷲	昭二、二、八	排灌	二、三三、三	河上下	幌河東郡	音更村	同二、〇、八	排灌	三、六〇〇、〇
備考	昭二、二、八	排灌	二、三三、三	河上下	幌河東郡	音更村	同二、〇、八	排灌	二、九〇〇、〇

港灣事業

本道の面積の廣きこと及人口收容力の洋々たることは既に述べた通りであるが而して海岸線の總延長は千三百里で千島列島の海岸線延長約六百里を除いても尙七百餘里有する此の廣大なる陸は沃野遠く連り農牧に適し千古未だ斧鋸入らざる鬱林は天に摩し埋藏無盡の鑛床と水利の潤澤なるとは實に驚く程で、海田は世界三大漁場中の最大の一に近通して居る處から本邦漁場の優位を占め魚介海産は豊富無限に産し洵に天與の寶庫と稱すべく是れ即ち本道今日の盛況を齎らすに至つた所以である本道最近の状況は人口約二百五十餘萬各種産業勃興して其生産額約五億三千萬圓を算す今や専ら交通機關の整備發達港灣の修築改良海上運輸の刷新

港灣事業國費計畫一覽

港名	總經費		既定計畫		第二期		計	拓殖計畫	概要
	預算額	迄支出濟額	起工年度	竣工年度	起工年度	竣工年度			

新或は移民の招來産業發達の助成其他の施設に力を注ぐ状態であるが本道拓殖の功程は尙遠く未發の富源は頗る大なるものがある。本道の商港は八港であるが函館港は古來より本道の海産市場の中堅として益々賑賑を極め小樽港は数十年間發達したる本道商工中の白眉である又室蘭港は石炭の輸出港並に是等を原料とする工業地として其の使命を果しつゝあり其の他釧路港は從來主として木材石炭の輸出港として留萌は將來の石炭港内港は樺太島との連絡港又網走港は北見沿岸の避難港根室港は水産物の集散地として各其の機能を發揮しつゝある状態であるが港灣の發達は其の設備如何に依つて状態を左右すること大なるもので其修築は焦眉の急である。即ち最近本道運輸出入貨物の九割は前記八商港に依るもの

て其額は八百萬噸餘である。然しながら本道の港灣修築は多くは外廓の修築に止まり内面の設備にまだ手が延びない將來産業の發達貿易の振興に伴つて劇増する海運貨物の處理に對しては更に内面的の修築と設備の増設とに依りて港灣施設の充満を圖つたならば内外貿易は益々盛んを加へ二十年を待たずして輸出入貨物は優に二千萬噸を突破するに至るべきを信ずる。

故に本道第二期拓殖計畫に於ては以上の八商港に修築を施行すると共に、本道各地に於ける沖合漁業の發達促進を期する爲め八漁業に對しても修築を施し且つ地方團體に於て漁船の船入潤を築設するに對しても其工費に補助を與へ以て漁業の振興を獎勵し其發達を助成する計畫を保持て夫々計畫實施中に屬して居る。

(一) 漁港及其他一覽表

港名	總經費		既定計畫		第二期		計	拓殖計畫	概要
	預算額	迄支出濟額	起工年度	竣工年度	起工年度	竣工年度			
函館	二、七五、九四五	一、七五、一四五	明治四三	大正七	昭和一	昭和一	二、三、三〇〇	既設防波堤増設二千二百尺、北防波堤新設三千六百尺、埠頭二、埋築三万六千面坪、浚深二十三万八千立坪、埠頭費及埋築費の市の分擔百六十万五千圓	
小樽	一八、二七、八三〇	七、三三、五二〇	明治三〇	大正九	昭和四	昭和九	二〇、九〇〇、三三〇	港口北防波堤増設二千二百尺、南島埠頭増設百五十尺、埠頭三、埋築三万二千七百四十五面坪、浚深八万七千七百立坪、埠頭費及埋築費及岩壁費は市の分擔三万九千三百二十圓	
室蘭	一〇、〇六、八七四	四、九二、九五四	大正七	昭和二	昭和七	昭和一八	五、〇九七、三〇〇	南防波堤増設延長百間、埠頭一、埋築三万面坪、浚深十萬三千立坪、埠頭費埋築費の市の分擔 五三、三三〇圓	
釧路	一五、二九、八〇三	六、五八〇、八八三	明治四三		昭和一七	昭和一七	八、五五八、九二〇	釧路川口に水深二十五尺の岸壁二百四十間、浚深九十七万七千六百立坪、埋築五万面坪を施し且つ副港として西防波堤二千二百尺、防砂堤千五百尺築設三万四千圓、埠頭埋築費の分擔 四三七、七九二圓	
留萌	一〇、一〇、四八九	六、八八九、〇四九	明治四三		昭和五	昭和五	三、三三三、四四〇	明治四三年度からの繼續事業、今回二、九〇九、五〇八圓追加、内港浚深十八尺と二十六尺に増加	
稚内	六、四五、七三七	二、六四、〇〇七	大正九		昭和九	昭和九	三、八二二、八二〇	既成計畫昭和七年度完了、二、八四〇、四一八圓追加防波堤増設四百尺、七二二、四八〇圓支出	
網走	三、四六、九〇三	二、七五、七三三	大正八		昭和三	昭和三	六五九、六〇〇	從來の繼續事業で今回 六五九、六〇〇圓追加	
根室	二、三九、六六六	一、〇八〇、三九六	大正九	大正二四	昭和二	昭和二	一、三九三、三六〇	西防波堤五百尺施設 四七、七一七立坪浚深	
計	七八、六〇、三六三	三三、六二一、〇一六					四四、九八五、三〇〇		

形	差	別	市	尾	賣	各漁港	船入潤築	設補助	維調	計	合
杵形	九五八、四八六	九五八、四八六	大正二〇	昭和元							
江	一、四七六、八三九	一、一五四、〇九六	大正二〇	昭和三							
紋	一、八四三、四九六	八九六、〇三六	大正二三	昭和四							
余	二、二八六、七二〇			昭和三	昭和二〇	二、二八六、七二〇					
廣	一、二九九、四〇〇			昭和四	昭和九	一、二九九、四〇〇					
天	八三五、五〇〇			昭和六	昭和二〇	八三五、五〇〇					
各漁港	七、四一、二〇〇			昭和九	昭和二〇	七、四一、二〇〇					
船入潤築	一〇、〇〇〇、〇〇〇			昭和三	昭和二〇	一〇、〇〇〇、〇〇〇					
設補助	九、〇六八、九二七	六七三、五七六	明治四三	昭和二	昭和三	八、三九六、三六〇					
維調	三六、七八三、三三七	五、四四八、八九七		昭和二	昭和三	三三、三三三、四六〇					
計	二七三、八八三、三三三	四八、九三三		七、八、四、四、四							
合	二七三、八八三、三三三	四八、九三三		七、八、四、四、四							

備考 (一)(二)共「計畫事業概要」は道廳編纂「北海道拓殖計畫說明書」より抄録、他は港灣課調査による。

市町村管轄船入潤築設概要
第二期拓殖計畫に依る船入潤築設補助費を以て既に道廳より補助の許可をした市町村管轄の船入潤築設の概要を次に掲げよう。

鬼島港 本港は利尻島の東南隅に在り、對岸天鹽北見の沿岸を指呼の間に眼み南に萬歳岬の岩礁突出し北ヤムナイ

岬と相對して自然の灣形を形成してゐるが一朝西南の強風に際しては港内に襲來する怒濤の爲避難の場所なく爲に毎年出漁漁船の損傷を繰返してゐる状態に於てを以て唯一の産業とせる鬼島港の消長に及ぼす影響の甚大なものがあるに鑑みて船入潤築設の之の慘害を防止すると共に近時益々發達の趨勢に在る沖合漁業の

振興を策せんとするのが目的である。

工事の種類
南防波堤延長 二百三十六米四
北防波堤延長 百六十三米三
浚渫面積 一万七百五平方米三
干潮面下 五米四五
埋築面積 一万三千七百七十三平方米〇七

被覆面積二万三千六百五十六平方米三
工事の着手及竣功年度 竣功昭和七年度
着手 昭和二年 竣功 昭和七年度
築設費 總額三十五萬圓
財源内譯(拓殖費補助二十一萬圓
起債八萬二千圓、基本財産支拂五萬圓、特別會計繰入金三千八百圓、一般會計繰入金四千二百圓)

神惠内港 本港は古宇郡神惠内村に在り地勢南北に長く南は泊村に接し東北は山嶽を以て美國、余別の兩町村に界する前面一帯は日本海に面し住民は往時がら漁業を以て生活の資源として來たが該漁業は近時漸く不況に傾き逐年收穫減退したので沖合漁業の振興を圖らんとし大正十五年村費で船入潤築の工を起し總工費五萬八千五百圓を投じて防波堤延長三百四十八尺船潤防波壁百三十二尺及埋築護岸等の工事を施したが該工事の築造成ると共に當業者は競ふて發働機船の建造を爲し斯業の發達に伴ふ利用が益々繁劇を爲し爲めに狹隘を告げる状態に至つたので更に擴張工事を施し以て之が趨勢に策應せんとするのが目的である。

工事の種類
防波堤延長 二十六米八
既設防波堤胸壁延長 八十五米
既設防波堤補張同 四十五米四
船潤 東堤同 三十七米
同 西堤同 三十七米

浚渫面積 三千八百九十四平方米三
干潮面下 自二米至一、八米
埋築面積 三百六十五平方米一九
被覆面積 三千八百九十四平方米三
工事の着手及竣功年度 竣功昭和三年度
着手 昭和一年 竣功 昭和三年度
築設費 總額八萬五千圓
財源内譯(拓殖費補助五萬一千圓、基本財産支拂三萬四千圓)

本財源支消三萬四千圓) 本港は壽都郡壽都町に在り其開發比較的古く日本海に面する屈指の都邑であるが近時沿岸漁業の不振に伴ひ往時の賑盛を見る事が出来なない状態に在る此の情勢に鑑み漸次勃興の機運に在る沖合漁業の發達を圖らうとして大正十四年町費で船入潤築の工を起し工費七萬五千八百七十一圓を投じて防波堤六百三十五尺(南防波堤六百六十尺北防波堤四百七十五尺)埋築五百二十六坪浚渫千四百坪を施行したが工事完成後の利用状況は未だ充分其効果を收めることが出来な憾があるのを更に擴張工事を施し既設工事と相俟つて其の目的を達せんとするの目的である。

工事の種類
防波堤延長 百三十米
既設防波堤胸壁延長 十四米五
浚渫 二千六百二十立方方米
干潮面下 一米八
埋築 九百六十立方方米

被覆面積 七千五百二十一平方米
内既設船入潤 四千九百平方米
工事の着手及竣功年度 竣功昭和三年度
着手 昭和二年 竣功 昭和三年度
築設費總額 六萬三千圓
財源内譯(拓殖費補助六萬三千圓)

泊港 古宇郡泊村の本港は地勢南北に伸び後方は高丘相連つて海岸に迫り山麓狭小にて平均に市街を形成して居る方面一帯は日本海に面し漁場として屈指の漁村であつたが近時は等沿岸漁業の不振に伴つて沖合漁業の勃興を見既に本港を根據として出漁する發働機船は其數十隻に達し益々發達の趨勢に在るも一朝南西の風浪襲來するときは沿岸一帯怒濤の攪亂する處となり船舶の碇繋至難な事は勿論之が爲幾多の損傷を蒙るの實況に在るので船入潤の築設に依り之が慘害を防止ぎ以て斯業の發達を圖らうとするのが其目的である。

工事の種類
南防波堤延長 百五十四米
北防波堤延長 二百十四米
浚渫面積 三千百平方米
干潮面下 一米八
埋築面積 千二百六十五平方米七
被覆面積 三千百平方方米
工事の着手及竣功年度 竣功昭和三年度
着手 昭和二年 竣功 昭和三年度
築設費 總額七萬八千圓

財源内譯(拓殖費補助四万六千八百圓)基本財産支消三万一千二百圓) 船泊港 禮文郡船泊村の本港は北見國禮文島の北方に位置し小樽港を距る海上百四十二哩の地點に在る。地勢南北に長く南方香深村との村界を除いた三方は海岸に面し曾ては本道に於ける有数の漁場として水産年額百七十餘万円を算したが近時漁獲物は昔日の隆盛を見ることが出来ず沿岸漁業の不振に伴つて漸次沖合漁業の勃興を見る様になつて来たが是等漁船の避難又は出漁根拠地とすべき施設なく斯業の發達に及ぼす影響の不尠もあるに鑑み茲に船入潤を築設して之が發達を助成せんとするのてである。

工事の種類
 南防波堤 延長 六二十五米
 北防波堤 同 二十二米
 船泊港西堤 同 九百三十三平方米
 船泊港東堤 同 九百三十三平方米
 被覆面積 一万九千二百七十七平方米
 工事の着手及竣功年度 昭和二年度 竣功 昭和三年度

河川事業計畫表

區別	豫算總額	繼續年度	豫定事業概要
河川調査費	六七、四八七	昭和二年度以降十年	調査河川二十一、延長百十四里觀測所毎年百六十五箇所

(道廳編纂「北海道拓殖計畫説明書」より抄録)

河川事業

第二期拓殖計畫に於ては河川事業を河川費と治水費の二に分け前者には總額三千五百五十七万八千餘圓を計上して本道重要河川に對して治水計畫及設計調査を行ひ且河川の監視並河流を梗塞する障害木の除去及應急的護岸工事を施し、後者に於ては一億五千三百七十七万一千餘圓を計上して河川中利害關係の重大なものに對し組織的に治水事業を行ふことになつて居る。即ち起工中の石狩川本流外四箇川の残程及既定計畫上大正十五年度から起工豫定の豊平川の改修工事の完成を期し更に進んで年々出水被害の増大する石狩川第二區工事外五箇川を選び新に治水工事を實施することになり。爾來本計畫によつて工事實施中である。

着手 昭和二年度 竣功 同年度
 築設費 總額 五万五千五百圓四十六錢
 財源内譯(拓殖費補助二万一千六百七十圓、鐵道省補償金一万九千三百十八圓、一般會計一万四千四百四十七圓四十六錢)

治水事業計畫表

(既定事業繼續)(同上)

區別	豫算總額	繼續年度	豫定事業概要
河川監視費	一、四三、六八〇	同上	河川監視毎年四十六人常置、河川及堤防敷地取締、水位觀測監視
河川浚渫費	九五、七〇〇	同上	重要河川二十六箇川は毎年二十里浚渫
護岸工事費	三、三六、一八〇	同上	重要河川二十六箇川の應急處置として護岸工事施行、延長二十万九千四百四十二間豫定
堤塘敷地整理費	三〇、四四四	昭和二年度以降十年	六十三箇川、延長六百九十里に施行
石狩川治水費	三三、三三、七〇〇	昭和二年度以降十年	本流並支流たる江別、夕張、千歳川、豊平川の治水工事
本流	一六、八九、七〇〇	同上	河口から對雁までの兩岸一万九千町歩浸水除去、荒蕪地九千八百餘町歩開發並上流旭川、深川、瀧川三市街の洪水汎濫被害の防護
江別、夕張、千歳川	九、〇六、二〇〇	同上	三川沿岸三万八千町歩浸水除去、荒蕪地二万八千八百餘町歩開發促進
豊平川	九、三三、八〇〇	昭和三年度以降十年	札幌市及下流沿岸六千九百町歩浸水除去、荒蕪地四千九百町歩開發促進
常呂川治水費	二、八九、二〇〇	昭和三年度以降十年	下流下常呂原野及上流端野、訓子府間の原野六十餘町歩浸水除去
釧路川治水費	四、六七、三〇〇	昭和三年度以降八年	荒蕪地千餘町歩の開發
十勝川治水費	一八、二二、四〇〇	昭和三年度以降十年	下流沿岸原野一万二千町歩浸水除去、荒蕪地六千九百餘町歩の開發促進
十勝川治水費	一八、二二、四〇〇	昭和三年度以降十年	河外二郡に亘る二万六千餘町歩浸水除去、荒蕪地三千七百餘町歩開發促進

治水事業計畫表

(新規事業)(同上)

區別	豫算總額	繼續年度	豫定事業概要
十勝川治水費	一八、二二、四〇〇	昭和三年度以降十年	河外二郡に亘る二万六千餘町歩浸水除去、荒蕪地三千七百餘町歩開發促進